者なり、かゝる總ての狀態を、怒りの躁暴狀態といふ、憤怒的行爲の固有なる徵候は其の行爲を起す動因機能の短狹なることこれなり、感覺興奮は觀念の其の間に介在し作用することなくして運動興奮に移轉するものなり、憤怒こゝに發すれば他を顧るのひまなく反省考慮何處にか潛遁し、制止の觀念も影を止めず、無分別にも各自固有の人間幸福權利の上のみ一徹に考へ其を保護伸張せむとの考へより運動機の上に及ぼし、あるまじき行爲をなし甚しきは法羅に纏包せらるゝに至る、この運動の勢(エネルギー)は屢、不可測の度に亢進することあり、彼の癲癇狂者が一朝憤怒を激發する時は烱々たる眼は血走り怒髮天を衝かむ計りにて衣を裂き器を毀ち財貨家屋を燒きなほ飽き足らず人畜を害し、果ては自らも自傷し其の狀態の凄じき恰も瞋恚の猛虎の狂暴するが如き有樣を呈するは皆之れ憤怒症の致す所なり、かゝる狀態を憤怒運動の不調節又離調(Incoordination)と說く人あるはさることにて、こゝには觀念の調節性及び整規的影響は極めて僅微なりしに因るものにして實際の

不調節症

アタクシーにも亦皮質的にも尋常現はれざる處のものなり、之れを憤怒行爲の不聯合(Incohärenz der Zornhandlung)とするは一層可なり、不聯合は亦觀念經過の上にも及ぼすものなり、怒の頂上に達する時は只だ個々の觀念のみ墮流的に起り聯想的に結び締むること難く卽ち考慮することなし、かの患者がいかにしてさるいみじき憤怒を發生せしか其の動因を記憶せず或は其の憤怒中いかなる行爲をなしゝか其の記憶朦朧(おぼろ)げに疎漏性健忘症を呈するは之が爲めなり、こは法醫學上にも注意すべきことなり。

刺戟症の出現

刺戟症の出現――發揚性感情に來ることは既に述べたり、續發性憤怒感動としては妄想及び妄覺の內容に相當し呈はるゝことあり、されどかゝる原發性妄想、妄覺に來たる者は病理學上憤怒感動に非らず、原發性憤怒感動は精神病者に見ること最も多し。

(一)　生來の癡狂

(二)　癲癇性精神病　殊に生後の癲癇性癡狂

(三) 生後の癡狂

(四) 神經衰弱性精神病

憤怒感動の最も重症なるものは癲癇より來るものなり之れを癲癇狂(Furor Epilepticus)といふ、神經衰弱症に在りては屢、非常に執念深き憤怒感動を呈す(神經衰弱性憤激)るものなりこは個々の感動の度の劇しきに因るものなり。

又憤怒症は多くの精神病の初めに前驅期中に來る、例之麻痺狂、妄想狂などの前驅證候として現はる、又多くの急性精神病の恢復期に於て刺戟症を來たすこと稀ならずこの際間々滯泣をかぬることあり、こは例之其の發揚感情の頂上に達しながらなほ毫も憤怒感動を起さゞるか或は極めて僅かに之れありし躁狂の恢復期に之れを見るものにしてか、る患者はともすれば僅計りの事に腹立ち泣くものなり。

其四、癡呆症又無情調症(Krankhafte Apathie)

智性情調及び反射的覺性情調の病理的に缺くるもの之れを癡呆症と

癡呆症

いふ、こは全體に缺くるものと一定の觀念及び感覺域に限局し缺くるものと二樣あり。

全汎性癡呆症

(一)全汎症癡呆性(Allgemeine Apathie)とは世間に癡呆と稱するものと一致せり總ての智性、情調及び反射的情調は同樣に減退するか全く缺如せり、該種の癡呆症は多くの鬱憂狂に見ること最も多し、患者は今迄萬事に注意深く些細なる事柄にすらいたく心を勞きしとはうらうへに、麗はしき花、清らかなる月、其を見ても樂しとおもふ心なく嬉しきふし悲しきこと、其等に遭遇しても嬉しともあはれとも露感じなく浮世に何の望みもなく何の厭ふ處もなし、將た何の恐る、處もなく、さながら木像の如く淡く、其の熱かりし心臟は冷々石の如く要之所謂喜怒哀樂の情は全く缺けたるを見る、一二の感動はこれ等の患者に在りてはなほ保存さる、ことあり、かく疼痛性感情其の他の情調の缺くる時は之れを無情調症(Gefühllosigkeit)といふ、上に擧げし患者は之れを現はせり、總てなほ其の他の感動生活も消失するものなり、又神經衰弱性精神病遲

無情調症

鈍狂などにも之れを見る、かゝる患者は自然の樂みなく、親族の愛情もなく、何事をなしても興味なく百事冷淡となる者なり、遲鈍狂に來たる癡呆症には又多くは鬱憂感情缺け感情冷かなり、全汎性癡呆症に接する時は一般に注意を要す、これ患者の無情調はうち見たる處隨意的にして、例之妄想、妄覺の爲め總ての感動錯誤を來たし其の障礙より運動制止を來たしゝが如き狀態を呈するが故に注意せざればこれ等と誤診することあり、或は總ての感情缺乏せるが故に周圍との關係も不慮の事變の出來ずとも限らざればなり。

限局性癡呆症

(二)限局性癡呆症(Circumscripte Apathie)智性及び覺性情調の限局性虧缺は癡愚者に見ること多し、生來の癡愚に在りては概ね一定の智性情調發育せざるものにして生後の癡狂に於ては一定の智性情調は次第に耗失するものなり、生來癡狂の最も重症なるものは總ての情調は概ね唯一二の覺性情調に止るものにして、火を見てほゝゑみ、影を見みて喜び或は色情的の滿足などの情調に止るものなりこは生後の癡狂の重症なる末期に之れを現はす事あり、かく極端なる場合には之れを全汎性癡呆症とするも可なり、生來癡愚者は限局性虧缺を呈すること甚だ屢、なり則ち生來癡狂の中等度の者に在りては、憤怒、嫉妬、憎惡、愛情、恩誼、偕ては希望、恐懼、などはよく發達せる者あり、されど精神上興味の發達に至りては未だ之れを見ず、周到なる教育もこれ等にありては本來の範圍內に止り技術及び庶物に對する興味なし、農樵なども其の職業を業とせず更に興味なし、生來癡愚の最も輕き者にありては情調虧缺は道德上情調に限れり患者は、自恣自儘の感情增長し道德觀念に附帶せる情調は甚だあはれなり、既に述べしが如く生來癡狂の輕度の者は間々道德上觀念を構成し口には善、惡、邪正を語れども其は毫も其に適應せる感情と結合する事なし、總て生來癡狂の輕度のものは教育によりこれ等の觀念を養成し尋常人に近からしむるを得、されど其は尋常の感情の如くならしめむこと出來べからざるとなり、患者はよく其は善き事、其は惡き事、といふことを知れり、されど、尋常の人に於けるが如く善に

は陽性情調伴ふごとく、惡の觀念に陰性情調伴ふことなし、全く之れを缺乏せり、故に總論に述べしが如くこの場合には或る觀念の動因競爭上に於ける影響は其の情調の强さに關係するものなるが故に該患者には道德概念は少も其の行爲上に影響なく其を支配することなきなり、かるが故にかゝる患者にありては悖德的或は犯罪上の行爲をなすこと屢〻之れあり、かゝる生來癡狂の一種を、道德性癡狂又、悖德狂(Moralische Irresein od. Moralinsanity)といふ。

生後の癡狂に於ては癡呆症は最初道德情調より耗失するものあり、患者は行儀恰好の情調を失ひ風采こゝにみたれ其の言語行爲は不埒なり、殊に夙に色情的廉恥感情侵され之れを耗失す、深切の感情うせて不深切となり、殊に中酒狂癡狂にありては不篤實となり、美及び善に對する精神作用は絕無となる正邪の間の感情的分別も不確となる、又生來癡狂には道德概念はかくてなほ長く保存さるゝことあれど其は更に行爲に影響を及ぼさず之れ其の情調既に敗頽せればなり共に悲むべき他人の不幸を見てもあはれとおもはず却て其を快とし、共に喜びの同情を表はすべき他人の幸福を見ては却て嫉妬の念を起し其を毀害せむとするに至る、こは生理的にも亦然ることあり、されどかゝる患者に在りては其の性格一變し卽ち性格變化(Charakterveränderung)を來たしゝに因る、こは始終其の人に接し其の人の精神狀態を知れる人は夙より其の生格變化を來せる一定の時期を知ることを得らるゝものなり、生後癡狂の一層進む時はこれ等の情調虧缺も一層進み職業上家庭上財產上等の快味なく終には只だ一二の覺性情調のみ殘り上に述べし全汎性癡呆症を呈するに至るなり。

癡呆症の他複雜なる觀念の情調の限局性虧缺は亦叡智虧缺なき多くの慢性精神殊にも現はるゝものなり、殊に妄想或は迫想を有せる慢性精神病患者には屢〻斯る精神上興味の限界の狹小となるものなり、佛國マグナン(Magnan)氏はかゝる狀態を、似非癡狂(Pseudodemenz)といへり、これ等の患者は毫も叡智虧缺なけれど一二僅少なる病的觀念により

似非癡狂

聯想は偏頗なる特種の作用をなし其の結果として多くの情調虧缺を來たすものなり、更にいはむには或る病的觀念ある時は聯想は其方向に偏頗に傾き其の方の勢勝つが爲に他の正當なる複雜なる興味は之れが爲め滅亡するものなればなり、これ等の患者は、行儀、恰好正邪などの障礙は少し、されど社會的感情及び技術、學問、政治などの興味に至りては甚だあはれなり、患者の意想は自尊誇大的となり其の行爲は自恣、傍若無人なり、かゝる感情虧缺は亦慢性神經衰弱症にも現はるゝことあり、或は精神病ならずして單純なる慢性身體的疾患にも來たる事あり、老人などの偏屈なるもこれが爲めにして殊に慢性身體的疾患を兼ぬる時に然りこは身體虛弱となり之れが爲め類似せる虧缺を來たすなり、老人などには生理的にこれ等の智性情調適宜に狹少となり所謂老人偏屈と稱するなり行くものなり。

感應變換症

其五　感情の疾病性變換症又感應變換症 (Krankhafte veränderlichkeit der Gefuhle resp. Stimmungen)

變り易きもの豈かで唯秋のけしきのみならむ、定めなきもの何かでうたかたのみに限らむ、精神病者の感情生活にも亦かゝるものあり、うらゝかなる春の野の千種の花はおのがしゝほゝゑみて胡蝶の此處彼處ととびかひてうち戯れたる幾群の若駒の樂しく遊べるが如きのどかなる感情も忽ちにして迅雷疾風となり樹を折り枝を卷き霹靂天地も震動し霊雨山岳も崩壞せむ計りなる狀態に變ずるは感情變換症に罹れる患者に屢、見る處なり、いやで少しく該症の起る所以を述べむ、われ〳〵健人の智性及び反射情調は一定の固執性 (Beharrlichkeit) ある者にして一定時間ならでは變化せざるものなり、則ち一定時間に於て新しき刺戟あり其が爲め新しき感覺を惹起し舊時の聯絡結合及び其より起る分散傳達して他の方向に變排するに非らざれば其の情調の分散傳達及び反射の機能は一定の狀態に止る者なり、然るに或る精神病者に在りては其の情調及び其の總合より感應は屢、變換浮動を來すものなり、かゝる患者の常にして初め其の患者に接する時はいかにも嬉

しく樂しさうに動作進退輕妙にして談笑解頤の言語を交へ或は猾稽的の風姿をなし或は呼ぶに金蘭の友を以てし畏友を以てし或は師父を以てしいかにしてわが珍客を優待せむかと注意到らざる處なき、折しも今迄の快活なる機嫌一變し披展せし胸襟はや閉鎖され眼凄く眉揚り容姿一變して金蘭の友畏敬する友も今や仇敵の如く呼ぶに癡漢を以てし賊を以てし、殊に醫家に對しては毒醫を呼ばり或は自由を束縛して監置幽閉する者なりと憤り口唾を沫し腕力沙汰にも及ばむとするかと思はるゝに、復もや機嫌は轉し、悔ゆるが如く悲むが如く訴ふるが如くさめ〴〵と泣き、或は聲張り上げて啼泣し坐ろ涙に咽ぶをあはれとうち守れば俄かに愉快なる感情に復し且つ笑ひ且つ語り鼻歌などうたひいづる者あり、之れ其の感情生活は侵されこゝに感應變換症を來したればなり、健人にも間々之れに類似せる場合なきに非らず、例之われ〳〵が悲歎の涙にかきくれ居る際偶然傍なる人の解頤的言動をなす時はわれ知らず苦笑を漏らすとありこの泣き笑ひは尚ほ其

緩發性感應變換症

に相當せる混合性觀念の內容に一致せるものにして悲哀と喜笑と互に並び立つものなれども、精神病者にありては之れと異り最初の瞬間に於ける悲哀性の觀念圏は次ぎの瞬間にはやはや既に患者の意識中に消え失せて影もとゞめずこれに隨ひて感應は心底より種々に變換するものにしていはゞ演劇の悲劇と喜劇と幕毎に變り行くが如きものなり、かゝる感應の病理的變換症は精神衰弱症の主證候をなすものにして叡智虧缺ある下等社會癡愚には常に見る處なり、かく觀念の聯絡結合の鬆疎にして堅固ならざることは叡智虧缺症には多くは特徴にして其の結果として情調の分散傳達せるものを確かに保持鈜鎖すること能くはざるなり、かるが故に例之上に述べし患者の狀態に於けるかく新しき感覺及觀念は既に一瞬時以內に情調の新分散傳達を生じこゝに感應圏に影響を及ぼすものなり殊に該感應變換症は痲痹狂には殊に固有なり、

以上述べしは原發性感應變換症の場合なりこゝに感覺及び觀念の變

化あるが爲めかゝる感覺變換症は續發することあり、之れを續發性感應變換症といふこは原發性のものと異り感覺及び觀念の內容の病理的に不確固となり且つ聯絡を失ひ其の結果として感情の變換を來たすものなるが故に原發性のものゝ如く變換甚しからず、換言すれば續發性のものは感動域に病あるに非らず、例之こゝに患者あり其の幻覺內容の悲哀性のものは愉快なるものと混合し不規則に變換せむには該感覺の變換は之れが動因となり感應變換症を續發するなり、或は又若互に相反對せる內容を有せる妄想あり該妄想內容互に之れが動因となり(例之急性單純妄想狂に於けるが如く)か或は、例之妄想狂の奔想狀態に在るか殊に臟躁性精病神に於けるが如く或る場合には悲哀なる內容現はれ且つ愉快なる內容現はれむにはこゝに感應變換症を來たすべし此の際かゝる觀念の急速なる變換は之れが動因となり其の果として感應變換症を來たせしことといふ迄もなきことならむ、故に續發性感應變換症は診斷上さのみ價値なし。

上に述べし感情變換症に於ては新觀念の興奮により新感覺の僅微なる興奮を來たし感應變化を來たすこと特徴なり、他の病理的感應變換症に在りては其の感覺內容には變化の認むべきものなくして多くは觀念內容の突然なる僅微の變動ある時之れが爲め感動變換症を來たすものあり、或る患者は例之愉快に談話をなす中突然離隔せる全く何も意味なき不快なる追想像の瞬間に發達し、之れが爲め其の感情を全く變換せることあり、又感覺の反射情調も突然變換するなり、愉快に優しき言葉も直に嫌惡の言葉に變はり、患者は曾て自ら得意がり自負せし職業も突然嫌ひとなり、彼の事をするかとおもへばまた此の事に移り、此の事を誇りがに勤むるかとおもへば他の事に移り更に定めなし、この異常の尋常なる日常生活上に現るゝ時は之れを『移り氣』といふ、世間婦女子の變愛上に現はるゝ彼の『浮氣』『淫奔』と稱するものは之れなりこの移り氣(Launenhaftigkeit)は殊に臟躁狂に見る處にして特徴なり、これ等の神經症にありては觀念內部に於て潛在觀念種々に變換移轉

し卽ち吾々精神域には上らざる更にいはむには其の人の意識中に現はれざる追想細胞中なるR₁の皮質的追想變動を來たし、隨ひて急速なる感應を變換來たすものなり、かゝる觀念內容の輕度の變動により起る感應變換症は臟躁に來たること最も多きが故に又直ちに之れを臟躁性感應變換症(Hysterische Stimmungslabilität)といふなり。

偖て以上陳述せし情調障礙五種の他に種々證候の混合せるものあり一々枚擧に遑あらず、殊に癲癇などには該癡呆症の道德性虧缺と、刺戟症と結合せることあり、例之癲癇性癡狂に於けるが如し、總て以上に述べしものは定型性にして且つ臨床上屢遭遇するものにして診斷上肝要なるものなり、若し各個の病理に至りては感應及び性格の特殊なる病理的變化の述ぶべきものなほ夥し。

又情調障礙は或る個々の觀念に限局し隔離的に呈はるゝことあり、かかる智性及び反射情調の隔離的障礙は所謂緊張狂(Intensions psychose)に最屢見る處なり、嘗て神經病素質を有せる一法律家あり、瑞西國に靜養的旅行をなしゝが、アルペン山峠なる敷石をなせる牛馬路にて滑りて痛く其の足を挫きたり、これが爲め案內者に凭らざるべからざるやうなりき、其の足恢復後毫も危險ならざる道路を歩みてもなほ『若しや再び案內者の肩に凭らざるべからざることはなきか』との不安心を感じき、爾後この苦悶と不安心とは常に去らずして鄕里に歸りて後も敷石せる場所或は廣く敷石せる街路に至る時は恒にこの苦悶と不安心とを生じきといふ、此の例につき之れを見るに山路の敷石といふ不關性なる視覺と怪我といふ不快なる感覺とは同時に起り、この二つの感覺より殘留せる追想像はこれによりて聯絡結合をなし、分散傳達の法則により怪我の觀念の陰性情調は敷石の追想像に移行せるものなり、爾後屢、繰返す敷石せる路の感覺は以前に述べし反射により或る陰性情調を感ずるやうなりしなり、かくして患者はかゝる路を通過せる時再び苦悶感情を生ぜしなり、該患者に就きては情調移行機轉は全く實際上生理的範圍內に在りされど其の分散傳達及び反射に至りては既に

生理的範圍を脱し病理的となりしものにして該患者が通過する敷石せる場所及び道路の視官的感覺及び觀念には常に陰性情調を移轉したるものなり、これ等の場合には既往に遭遇せし不幸の追想は最早再生を要せず、敷石したる場所を歩くと觀念と其に關係ある視官的感覺とは直ちに陰性情調を生じ之れにより或る苦悶感情を誘發するものにしてこの苦悶は優勢を占め終に患者をして敷石せる場所を通過することを避け故らに通路を迂回せしむるなり、この場合に於ては尋常範圍を超越せる一定の個々の觀念に對し分散傳達及び反射の總合及び擴延の致す處なり、多くの疾病性特異質 (Pathologische Idiosynkrasien) 同生來の物嫌ひ (Antipathien) 及び同情 (Sympathien.) も亦之れと同様なる方法にて説明さるべし、一般に陰性情調は陽性情調よりもかゝる隔離性病理的分散傳達を來たし易き傾性を有するものなり。

第四章　聯想の障礙 Störungen der Ideenassociation.

諸君！聯想は既に述べし如く觀念序列 E……$V_1 V_2 V_3 V_4$……B とやうに感覺を以て始まり運動を以て終るものにして該觀念列の經過はこれのみに止まらずなほ不斷他の多くの感覺の起るにつれ種々經過を營むものなり V_1 V_2 V_3 と次第に起りたる觀念は物質域なる R_1 の變形せる R_v に一致相應するものにして既往の感覺興奮の物質的殘留は性質に於て聯合機轉により或る狀態に變形し精神的並行機轉觀念を結合するものなり、かゝる變形機能は又觀念の喚起或は再生 (Reproduction) といふ、觀念は必ずしも悉く活動するものに非らず一部は潛在性となり既往感覺興奮の物質的殘留物 R_1s と關連するものにして聯想の機轉によりて其の潛在狀態より喚起され活動性となり卽ち精神域上更にいはむには吾人の意識中に現はるゝものなることは既に諸君の知らるゝ處ならむ。

腦髓皮質に於ける聯合機轉の經路或は之れを心理學的にいはむには聯想に於ける觀念の撰擇及び序列は全く一定の法則により定まるも

類似聯合原則

のなり其は

第一今或る感覺Eは其に應じたる觀念V_1を生じたりとせむ然るに基礎なる感覺E_1は今得たる感覺Eと大なる類似點を有せりとせよ、かる時は之れを類似聯合(Aehnlichkeits association)といふ、該原則を類似聯合の原則といふ、例之今われ〳〵が或る小兒を見たりとせむにこゝに感覺(E)は起らむ、然るに其の小兒は曾て一度見し小兒にして其の當時の感覺(E_r)を生じ視覺的觀念(R_i)を殘留せしものなりとせむ、然る時は先づ以前見し追想起り、更にいはむには潛在觀念R_iはR_vに變形し其に相應一致せる觀念V_1を生ずるなり、或は又われ〳〵がこゝに、撫子によく似たる花を見たりとせむ、其に應じて同樣なる潛在觀念の基礎となりし感覺と今見る感覺とは甚だよく似たりこゝに起りし觀念は撫子花なり、而て撫子によく似たる花を見て起りたる初めの觀念も同樣に撫子花なり、卽ちわれ〳〵は新に花を見て撫子花を追想するなり、かくE とV_1と隨ひてE_r V_1間に同一(Gleichheit)といふもの成立つ時は之れを觀念の再生或は記憶(Widererkennen)といふ、吾々の聯想は屢〻未だ確かならざる考慮によりて始まるものなり。

記憶

同時聯合原則

第二、第一の場合に於てV_1のことは明かに知られたり、然らば其の他のV_2 V_3 V_4とやうにこの觀念列はいかにして定まるべきかこは主もに同時聯合(Gleichzeitigkeitsassociation)の原則により定まるものなり。

該原則によれば各觀念は其の順序に隨ひ順次恆に聯合的親和をなせる觀念を喚起するものにして其聯合的親和は或は觀念自から或は觀念の基礎なる感覺と屢〻同時に起る處の觀念なり、例之吾人が屢〻同時に薔薇を見且つ其の香を嗅がむには、其の結果としてこゝに薔薇の形容觀念と薔薇の香の觀念との間に或る狹き聯合的親和(Associative Verwandtschaft)といふもの成り立ちこの聯合的親和の結果としてわれ〳〵が薔薇の形容を考ふる時は其の香のゆかしさも知れ、其のゆかしき香を考ふる時は其の花の麗しきこともこころに浮かむ者にして語を換へていはむには薔薇の視覺觀念V_1は其の後列なる薔薇の香の觀念V_2を喚

起するものなり、これより同時聯合原則の生理學的解釋は會得せられなむ、かくて幾回となくV_1 V_2の觀念同時に起る時はV_1 V_2に一致せるR_{v1} R_{v2}の發動する雙皮質原素G_1及G_2の結合經路は其の度毎に共に興奮し殊に傳導易くなり更にいはむには傳導機能は錬磨さるゝ者なり、該錬磨の結果として皮質原素G_1に發生せし興奮はなほ廣き傳播をなす處の無數の神經纖維により其の傳導抗抵の最も少き經路を通りG_2に達しこゝにR_{12}はR_{v2}に變形し、V_2は精神域に上るなり、こゝに引きたる例は二つの簡單なる觀念の聯合に於ける一般を示しゝものなれども實際吾々の觀念はかゝる簡單なるものに非らず實に非常に復雜せるものなり、既に述べしが如く多くの觀念は一つの皮質要素に結合するものに非らずして全皮質に彌蔓せる多くの要素に結合するものなるが故に又同時聯合も亦二個の簡單なる觀念V_1 V_2の間に止らず、V_1 V_2中に多數合まる、部分的觀念隨て部分的興奮の間にも及ぼすものなること知られなむ、加之かゝる複雜混合せる觀念も亦同時聯合の法則に關係ある

こと知らるゝならむ、然らばいかにしてV_1或は其の部分觀念と聯絡結合せる多くの觀念は事實上V_1より生じV_2の位置を占むるか、いかなれば或る場合にはVより觀念Aを生じ他の場合には觀念Bなどを生ずるか、將たいかなれば或る知人の追想像は一度彼を見し田舍の觀念に他回は今滯留せる都會の觀念に、三回は彼が帶ぶる官職の觀念に關聯するか、其はV_2の位置に於ける諸他の觀念A、B、C、D、などの一定度の競爭の發起するものなり、いかにして彼此の觀念發動の分別をなすか、これ聯合的親和の度により分別さるゝ者なり、此の要素により或る觀念V_1は恆にVと最も屢、且つ殊に新らしく最も屢、同時に生ぜし所の觀念V_2を生ずるなり、されどこの聯合的親和の他なほ他の要素ありて其の聯想經過上に作用する者にして其の殊にV_2の位置に於て一定度に作用する觀念の情調これなり、强き陰陽いづれかの情調を伴へる觀念はA例之R_{is}の$R_v{}^s$となり、潛在性の者こゝに活動的となる聯想の競爭上につき大なる動機を有する者なり、例之吾人が曾て居住せし市街を考へ

むに其の市街の名稱の詞語觀念は最大多數の場合に於て第一着に吾人が其の處に生活せし快不快を追想する者なり、而て其の愉快なりしか或は不快なりしかの觀念は總て著しき情調を伴ふ觀念を發起する者なり、偖て既にこの二つの要素卽ちV_1の聯合的親和及び其の情調とにより吾々の聯想は各種觀念の異同を明白に確定する者なり加之なほ之れに第三の要素加はるなり、其は潛在觀念の列羅(Constellation)これなり則ちa、b、c、d、eの五つの潛在觀念はV_1に可成的に最もよく聯合的親和をなしV_1の次列に在るが故に最も強き情調を現はすことを要するなり且つこれ等觀念に相應せるRを殘留せる皮質要素は聯合經路により互に結合せり、今吾々がR'_{15}の該聯合經路によりて潛在觀念か互に反對的影響を受け則ち一方には反對的制止を受け一は反對的に興奮を受くることあり、かくa、b、c、d、eなどの觀念の互に反對に或は制止し或は興奮する場合にはいかなる結果を來たすべきか、主に制止に該當せる觀念がV_1に最も聯合的親和をなし觀念競爭にも強き情調の發生せむには他の反對なる興奮はこれ等の點に於て之れに打勝ち制止を排除する時は興奮は良好となり更にいはむには初め觀念V_1に續きてこゝにV_2を生ずるなり其の他の觀念列V_2 V_3 V_1など亦この三要素により定まるものなり則ち

(一) 前にたちし觀念に於ける聯合的親和の度 Grad der associativen Verwandtschaft zur vorausgehenden Vorstellung.

(二) 情調 Gefühlston.

(三) 列羅 Constellation.

これなり。

健人に於ては聯想は通常かゝる觀念列の規則のみに止まらず、一層高尙なる度に於て複雜なる觀念の聯想列行はれ次第に生ずる觀念には辨別又分別(Urtheil)判斷(Schluss)之れに結合するものなり、則ち『薔薇は美麗なり』といふ辨別に於ては薔薇、美麗、なり、といふ三個の觀念は別個に排列せずして互に通有せる關係にて成立するものなり、聯想の該狀

態を、辨別聯合(Urtheils association)といふ尋常なる考慮はかゝる辨別聯合により行はるゝものなり。

尋常聯合は一定の速度を有するものにして各人各時各差異あるものなり、同一の人につきても內部の關係により其の境界變動するものなり、聯想速度の著しき變化を來たすや直ちに其の人の感應も隨て變遷するものなり、病理的には左の規則重要なり、則ち陽性情調には觀念經過疾速となり陰性情調には遲徐となる』

聯想の病理的障礙を分類すること左の如し

其一、一般聯想障礙　Allgemeine Associations störungen.

(一)聯想の疾病性急速症(奔想)Krankhafte Beschleunigung der Ideenassociation.

(二)聯想の疾病性遲徐症(考慮制止)〃　Verlangsamung der Ideenassociation.

(三)聯想の聯絡障礙(離想)Störung des Zusammenhang der Ideenassociation.

其二局部聯想障礙、辨別障礙Specielle Associations tonung on der Urtheilsbildung.

(一)辨別聯合の錯誤(妄想及び迫想)Falschungen der Urtheilsassociationen.

(二)辨別聯合の虧缺(辨別衰弱)Defecte der Urtheilsassociationen.

局部障礙にはなほ聯想上第一作用をなす記憶及び注意の障礙あり、こは聯想障礙の初めに述ふることせり。

記憶の障礙　Störungen des Wiedererkennen.

記憶は或る感覺Eが類似聯合の原則により既往に感受せし類似せるか或は同樣なる感覺の追想像卽ち觀念Vを喚起する場合に成立つものなり。

記憶の障礙左の場合に生ずるものなり

(一)必要なる追想像の耗失せる時

(二)皮質聯合の高度なる全汎性遲徐を呈する時

(三)聯想の離想を呈する時

(一)追想耗失により來る記憶障礙に二樣あり一は局部性にして一は全汎性なり局部性のものは或る個々の覺官域に限局せる時に來るものにして、例之今視覺的觀念耗失せむには視覺的記憶の隔離的障礙を來

たし患者はなほよく物體を視ながら其の何物なるかを想ひ起すこと能はざるものなり之れ既に述べし心育症なり之れと一樣に心聾症を來たすなり、こは既に前章に述べたり

全汎性障礙更にいはむには總ての覺官域に渉たれる記憶障礙は覺性觀念の汎延性に耗失せる時か或は該觀念の缺乏せる時に現はるゝものなること既に述べたり、こは先天的或は後天的の癡狂に特徴なり。

(二)考慮制止の高度なる時卽ち聯想遲徐となる時は記憶は之れが爲め鈍くなり且つ困難となるものにして最も高度なるものは記憶全く缺乏するものなり、かゝる場合には覺官感覺は尋常にして且つ其に關係ある追想像もよく保存されど覺性細胞より生ずる觀念細胞の興奮遲徐となり記憶の作用全く出來ざるか或は遲くなるにより記憶障礙を來たすものなり。

(三)聯想上の聯絡失する時は觀念の不聯合或は離想を來たすものにして一般離想の部分證候として記憶の障礙を來たす者なり、之れが爲め患者は周圍の人物を誤り極めて單一なる物體すら誤認轉倒するに至る、この一般誤認症は其の住居月日の上にも、及ぼす者にして無差別症或は無認識症(Unorientiertheit)の重要なる證候なり、患者は自己の住宅と他人の住宅と間違ひ、月日の判斷も出來す古昔の年代と今の年月日との差別は更なり、今は何年何月何日なるか更に記憶なきに至る偖てかかる人物誤認症(Personenverwechselung)ある時は幻覺或は僅かなる錯覺により來たる者とおもふ人あるべけれど實際さに非らず幻覺及び錯覺はこの場合には缺けたり、然らば錯語症のためには非らざるか患者は周圍の物體を誤り示すにより之れを見れば該症の爲めには非らざるか、否らず錯語症は普通かゝる場合に現はるゝ者に非らず、然らばこは亦錯語症の爲にも非らず、患者の周圍の物體を誤りて示すは之れ離想の結果として覺性感覺の言語域上に誤たる聯合を發起するに因る者なり、かく物體をいひ表はす上につきての該障礙を通常の失語症の定型中に組み入れて運動性皮質性錯語症(Transcorticale Paraphasie)と稱す、

かゝる運動性皮質性錯語症又失語症は又屢〻寵狀病にに來たり或る一定の覺官域に於ける感覺に限局せることあり則ち視官的失語症の或る狀態に於けるが如く患者は物體を視ながら其を誤りて呼ぶが全く其の物體の名をいひ表はすこと能はず、されど其の物體に觸れしむれば直ちに正しく其の名を呼ぶことを得るが如し、かゝる隔離性視官的運動性失語症卽ち錯語症は一定の寵狀病に因るものにして其は後頭葉の視覺界と顳顬葉及び前頭葉ある言語中樞との間なる大なる聯合經路に於て全體か或は一部分かに障礙ある時呈はるゝものなり、全汎性過動性錯語症は上述の意義に於ては一般性離想の部分證候として來たるものにして多くは皮質の汎延性機能障礙ある時呈はるゝものなり。

人物誤認症の診斷

人物誤認症は常に種々の意義より來たる者なるが故によく注意して完全なる診査を遂ぐべし、今一例を擧げて其の診査鑑別の仕方を示さむに、こゝに患者あり醫家は自己の良人として對遇せむには取りも直さず人物誤認症として診斷せらるゝならむ、然り診斷はこれにて可し然らば該症はいかにして來りしか、其を一々診査分析せざるべからず。

其は

第一直發錯覺ならざるか、患者は實際疑はしき瞬間に醫家の容貌を視其を自己の夫と同じものとして變化せしに非らざるか。

第二錯覺性批判或は間發錯覺ならずや、患者はこれにより醫家の容貌を見て自己の夫と認めしものなるか、この感覺の變形は一定の妄想の影響の下に見るゝものにして患者はかねて醫家を自己の夫なりと妄想せる時は該錯覺を定むものなり。

第三錯覺をかねざる妄想ならざるか、患者は實際醫家を實際の如く視ながちなほ自己の良人ならざるべからずと妄想することありこの妄想は種々の方法により成立つ者にして患者は實際自己の良人と醫家と容貌の同じからざるを認めながらなほかゝる妄想を抱くはいかにといふに其は患者は注意せざるか或は種々の臆說を弄し之れが證

明を試むるものなり曰く『わが夫は變化せり』『わが夫はかく假裝せるなり』或は其の容貌の不同なるは謎語的にしてかく自己に見するなりそれど其のこゝろに至りては疑もなきわが良人なり、など語るものあり。

第四一般性離想の一證候ならずや、これにより來る人物誤認症は時々刻々に變換するものにして第一乃至第三のもの、如く固定性ならず。

第五追想不明瞭なるによるか、わが夫の追想像の明瞭度、鋭度のいたく障礙され其の度うせたるにより聯想上殊に記憶に於て誤りしものかこの人種の人物誤認症は最も屢、癡狂に見る處なり。

終に注意すべきは患者はよく周圍の物を知れるに拘らず故意に他の名稱を附し之れをいひ表はすことあり、例之躁狂の發揚症に之れを見るなり、或は間々感動異常なくして命令的音聲の爲め突然故意に之れを呈することあり、又人物誤認症は、例之多くの中酒家に見るが如く錯覺の爲めにも非らず亦聯想障礙の爲めにも非らず皮質以下に起因せる視覺障礙の爲めに發することあり其は或は視覺經路の範圍内に障礙あるか或は眼自己に障礙ある時は上に述べし人物誤認症を來たすことあるなり故にかゝる際には恒に視力は完全なりや否やを診査することを要す。

記憶障礙の固有なる一症に『均一性追想倒錯』(Identifizierende Erinnerungs-Täuschung)と稱する者あり、該症に罹れる患者は因も緣もなきものを同一なりと見解するものにして、例之今始めて遭遇せし位置などを頗る以前より其の處に在りしかの如く錯誤する者なり、或る患者の如きは入院後間もなきになほ全く數年以前より同院に入院し居り恒に同じ病室に在り同樣なる患者と集居し同じ醫家の診察を受くるが如く信じ之れを物語る者あり、又健人殊に若年者に於ても重症なる身體精神の疲勞狀態に在る時間々偶然かゝる追想錯誤を來たすことあり、嘗て或る美術家あり或る美術館を長く巡視せしが終に或る未た曾て入りし

ことのなき室に到りしにいかにしても疑ふべからざる觀念を生じたり其は其の室に揚げある實際未だ曾て見しことのなき繪畫は既に見知りたりとの觀念を生じたりといふ、精神病者にありては妄想狂殊に中酒に因る妄想狂及び癲癇性精神病にはかゝる記憶障礙を來たす者にして患者は其の初めて遭遇せる所在を既に以前より聞見せしか或は記錄に記載しありしかの如く信ずる者なり、該種の記憶障礙と彼の多くの精神病者殊に中酒性譫妄者の到る處知人にて圍繞さるゝが如く訴ふる狀態と混同すること勿れ彼の譫妄狀態の人物誤認症は多くは實際錯覺あるか或は妄想あるか或は離想によるか或或は覺性知覺の不明瞭なるいづれかに屬するものなり。

注意の障礙　Störungen des Aufmerkens.

注意の障礙

注意の解釋

吾々の覺官面に於て或る一定瞬間に同時に作用し一定の感覺を惹起する外來刺戟の數は實に夥多にして決て單一なる者には非らず、こは視官の上につき說かむには明かに會得するべし、吾々の視野は單に視野といへど單純のものには非らずして個々の視覺の數多相集りたる總高より成るものなり、この數多の視覺の中にて唯僅かに一二のみ吾々の注意を引くものなり、而てかく同時に感受する多數の感覺の中にて只だ或るもの、み注意するといふはいかに吾々の精神内にはかゝる別個の新しき精神機能の何處かにて潛み居てかゝる働きをなすものなるか、否らず吾々の精神内にはさる神秘的の者なし其は唯だ單に同時に作用する數多の感覺はこゝに唯た或る觀念を喚起し其が吾々の聯想上の一定方向に定まりて働きしものに他ならず故に注意とは數多の感覺觀念が聯想をなす時其勢ひある方向を指し示すべき狀態を稱するものなり、こも亦一定の要素により其方向指示さるものなり、要素に四あり。

第一　注意の强度は感覺の强度に一致す、即ち感覺の强き方向に引きつけらるゝなり、例之吾々の視野の内にても鮮かに輝く物體は他の物體より殊に感覺强く隨ひて注意も其方に引かるゝが如し。

第二　既往感覺觀念即ち潜在觀念と一致し類似或は同一聯合を要す、例之視野の末梢に在る物體は其の感覺の明瞭度僅微なり隨ひて其に關係ある追想像も幽かなり其の結果として吾々の注意は感覺の明瞭度著るしき視野の中央なる黄斑部に於て生じたる明瞭なる物體の方に引かるゝものなり。

第三　の要素は感覺の情調なり即ち強き情調は弱き情調より注意を手易く惹起するものなり例之謠曲の如きは單に地の文を朗讀せるを聞くもさのみ注意を引かざれども美音家の之れを發聲する時は一際耳の傾けらるゝものなり之れと同樣に垣根ごしに聞く琴の良き手にて彈かれたるはいふ迄もなし其の調子の狂ひたる彈く手の亂れたる、歌の絲とは仲違ひせるにかあらむ遲れ先つなど吾々には一際耳障りをなして異樣に感せらるゝ皆之れ情調の陰陽に拘らず其の強さの如何に關係して注意をひくものなり。

第四　に擧ぐべき要件は潜觀念在の羅列（コンスチラチオン）なり例之今吾々が散策を試みむに無數の視覺累々として起らむ帽子かむりたる人眼鏡かけたる人虚空を睨みて歩く人髯を捻りて歩く人子供つれたる人美しき少女あどけなき兒童車に乘りて煙草薫らす人往く人歸る人千態萬狀ならむこれらの往き通ふ人につきても吾々の觀念は僅かに現るゝことあらむ或は他に何か考へ居らむには其考への爲めこの觀念は制止せらるゝこともあらむかくて進み行く折しもあれ親しき朋友の向ひの衢を行くが見え即ち朋友の視覺起らむには吾々の注意はこに發動し吾々のなほ他の多くの觀念及び其に聯續せる行爲は定まるなりこゝに於て吾々の今迄種々抱きし觀念はうち破れ往き通ふ人にはこゝろも留めずして進み行かむ且つ吾々の潜在觀念の羅列の恐く良好なる處の景色の視覺起らむには注意は之れに從ひて該方向に引るべし偖ては『親友』の視覺はかゝる事情により一層鋭く且つ勢ひよくなり情調強くなり其結果親友といふ潜在の僅微なる勢ひは他の感覺を制し之れにうち勝ち吾々の觀念經過を定むる者なり殊に物を探索するとか熱

心なる豫期、吾がおもふ人を待つ、などの上には該羅列、は重要なる作用を營むものなり。

以上四つの要素の下に注意の方向定まるものなり、偖ては、注意の主要なる疾病性障礙はいかに、

其の一　注意の減退 Herabsetzung der Aufmerksamkeit (Aprosexie)

注意減退症

其の二　注意の增進 Steigerung der Aufmerksamkeit (Hyperprosexie)

注意增進症

これなり。

其の一注意の減退――こは感覺は尋常なれども、其の尋常の強さ及び尋常の量にては注意の起らざるものをいふ、患者の物問ふも答へず、呼ぶも來らず、かゝることには更に心を留めず何の觀念も起らず亦何の運動もなく、さながら石地藏に對するが如き觀を呈するものなり。

一般考慮制止には最も屢〻注意減退症を來たすものにして總ての聯合機能の如く注意も亦考慮制止の爲め遲徐となり終には全く缺乏するやうなるものなり、又劇しく且つ情調強き幻覺或は非常に強き情

（一）考慮制止に來る

（二）幻覺及び妄想より來る

調を伴ふ妄想ある時は其の影響により尋常感覺に對しては注意減退症を呈するものなり、こは上に述べし理により彼の四つの要素は幻覺及び妄想に於ては實際卽ち尋常感覺に於けるよりも良好なる有樣にあるが故なり。

癡狂には非常に多く該の著しき注意減退症を呈するものにしてこはともすれば誤迷易き觀念の數及び不揃なる聯想經路の輕少なるによるものなり。

其の二　注意亢進症――は一の感覺が異常の範圍則ち偏頗に長く強く觀念經過を定むることにて多くは多數の感覺觀念を喚起し注意を其方に引くものなり、一感覺が優勢を占め長時間觀念經過を定むるが如き尋常狀態に在りても注意亢進症にては注意とりぐに散亂するものにして初め暫時此の感覺に注意を引くも次の瞬間には既に彼の感覺にうつるなり、彼此注意の散するが故に其の結果としてかゝる患者に在りては完全なる觀念列要素は一つも生ぜず、新に生ずる感覺

（三）癡狂に來る

注意亢進症

は直に觀念を生じかくて不斷初めの感覺によりて生ぜし觀念列を阻碍し中絶するものなり、されば患者に物問へば直ちに聲に應じて之れが答をなせども其の返辭の未だ完結せざるにはや其の注意は他の聽覺或は視覺に移り行き返辭をしながらもいぶかしさふに周邊を見廻はし今聽へたるは何なるか、其れよ鳥の聲か蟲の音か、否らず、時計の音なりき、時計としいへばこゝなる醫家の時計の鎖りは美し、純金か、純金にしては光澤いかゞはし金着せならむ價は幾何ならむ、其れよ磁石もよろし、上等品なり、白く光るはプラチナか、などの觀念を起し自己が問はれし問もうち忘れ返辭半ばにして時計の鎖に手を觸れ注意は全く時計の鎖にうつり、これもながくは留らず直に他の感覺にうつり行くものなり、換言せむには、注意は感覺より感覺に馳せ決して一つの感覺にながく保たるゝことなし、之れ注意亢進の特徴の一なり。

注意亢進症は最も屢、聯想一般疾速症或は奔想症の一證候として來るものなり、こゝには注意は觀念より觀念に馳せ行くものにして之れ特徴の二つ、これにより其の觀念羅列(コンスプラチカン)も斷へず變換し或る感覺は長時觀念經過を定むること能はず、奔想症の基因なる潛在觀念の興奮亢進は亦弱き感覺にも呈はるゝなり、健人には決して注意を惹起せざる極めて僅小なるものもよく觀念を生じ注意は強き感覺より引かるゝものなり。

聯想疾速にはよらずしてなほ注意の病的散亂を來たすことあり、其は屢神經衰弱症に見る處なり該患者は其の考慮の撒亂し一もまとまらざることを訴ふるものなり、書を讀むも文を書くも其半にして今迄讀書せし事柄更に考へに留らず、意想はとり〴〵に馳せ亂れ、觀念羅列屢出來難くなるものなり。

癡狂にも之れを見ること稀ならず殊に中等度及び輕度の生來癡狂に然り、こは恰も小兒に於ける生理的注意過敏と同じ、則ち注意の固定といふこと小兒に於けるが如く困難なり、小兒は注意の練習により次第に觀念羅列することを學ぶとも癡狂に在りては通常不治の病證なり。

注意減退症及び注意亢進症の外に注意障礙の一症あり、其は一般離想の部分證候として呈はるゝものにして上に述べしが如く感覺は僅少なる或は大なる範圍に觀念を發動するには非らず、何の關聯もなき感覺觀念を疾病性に發起するなり、例之患者は花の視感あり其の花は其の處に靜置されあるに拘らず、花には全く關係なき觀念むら〳〵起り其の方に注意をひかるゝなり、こは離想障礙の條下に述ぶべし。

一般聯想障礙 Allgemeine Assoziationsstörung.

(一)聯想の疾病性疾速症又奔想症 Krankhafte Beschleunigung der Ideenassoziation (Ideenflucht)

尋常の聯想疾速と疾病性に亢進せる聯想疾速とは絶對的の境界を定むること難し、これ健人に在りても興奮殊に發揚性興奮狀態に在る時は其の考慮速かなるものなればなり、かゝる精神物理學的の測定は姑く措かむ、各精神患者に就きては之れを知らむこと頗る困難なり、偖てはわれ〳〵醫家は各患者の聯想疾速を診定せむには吾々經驗上より認定により之れをなすべきなり。

觀念經過の高度なる疾速を呈するものを奔想(Ideenflucht.)といひ其の輕きものを疾想(Ideenflüchtigkeit)といふ、奔想症に在りては觀念列なる $V_1, V_2, V_3 \cdots\cdots$ 等の觀念相互の移り行き速なるのみならず、其の觀念と感覺との結合も速になり運動域に於ける皮質興奮の移行きも亦速かになるものなり、該奔想症の部分證候或は附隨證候として注意亢進症及び運動激越症或は迫動を來たすものにして運動性激越症は談話の形容速になり言語も速かになり、語漏症を呈するものなり。

$$\underbrace{E \longrightarrow \underbrace{V_1 \rightarrow V_2 \rightarrow V_3 \cdots\cdots B}_{\text{該移行速かになる時は運動激越症}}}_{\text{該結合速かになる時は注意亢進症}}$$

奔想症

一般聯想疾速症は如何にして起る者なるか、確かに之れを解釋し難けれど、其は抗抵減少說ともいはむか、感覺細胞より觀念細胞に移り或は觀念細胞を互に結合し終に觀念細胞と錐稜體經路の原起細胞とを聯絡せる彼の聯合纖維の抵抵の減少せるが

爲めなりといふ人あり、されどこは未た奔想の實際上の基礎とはなし、難し、蓋しこは觀念自家の再生に因するものにして R'_1s の r'_1s に變形することと速かなるによるものならむ、潛在觀念は手易く再生すべきなり、或る僅微に結合せる運動もなほ既に其の潛在せる狀態より喚起し更にいはむには潛在的無意識的なる觀念は今や精神域に上り斯く喚起或は扛揚せらるゝによりて尋常狀態に於けるより一層速かになるものならむ、かるが故に疾想症にありては弱き感覺も最も疾く移り變る觀念を起し、注意亢進症を呈することも會得するべく、また觀念自家が非常に疾く移行するによりては奔想症を來たし且終に非常に亢進せる數量と非常に亢進せる速度とを以て運動域に移り行くによりてはこに其の結果は運動性激越症を呈すること理解せらるゝならむ、この說は再生說とやいふべからむ、とまれ一方には聯合纖維の抗抵減し、觀念自家の再生手易くなりかくて疾想奔想を呈するものと心得べきなり。

疾想症に罹れる患者は自身にも之れを知り之れを物語るものあり『予は驚く可く考慮輕妙となりぬ』曰く『博聞强記天下に難問なし』曰く『軀體の運動頗る輕妙となりぬ』など語るは余等の常に見る處なり。

奔想症は初めは觀念の外形障害のみにして觀念內容には影響を及ぼさゞるものなれども其の度非常に高まるやこゝに累を內容に及ぼし觀念內容變化を來たすに至るものなり複雜なる觀念も觀念集合の再生も今や甚だ乏しくなり或は全く再生せざる樣なり現實概念殊に活動感覺に直接結合をなせるもの一層一層偏重し互に結合聯絡せる觀念の內部との關係は粗漏なり、觀念は全く偶然其をいひ表はす音の類似により互に聯絡し語尾の韻或は母音の韻により觀念經過定まるものあり、奔想一層進めば觀念と觀念との間なる中間觀念は斷へず散り離れ一より直ちに十にとび百より直ちに千に馳せ行くものなり、觀念と觀念との結合漸く難たく終には毫も語句の結合なき觀念互に排列され今や辨別聯合は影も止めずさながら矢を射るが如くに無意義の

音誦如話症

觀念互に奔逸し一は不明なる關係により一は語の類似により馳せいづるものなり、且つ精神素養の豐富なる人は斷へず觀念變換し素養乏しきものは斷へず觀念を反復するものなり、殊にかく無聯絡の語を多辯する奔想症の一狀態を音誦如話症(Verbigeration)といふ、以上述べし最高度なる奔想症に續發する障礙を總括して續發性離想といふ、こはなほ後に述ぶべし。

奔想症を分ちて原發性、と續發性との二とす、原發性のものは決して他の精神病證候に反動することなし、例之患者は頻々迅速に變換する幻覺を有し該幻覺の迅速に變ずるにつれて急に考慮を變ずる者は續發性奔想症なり則ち疾病は幻覺にして奔想に非らずこは自然にして生理的の關係を來たし、なり、幻覺の他亦强き陰或は陽性情調を伴へる妄想にも奔想の續發することあり、患者は罵詈を幻聽するか或は追跡さるゝが如く妄想する時は其を怒り奔想を續發し語漏症を來たすことあり、されば續發性奔想症は幻覺或は奔想により起る感動興奮に一致するものにして決て新しき病證には非らず。

奔想を主なりといふ說

原發性奔想は最も屢、彼の上に述べし發揚性感應と共に呈はるゝものなり、この二者は彼の考慮制止と悲哀感應とに於けるが如く互に相離るべからざる關係を有するものなり。

情調を主なりといふ說

奔想症と發揚性感應との存在する關係に就きては種々議論のあることにて、或は奔想症は原發證候にして發揚性感應は觀念經過の輕妙となれるに伴ふ感情なりと說明する人あり、或は發揚性感應こそ原發證候ならめ陽性情調は健人に就きても其の觀念經過を迅速ならしむることは之れ心理學上の規則なり、偖ては病態に於ても豈かで該法則に漏るべきかは、と說を立つる人あり、該說によりては原發性奔想症は一般精神病理學上よりも說明さるゝなり、なほ他の方面之れを考ふれば上の二說とは關係なく之れが解釋下さるゝなり、其はかゝる患者に奔想症及び發揚症二證候の同時に現るゝは之れこの二證候は全く互に調節をなすものにしていはゞ鳥の兩翼、車の兩輪の如き關係を有する

奔想情調兩立說

ものなり、との說を立つることを得べし、該見解によれば奔想症發揚症は共に總てかゝる場合に於ては原發證候なりとすべきなり、然らばいかなればかく奔想症と發揚症とが兩立的に出現するものなるか、これ吾々が當然起すべき疑問なり、とまれこは『原因的疾病要素の爲めに然るものにして觀念再生亢進して奔想症を來たし且つ陽性情調偏重して病理的發揚證を來たすものなり』と會得すべきなり。

上に述べし奔想原發說の見解により之れを見れば極めて稀有なれ共原發性奔想症は毫も感動障礙殊に毫も發揚性感應をかねざるとあり、其は殊に神經症或は神經衰弱症に之れを見る、患者は其の考慮は苦痛的にせまるとを告るものあり、時によりては既往事歷の追懷のしばし患者の頭腦より急奔しいかにしても制し難きとあり之れを追懷的奔想症（Reminiscenzenfluchtt）といふ時としては奔想症の爲め家事識務などの、手につかず無頓着となり或は嗜味を感ずるものあり患者は居常一種苦しき强迫あり其が爲め聯想の急速することを感覺するものあり。」

聯想疾病性遲徐症

(二)聯想の疾病性遲徐症又考慮制止症(Krankhafte Verlangsamung der Ideenassociation. (Denkhemmung)

聯想の疾病性遲徐症はなほ疾速症に於けるが如く單に各觀念排列のみに局限せず感覺と觀念との結合及び運動域に於ける皮質興奮の終末移行の上にも遲徐症を來たす者なり、考慮制止の一部證候或は附隨證候として記憶減退症及び運動制止を呈する者なること既に述べたり、記憶の澁滯遲徐は主として考慮制止によるものなること既に說きぬ、運動制止は總て隨意運動の遲徐或は運動不能を來たすものにして重症の者にありては極めて單一なる運動を命ずるも其を營むこと能はざる者なり、患者に接し脈診せむと手を出ださしむれば甚だ徐々に手をさし出だし舌を見むとて其を命ずれば辛ふじて挺出するか或は時間を置きて漸くにして之れを出だすことあり、言語も亦遲徐となり澁滯し、語を想ひ起すこと困難にして談話中屢用語を苦しさうに考ふるなり、發聲も殊に强く制止され患者は言語を私語（サヽヤ）き或は呼氣を吹き

如何なる意味なるか辛ふじて知る、ことあり、其の重症の者に在りては、患者は談話をなすに單に口を動かすに止り何の意なるか更に了解することを能はず、終には完全なる瘖啞を呈するに至る之れ制止に因する緘默にして之れを制止的緘默症といふ、又運動制止は或る患者には單純なる方法にて反復する一定の運動を呈はすことあり、例之一定時一樣の運動拍手か手打かをなし單一なる言語が或は一樣なる言語或は文句を反復することあり之れを模型樣運動(Stereotype Bewegung)といふ、全身筋肉も運動遲徐の觀を呈する者にして二樣の隨意運動制止を呈する者なり、其は一は身體諸筋の完全なる痿惰を呈す之れを痿解性運動制止(Motorische Hemmung Mit Resolution)といふ患者の手を執り一定の高さに擧げ之れを放てば直ちに恰も屍體に見るが如く單に重力により床上に落下する者なり、他の一つは全身諸筋の甚しき緊張にして之れを強梗性制止(Katatonische Hemmung)といふこれに在りては吾が他動的に其の四肢を動かさむとすれば或る多少の著しき抗抵を感ずる者に

模型樣運動

強梗性制止

して屢、他動的運動は全く制止さる、ものあり、これが爲め患者は其の身體の姿勢を一定の位置にたつものにして其の頭首は屢、前弓反張(Emprosthotonus)に相當せる姿勢をなし、寢褥に就ける患者は頭を枕より高く擧げ數時間或は終日懸垂樣姿勢をとることあり、或は稀には結核性腦膜炎に見るが如く後弓反張(Opisthotonus)を呈し頭を深く枕に嵌入するものあり、或は齒列を喰ひしばり未熟の人には牙關緊急症と誤診せしむることあり、額は縱或は横に顰はめ眼は廣く開き或は堅く閉ぢ眼軸は雙方一樣な方向に向ひ四肢は强梗性伸展姿勢の如く屢强梗性屈曲姿勢をなすことあり、こは臓躁家の如き機關的に起る拘攣と誤診せざる樣注意すべし、痿解性及び强梗性緊張緊張症(Attonität)の他に一般の聯想制止の部分證候として屢、蠟屈症(Flexibilitas cerea)を呈することあり、こは患者は恰も蠟細工人形の如く他動的に其の四肢を曲くれば曲げられたる儘の姿勢をとり、伸せば伸ばされたる儘の姿勢をとり、他動的に其の姿勢を變ずるに非らざれば長く其の姿勢をとり患者は隨意

前弓反張

後弓反張

蠟屈症

に其の姿勢を變ずること能はざるものなり吳博士はこは餳屈症とせむには我邦に適するならむといへり、これ小兒の玩ぶあめ細工の如ければなり。

偖て以上述べし處により之れを觀れば聯想遲徐症は三證候を呈することを知らるゝなり、則ち記憶減退症、考慮制止、運動制止、これなり此の三つものを總て呈するものを昏迷症(Stupor)といふ、患者がかゝる狀態に在る時は之れを昏迷狀態に在るといふべしこは又運動制止の狀態をいひ表はさむが爲め、痿解性昏迷症と强梗症昏迷症とに分つも可なり。

奔奔症に於けるが如く考慮制止を原發性と續發性とに分つ。

(一)續發性考慮制止症(續發昏迷症)は屢、幻覺の爲に起るものにして幻覺の內容の恐怖性なるか眩惑なるか、將た命令的なる時は間に之れを來たすものなり、かゝる患者は數日數週一定所に佇立し一處を見詰め緘默し一歩も動かざるものあり、其は恰も劒の山にも上りたらむが如く或は焦熱獄にも落ちたらむが如く幻視することあるによる、患者は

餳屈症

昏迷症

續發性考慮制止

衣解け髮亂るゝも更に感じなく、居ながらにして尿し立ながらにして尿し、津唾口腔に溢れて流れいづるも意とせず、絶食數日に涉るも更に食餌を慾するのけしきなし、これ等は恐怖性幻覺に或は錯覺に續發せる昏迷症なり、他の患者に在りては、虛空を仰視し、天女の奏樂に耳を淨め、神佛の託宣に隨喜の涙を溢ほし、麗はしき靈雲彩霧に圍繞されては座ろ仙化の想を起しかくて昏迷狀態にあるもの之れ眩惑性續發性昏迷症なり、こは屢、臟躁家或は癲癇家に見る處なり、第三のものに至りては屋上神聲あり曰く汝動くこと勿れ、曰く汝の命旦夕に迫れり、この聲は巨大なる勢力を占め患者の觀念經過其の運動及び行爲を制止しこゝに命令的幻覺に續發なる昏迷症を呈するなり。

こゝに注意すべきことあり、其はかゝる昏迷狀態を既に述べし幻動と誤るべからざることこれなり。

幻覺と同じく妄想も亦其內容によりて昏迷を續發することあり、總てかく續發的に發起する昏迷症を似非昏迷症(Pseudstupor)といふ、これに

似非昏迷症

より更に、幻覺性似非昏迷症（Halluciniatorische Pseudstupor）或は妄想性似非昏迷症（Wahnhafte pseudstupor）に分つ、通常强梗性或は痿解性似非昏迷症甚だ稀有なり。

原發考慮制止

（二）原發性考慮制止又原發性昏迷症――は屢〻毫も合併的感動障礙なくして現はるゝことあり、この關係は彼の上に述べし奔想症の毫も合併的障礙を有せざるもの稀有なると異れり、殊に其の原因の甚しき精神疲勞及び運動より來りし精神患者には屢〻種々なる度の持續性或は間歇性の昏迷狀態を呈することあり、最も輕度のものに在りては、例之腦髓の衰弱せる神經質のものに於ては只だ考慮制止を來たすのみにして患者は精神を要する事業をなすに當り多少徐々にして骨折るものあり、屢〻其の事業を營むに當り最初の中は尋常の速さにて營めども暫時にして疲勞を來たすものあり更にいむには健人にありては仕事を始めしなほ長時間は一樣に働き漸くにして疲勞を來たすものなれども斯る患者に在りては考慮制止あるが爲め暫時にしてつかれ即ち精神的職務に堪へざる樣なるものなり、重症のものに在りては考慮は全然制止阻碍さるゝなり、高度なる患者は極めて單純なる九々算すら最早計算すること能はず固有の人物さへに誤るに至る、殊に單純なる觀念は尙ほ唯だ再生すること出來れども複雜なる觀念集合は殊に最も著く考慮制止の爲め侵さるゝものにして多くの場合には患者は或る特殊の小兒然たる或は蠢昧なる擧動を呈するに至るものなり、言語に於ても常に同一なる語句を反復喃々語り或は同一なる曲節を聲顫はして唱ふ、運動域に就て之を觀るに單純なる運動はなほ之を營むこと出來れども其の複雜のものに至りては全く制止され或る完全なる痿解或は强梗性緊張を呈するものにして終には患者は折節小兒の遊び嬉戲むるゝが如き狀態を呈するものなり、斯る場合は殊に遲鈍狂に現はるゝものにして、こは追想像の耗失せるには非らず唯だ制止されたるなり更にいはむには觀念再生の遲徐及び澁滯に因るものなりかくて次第に經過し、若し其の制止偶然解けむには患者は問に應じ正し

く返辭をなすに至る其は經過の如何によりて未だ重き制止の狀態に在る時期には問を受くるも長き時間の後終に正しく返辭をなし終に恢復に趣く時は患者はなほ小兒の物まなぶが如く新なる教授により其の既往の智識を收得するのみならずかくて其の制止の次第に或は突然去る時は直ちに舊時の智識の地位にかへるものなり、かるが故に注意せで叶はぬ事は若し昏迷狀態の甚だ長く打ち續かむには終に其の結果として觀念の再生缺け亦追想像の地盤も疾病に侵さるゝことこれなり、こは長く考慮制止ある時は之が爲め實際に觀念耗失を來たし所謂續發性叙智厭缺症、卽ち續發性癡狂に陷り今迄外觀上のみの癡狂なりしものも終に實際上の癡狂となり僞癡變じて眞癡となるものなり、これ治療家のこゝろすべきことならずや。

混合性原發性考慮制正

偖てかゝる無混合性卽ち單純なる原發性考慮制止症の他鬱憂症を兼ねたる考慮制止症あり、こは上に述べし發揚症を混合せる原發性奔想症と諸有點に於て反對の狀態を呈するものなり、該症に就きても亦種々の議論あり鬱憂症原發にして考慮制止は之れに附滯し續發するか(一)たゞしは考慮制止原發證候なるか(二)第二の見解は既に大半之を述べたり、其は上に述べしが如く甚だ屢、毫も感情鬱憂症を認めずして考慮制止症を來たせばなり、さはいへ鬱憂症は充分考慮制止の原因をなすにより、之を見れば『第一の見解は少くとも多くの或る場合によし確固ならずとはいへまたすてがたかるべし、いかにも一般に陰性情調は健人に於ても病者に於けると一樣に觀念經過を澁滯せしめ遲徐ならしむることは確かに實正なり、然るが上に多數の場合に考慮制止と鬱憂症と雙立するにより之れを觀れば考慮制止は續發的にして鬱憂症は之れが因をなすものなり』との第一見解の說明出來るなり、なほ說をなすものあり『多くの場合に於て該二つの證候は相對的に現はるゝものにして多數の患者は考慮制止は鬱憂症の現はるゝ前に成立せるにより之を觀ればこの二つの症候は共に原發性或は調節性なりと解釋することを得べしと』以下一般に該見解により鬱憂症を混合せる考

慮制止症を原發性のものとして說かむ。

種々の鬱憂性感動にはなほ最も屢〻考慮制止をかねたる苦悶を結合するものなりこれに在りては考慮制止は恰も上に述べし遲鈍狂に於けるが如く頗る高度に達するものにして、例之高度の苦悶を呈せる鬱憂狂者に在りては唯だ七を八倍する乘算すら數分間を費やし或は自己の小兒の名さへに辛ふじて告るか或は全く告ること能はざるに至る、該考慮制止症を屢〻殊に之れを回想澁滯症 (Schwerbesinn lichkeit) とよぶ、該患者の運動性狀態は種々の差異あり、後に述ぶるが如く所動性鬱狂 (Melancholia Passiva) に於けるが如き屢〻完念なる痿解を呈することあり或は痿懦性鬱憂狂 (Melancholia attonita) に於けるが如く屢〻强梗性緊張狀態を呈することあり、終に述ぶべきは運動制止症は甚だ屢〻既に述べし苦悶の外貌運動の爲めに覆はるゝことあることこれなり、殊に慟哭、握拳、手摩り、足踏み偖ては上身屈曲苦悶廻走など總てかゝる狀態は鬱憂狂に見る處にして考慮制止症、苦悶、苦悶運動及び其の他の運動の結合して呈すること屢〻なり、かゝる制止の持續的に起る鬱憂狂を、激越性鬱憂狂 (Melancholia agitata) といふ。

考慮制止の診斷

考慮制止症の診斷——奔想症の認識の毫も困難ならざるに反し考慮制止症の診斷は屢〻甚だ困難なり、之れ實際患者に物問ふも或は其の返辭甚だ遲徐なるか或は全く返辭を與へざるか而も恒に不明なればなり、其は果して幻覺又は妄想に因する續發性考慮制止なるか、將た毫も感動障礙なくして、例之遲鈍狂に於けるが如き原發性考慮制止なるか、但しは悲哀なる感應及び苦悶を混合したる考慮制止なるか、若くは總て毫も考慮制止症なく却て實際に叡智虧缺症あり卽ち癡狂の然らしむるところなるか、かゝる鑑別をなさむには左の要點に注意すべし。

(一) 考慮制止症は大なる變動あり、重症に於ては其の經過を觀察すれば偶然たる瞬間或は一定時に既に變動を來たすものにして制止解くるれば其に相應して患者は著しく正だしく返辭を述るが如し、斯る進行性變動は決して癡狂に見ざる處なり卽ち考慮制止は進行性なれど癡

狂には固定性なり。

(二)考慮制止症は個々の觀念集合は屢〻甚だ不同なる方法にて侵さるゝが故に或る極めて單純なる疑問には返答せずして他方に於ては著しき辨別を以て之れが應答をなすことあり、實際の叡智虧缺症に於ては通常全汎に侵さるゝものにして多くは稍同樣なる變化を全く精神地盤上に來たすものなり。

(三)考慮制止症は主に個々の觀念或は觀念集合と僅かに觀念の辨別聯合とを侵かすものなるが故に患者は個々の觀念或は其の聯結を再生することと困難なりされどなほ辨別自家は正しきが故に一般に觀念制止あるに拘らず再生することと出來るなり、癡狂に在りては之と全く反對にして又觀念の辨別聯合重く侵さるゝものなるが故に考慮制止症に罹れる患者が總じて屢〻全く誤らずして返答をなし長くひまをおきて終に正しき返辭を發見するものなれば癡狂に在りては屢〻其の返辭を誤り且つ通常暫時考ふるも正しき返辭を生せざるものなり。

(四)考慮制止症は殆ど破格なしに運動制止症を聯結するものにして殊に毎に甚だ著しく言語の上に現るゝものなり患者は單純に徐々に言語を語れど癡狂に在りては運動制止は多くば缺け疾速なる言語を以て遲徐なる意想を語るものなり。

(五)一般にこれ等の鑑識は肝要にして各症に屢〻其は制止なりや虧缺なりや確乎たる鑑別をなす上に就きて要めなり、殊に唯だ一回の診査にては之れが診斷を下さむことに注意せざるべからず、或は到底之れが鑑別出來ざる場合稀ならず、則ち長時制止に罹り終にまへに述べし續發狂に陷れる者は全く困難なり。

叡智虧缺症を斷定するにはなほ他の疑問あり、其は既に述べし幻覺の固有なる性質を備へむには幻覺性昏迷症又同考慮制止なること知らるべく、悲哀にして且つ苦悶性なる顏貌を呈せむには鬱憂症と聯結せる考慮制止症なること知らるべく、感動障礙なき原發性考慮制止症に在りては、例之昏迷性妄想狂、神經家、遲鈍狂等の如く呆然たる或は小兒

然たる顔貌缺くるものなり、輕症に在りては直接に問答を試むれば上に列擧せしが如く殊に、幻覺、妄想、苦悶、いづれかを檢定さるべく無混合性なる原發性考慮制止に惱める患者は少くとも輕症及び中等度の症は屢、直接に之れ問答を試むれば知るべし偖てかくして吾々の頭腦中に疑問の虛しくなりたらむにはいかに。

附ていふ機質性精神病に在りても亦其の叙智の缺落證候と共に考慮制止を來たすことあり、例之腦腫瘍により腦髓壓迫の亢進する時は每常考慮制止の間代性狀態を呈するものなり。

(三)觀念經過の關聯障礙(離想、觀念不聯症)　Störungen des Zusammenhangs des Vorstellungsablaufs (Inchörenz. oder Dissociation)

諸君！、予は離想なる語を屢、述べたり今やこれが解釋を試みむとするなり、いかに諸君は既に健全なる精神を有せる人に在りては或る觀念V_1、は恒に其と密接なる聯合的親和を有せる觀念V_2を惹き起すものなることを會得さるゝならむ、今多くの精神病者に於ては之と異り、或る觀念V_1は其には全く關係不明なる觀念V_2、を惹起することあり、この障礙を完く呈するものを聯想の不聯合或は離想といふなり、今單簡なる一例もて之れを說かむに諸君若し或る患者に對し今の年號及び年月日はいかにと問はれむに、患者は之れに答へて『靑』と語たりたりとせむ、該靑といふ觀念は諸君が諸君の疑問を起こし、年代の觀念とは全く毫も關係なき觀念なり、かゝる狀態を、離想とはいふなり。

又離想は單に相互觀念聯結上に於てのみならず、最初の觀念と感覺と及び腦髓の運動域に於ける皮質興奮の移轉の上にも障礙を及ぼすものなり、第一の關係は既に述べし記憶障礙にして患者は總て周圍の人物を誤認し單一なる物體なりと誤りて其をいひ表はすものなり之れ所謂似非錯語症(Pseudoparaphasie)なり、總て該錯誤症は時々刻々に變換するものにして幻覺、錯覺は毫も成立することなし周圍の人間と物體は尋常なる方法にて感受し只だ其の感覺(視る物、聽く問ひ)の聯合作用の病理的となれるものなり、則ち尋常の人に在りては或る感覺に聯合排

列をなし、記憶を起し、差別をなす觀念も、該精神病者に在りては一般離想に一致し全く無關係なる觀念を排列し、これが爲め患者は自己の家族の數も現時の月日も、自己の住所も自己の經歷も誤りて答ふるものなり、かゝる一般離想の部分證候を特に無差別症(Unorientirtheit)といふこゝに一言いはで叶はぬ事あり、彼の往時の精神病學家及び近時の精神病學家は該無差別症を彼等の所謂意識障害或は自家意識の障礙の中にて說けると異り予のこゝに之れを述ぶるは他に非らず、全くチーヘン氏の見解に據りしものなり、元來かゝる自家意識など、新たなる精神能力を假設するは全く非理無益のことなり、無差別症は之れ單に聯想障礙より生ずるものなれば、新しき精神能力の助力をからずとも充分解釋出來るものなり、況して意識障礙に於ける關係などは既に不合理なり、いかにといふに、差別機轉は決て高度に識領することなければなり。

偖て聯想上のみならず運動上にも整規的に離想を來たすものにして其の運動は之れが基礎なる感覺にもなほ亦其の感覺に次ぎて起る觀念にも一致相當せざるものなり、故に患者は屢、物を手に執らむとして執ることを能はず、却て其の物を打敲く擧動をなし、或は手仕事なども誤り多く到底其を營むこと能はざるもの患者の步行も調節を失ひて全く失調證候を呈し、輕度の者は該障礙の爲め目的なき徘徊をなすものあり、患者の斷間なき運動は內界の關係缺亡せり、或る運動の夥多の排列を複雜なる行爲に結合せしむる目的觀念は起らずなり行くものなり、其の最も重症なるものに在りては全く無意味の運動をなし或は虛空を掴み無頓着に反歪し顏を皺むるものあり或は個々の運動は最早其の目的を認むること能わざるやうなり屢、舞踏病の病型を誤診することあり、往時は全く之れを大舞踏病(Chorea magna)と稱せりき。

一般離想は貌言卽ちそぶり、出話、及び、文詞の書寫の上に最も著しく現はるゝものにして、貌言(史記の貌言華也至言實也などいへるに因る)は患者の本源たる觀念感覺の內容には適合せず、驚悸的觀念を有しなが

面相倒錯症

似非面相倒錯症

ら其を笑嬉的醜面相をなす、かゝる面相の神經作用の障礙を、面相倒錯症(Paramimie)と稱す該一般離想に因する面相倒錯症或は似非面相倒錯症(Pseudoparamimie)は就きてはなほ之を後にのぶべし、患者に物體を示し、患者に其を視或は觸れしむれば其を錯り毫も感覺に關係なき原發性なる突然たる出話により錯話することあり、かゝる離想的錯語症と竈狀病による錯語症とを誤診せざる樣注意すべし則ち錯語的障礙は或る一般離想の部分證候なりや、否やの鑑別要肝なり。

言語は恰も鏡の像に於けるが如く一般離想の種々なる程度を最も眞實に映射するものなり、故に言語の有樣を見て離想の程度を認知する事出來るなり、最輕度の症もにありては單に詞語相互の關聯の阻碍さるゝに止まれども重症のものにありては詞語辭內部の語と語との關聯侵さるゝものにして詞辭の間疎隔し辭をなさず之れをアグラムマチスムス(Agrammatismus s Akataphasie)といふ、終には觀念は主もに最早辨別聯合をなさずなり行き出話上には言葉は辭句として聯絡せずして

語詞新作症

錯亂症

關聯明かならざる言葉と結び或は遲徐に或は疾速に聯絡排列するものなり、屢、これ等の言葉は速なる列にて斷へず反復し既に述べしが如く音誦如話の證候を呈するものなり最重症のものに在りては言葉の內部の綴り及び文字の關聯阻碍され一つの言葉も離隔し其の離れば なれになりたる一部互に結合するが故にこゝに全く、言語新作症(Wortneubildung)を呈し、文字の發音も亦障礙さるゝものなり。

言語に於けるが如く文詞も亦離想的障礙を呈するものにして患者は文をものするに脫漏多く或る文字を脫し綴りを誤り或は詞句を脫し、字畫を誤り筆蹟さながら運動失調症に見るが如き觀を呈するものなり彼の文字新作症も之れより起るものなり。

偖て以上述べし、無差別症、觀念經過の離隔卽ち離想、運動の離隔卽ち運動性離想。この諸證候の總合狀態は離想症には特徵にして之れが總て呈はるゝと狀態を亦錯亂症(Verwirrtheit)といふ又離想性亂心症といふも可ならむ、こゝに一言注意すべきことはかく三個別々の證候は個々

別々に呈はるゝものにら非ずして要するに一の同一樣なる原證候の部分的證候卽ちとりも直さず一般離想症或は觀念不聯症の一證候として來るものなりといふことこれなり、又彼の外觀的離想症も外觀的亂心症と同樣の意味にて爾後陳述せむとするなり。

原發性離想症

(一)原發性離想症――は他の精神病證候には關係なく獨立的に來たるものにして一定の精神病所謂妄想狂の離想性のものには主要なる原證候なり。

續發性離想及び其の來源

(二)續發性離想症は一定の精神病の續發症候なり、其は

其の一　高度の奔想症――觀念經過の疾速症のいよ〳〵亢進すればいよ〳〵其の中間觀念跳逸しこゝに續發性離想症卽ち奔想性離想症(Ideenflüchtige Incohärenz)を來たすなり。

其の二　分離性妄想及び幻覺の爲めに來る――之れ其の內容とりどりなる妄想、及び其の數夥多しき幻覺は之れによりとり〴〵に離れ

離れなる不聯合性觀念序列を來たし、同樣に續發性離想症を呈するなり之れを妄想性及び幻覺性離想症といふ(Wahnhafte und Halluzinatorische Incohärenz)されどこの際に於ける聯想は尋常にして或る病理的に變化せる觀念、及び感覺の要素にて之を營みたるものにして聯想上には之れが支配を受けざるものなり。

離想の鑑別診斷

其の三　強き感動障礙――殊に苦悶、憤怒感動などは健人にも病人にも離想を續發するものなり。

其の四　叡智虧缺症――癡狂にありては觀念の聯絡結合缺け且つ觀念を互に結合する觀念も存在せざるが故に離想を呈するものなり之れを癡狂性離想症(Incohärenz des Schwachsinns)といふ

離想の鑑別――診斷上區別は時により甚だ困難なることあり。

(一)續發性奔想性離想症患者は殆ど每に疾く且同樣に無關聯なる談話をなすものにして又原發性離想症に原發性奔の併發すること稀なれども、奔想より離想の來りしか、あらぬかをたしかめむには既往證をも參

考すべし、發病時は只だ觀念經過の疾速症のみにして毫も離想を呈せず其の奔想の亢進するにつれ漸次相對的に離想の現はれしか否かをたしかむべし。

(二)續發性幻覺性或は妄想性離想症及び感動性離想症は多くは患者の顏貌により知らるゝものなり。

(三)最も困難なるは原發性離想と、癡狂に續發する離想との鑑別なり、この兩者の判然たる區別は時として出來がたきことあり、されど左の要點に注意し其の境界線を定むべきなり。

其の一　運動的離想――通常原發性離想は癡狂性離想よりも出話多し、殊に錯語性障礙及び運動倒錯症(Paraparaxie)は癡狂性の者に稀れ也。

其の二　離想的觀念序列の中間に明瞭なる要素として現はるゝ關聯的辨別聯合の狀態を察すべし、原發性離想症に於てはかゝる辨別聯合はなほ論理的鋭度に就きては之れを失はずして存すれど癡狂に於ては該辨別聯合は叙智虧缺の著しき印象を呈せること知らるべし。

各部聯想障礙
辨別聯合の內容障礙

其の三　癡狂に於ける離想的觀念序列は單純性にして同一の語及び同一の觀念を反復繰り返すものなれども原發性離想症に在りては之れと異り許多の再生は決て一定型を形づくらず其の持續は不規則なるを以て特徴とす。

原發離想症も亦考慮制止症の如く長く經過する時は終に續發性叙智虧缺症卽ち續發性癡狂に陷ることあること恆に慮るべし。

各部聯想障礙　Specielle Associationsstörungen.

(一)辨別聯合の內容障礙　Inhaltliche Störungen der Urtheilsassociation.

妄想及び迫想　Wahnidee und Zwangsvorstellungen.

諸君、上章に陳述せしが如く、健康精神に在りては其の觀念は辨別聯合をなすものなり、該辨別聯合は一般に彼の或る聯絡結合をなせる觀念に一致せる感覺を現實に惹き起し且つ之れが爲め物體卽ち其の外界に於ける性質との現實的結合を惹き起す處の聯合に一致するものなり、例之『梅が香はゆかし』といふ辨別に就きては『梅が香』『ゆかし』こ

の二つの觀念は辨別的聯合にて結合せり。

該結合は吾々が屢〻得たる關聯感覺卽ち吾々が屢〻梅が香を愛でし感覺に一致するものなり、吾々は其が實際の感覺結合と一致し且つ之れにより亦外界に於ける實際の關係とも一致すればする程、其の辨別を正確なりとするなり、これはこれ現實的辨別なれど吾々の抽象的辨別に於も亦同じ、則ち其の辨別中に含まれある觀念の其の基礎なる感覺に相應一致するとせざるとにより其の辨別の正否は定まるものなり。

余は前に聯想は類似及び同時の二原則により起るものなることを述べ、該の二つ原則は亦全く一般に正確なる辨別聯合を惹き起すに與て力あり、さはいへこの二つのものはなほともすれば全體誤謬に陷り易き危險を有するものなり、こは類似は同一と誤り屢〻同時的なることを不斷同時的なりと轉倒することあればなり、玩是なき幼童に牡丹に似たる芍藥を見せむに其をつく〴〵詠めてこゝに辨別を生じ『この花(芍藥)は牡丹なり』とせむ、或は若しまた幼童に汝の朋友の庭園なる牡丹はいかに咲けるかと問はむに、彼は其を見しことなくして『其は白し』と答へむかこれみな誤りなり、實際彼が朋友の庭園なる牡丹は淡紅にして牡丹には種々の色容あればなり、彼が牡丹につきて有せる感覺集合(形、香、色等)は白色の感覺により總合され且つこの類同の同時作用は先入師となり特殊の誤りたる辨別卽ち『牡丹は白く咲く』といふ辨別を來たし、なり、之れ卽ち誤謬(Irrthum)なりいかにといふに辨別聯合は感覺生活の實際と且つ外界の實際と一致せざればなり。

誤謬は健人にもありされど一定の境界に止まれり、彼の幼童は幾數回か反復し芍藥を見或は牡丹を見、こゝに芍藥は牡丹に類似せれど、牡丹とは全く別種の花なりと其の誤謬を矯正すべく、彼が朋友の園生の牡丹の一髓見により其の淡紅なることを認め其の誤謬を矯正するに至る、かくして誤謬的觀念は、漸々追加的に看破され矯正さるゝものなり、實に吾々觀念生活は斷へず感覺の反照を受け複雜なる外界關係の著しき錯誤を明知するものといふべし。

健人に見る或る誤謬はなか〳〵に頑固にして自家の經驗により之れが矯正に反抗するものなり、例之偏見、獨斷、迷信之れなり、これ等健人の誤謬の頑固なるはさることながら、なほ全く自然的にして只だ個々の場合に於ける事態により之れが解釋を試みる者なり、宗教上の迷信などは殊に頑固なる者にして、想像か迷信か知らざれど蠢魯朦昧なる古代の人種のあはれむべき頭腦より想出せる伽話的の記載もなほ之れを神聖なる者とし戰々兢々としてひたすら其を遵守せむとするは一般迷信家の常態なり、千百の經驗も彼等の頭腦には虛しく通過し萬語の理解も彼等の俚耳には入らず、誤謬の羈絆解くによしなく、迷信の固執石の如く鐵の如し、七珍之れが爲めに失ひ、萬寶之れが爲に盡し、甚しきに至りては骨肉相食み親族離間し、家破れ國亡びし者洋の東西を問はず古往今來幾何ぞ、實に忌むべく怪しむべきものは迷信なり、偖てかく誤謬を固執せしむるもの種々の要素なかるべからず實際上に一回遭遇せし不正の觀念の情調、これ一つ、既往の經驗は却て終の經驗を制し其の矯正を受けざる即ち先入師となれるこれ二つ、先世累代固習せる習慣これ三つ、これ等よりして誤謬に陷り易きものなり、宗教上の迷信と同じく人物崇拜、威信といふものあり、これある者には幾多の反證的經驗、證明も其の辨別上には更に影響なく、たゞ〳〵嚴かしきなり、たゞ〳〵仰慕はしきなり其の人の一顰一笑も深き理あるもの、如く、不合理的行爲も法るべき者とし、をかしき有樣を呈するは古今の人情なり、例之耶蘇基督博愛を說きて其の徒耶蘇是神、神是耶蘇の念を懷き、其說の時と合はず慘酷なる刑に處せられし事歷も之れを靈妙神異の事とせる孔子仁義を敎へて門下皆孔子以外に道なく彼が一言一動は自然の大道に基きしもの、如くたゞ〳〵之れを崇びしが如き、英雄と稱し豪傑と呼び之れを崇拜するもの、觀念を悉細に分析したらむには其の辨別上に多少いみじき錯誤の存すべきこと今更いふ迄もなきとならむ、これを要するに誤謬の頑固なる性質を有せるは皆これ其の觀念に附帶せる非常に顯著なる情調の致す所にして習慣的誤謬に在りては或

る聯絡結合の狹隘なるにより其の誤謬の矯正を阻碍するに因るものなり、完全なる教育の必要こゝに於てか切なること認めらるゝならむ。」

該生理的誤謬も病理的誤謬、卽ち妄想も共に其の觀念の聯絡結合の外界の實際には一致せざるものなり、偖てはいかにして其の健疾の鑑別をなすべきか。

(一)妄想は屢、錯覺的に誤りたる感覺或は直接に幻覺的感覺などの感覺材料により或る全く到達すべからざる境界に馳する觀念なり。

(二)妄想性辨別聯合の矯正は新感覺によりても全く阻碍さるゝものにして該の各矯正の障礙は生理的誤想の如く解釋的方法により、之れが說明を試むることなく多くば倒錯的に影響するなり。

(三)妄想に在りては感覺生活に於ける感覺は只だに妄想の意義に判斷さるゝのみならずまた終に錯覺の意義に變形さるゝものなり、之れが爲め妄想も加之感覺も之れが影響をなし、換言すれば相應せる幻覺に引かるゝなり。

この意義に於ては生理的誤想と妄想との間の境界は判然せず、訴訟好きの人の生理的固執と、好訴性追跡妄想と、生理的傲慢と誇大妄想と、生理的嫉妬と病理的なる嫉妬妄想と、これ等の境界は其の移り行きは漸徐にして判然せざるものなり、故に病理的辨別聯合なるか、否らぬか、其を手易く識別せむことこれ等の場合には困難なり、況して精神變常の未熟なる狀態に於ては健疾の識別出來得べからざることあり。

病理的誤想に二樣あり妄想は其の一症にして第二の症は迫想なり、妄想は矯正的辨別聯合全く起らざるか或は只だ全く暫しの疑ひとして起るものなれど迫想に在りては矯正的辨別聯合は頗るよく起るものにして患者は其の迫想の不正にして且つ疾病性なることを知りながら其をたしかに固持し邪念を排除すること能はず折節し之れが迫想になやむものなり妄想に在りてはこれと異り矯正的辨別起らざるが故に病の病なることを知るによしなし、彼の『昔有一國、國中有一水、號曰狂泉、國人飲此水無不狂也、唯國君穿井而汲、獨得無恙、國人旣並狂、反謂國

王之不狂、於是聚謀、共執國主、療其狂疾、火艾針藥、莫不必具、國王不任其苦、於是到泉所、酌水飲之、飲畢便狂、君臣大小、其狂若一、衆乃懼然、(宋書袁粲傳)

などいへるは之れ辨別障礙の爲め其の妄の妄なることを矯正することを能はざればなり。

妄想は迫想より多し故にまづ妄想を述べ然後迫想に及ぼさむとす。

其の一　妄想 Wahnideen.

妄想の定義は既に述べぬ、余は進みて其の成立につき之れが說明をなさむとす。

妄想の成立方法は種々なり。

妄想

妄想の成立約制

原發性發生

(一)　原發性發生 ═ 屢、尋常感覺より妄想を生ずることありこは恰も炎熱燒が如き夏日忽然白雨篠をつぐが如く至り雷霆之れに和するが如く或は空晴れ月淸きをりしも群雲攸然として至るが如く隔異せる觀念のむら〳〵浮みいで終に固定して妄想となるものなり、或は患者は高貴の人の肖像を見、其の肖像は何の類似もなく又何の考へもなく唯

論理的發生

だ突然其の高貴の人は、吾が父の肖像なり、吾々父は高貴なりと考へ起り、爾後いかにしてもこの妄想去らず、終に毫も疑はざるに至る。

(二)　論理的發生 ═ こは例之上に引きし患者は其の原發性妄想につきなほ之れが因果の來歷を種々に考へ更に其の觀念を固持するが如き者にして、父の肖像はいかなればこゝに在るならむ、高貴なる父の子なればわれも亦其の位置に在るべき理なるに今われの卑しき位置に在るはいかに、など心理上觀念結合も聯想とを廻らし、われ襁褓の裡に仇敵の爲めにかどわかされ他人の手にわたり現時の親の爲め養育されかく賤しき境遇に陷りしものなり、故に今の父は實際の父に非らず養父なり、と斷定しこゝに原發性誇大妄想は論理的に斷定され想像的に追跡さるゝが如き他の考慮を發し卽ち追跡妄想を成立せしなり、之れと反對なる關係にて最初原發性追跡妄想を發し、之れに結撰し多少論理的に誇大妄想を發することあり、患者は自己の周圍は皆仇敵性となりしものと信じ、こは自己の人品高貴にして社會上の位置高く世間の

人に猜忌されかく種々の妨害を受け現時の關係に在るものなり自己の仇敵多きは之れ自己の高貴なる所以なりと斷定を下だすものあり、余の少年患者に『南朝より一系の後胤なれど北朝の人の爲め追跡妨害されかゝる悲境に陷りぬ、いかで天下に兵を召集し再びわが仁政を施し萬民を虐政の下より救助せでやは』など語り自ら皇子なりと稱せる行旅病者ありき、或は患者は風聲鶴淚にも心を注ぎ自己の妄想に結合するものあり彼のゲーテーの所謂("Die Hund bellen, dass ist mir ein Beweiss, dass ich reite")といへるに均しき患者あり犬羊の吠聲はわれの騎馬する結果なりなどおもへるものあり、かく或る誇大妄想に追跡妄想を發し、追跡妄想に誇大妄想を發するものなれども前者を多しとす、而てかゝる誇大妄想の續發は毎に意識の論理的判斷機轉の結果には非らず、屢、かゝる誇大及び追跡の妄想は患者には毫も其の論理的關聯を識領せずして並列することあり、かく他の原發性妄想の爲め形成せられ且つ其を補充する後發妄想を補佐的妄想(Complementäre Wahnidee)といふ。

(三)　幻覺より妄想を發生する之れ幻覺的妄想(Halluzinatorische Wahnidee)なり、例之余の患者の如く、日神託宣したまふに『汝は朕が孫なり、汝之れを皇孫に告げよ、今や日清事急なり、こは敢て憂ふるに足らず、露國の瓜牙を研き機を窺ふあり、期年ならずして日露の戰爭は起らむこれ汝等國民の深く心に銘ずべき處なり、されど大日本帝國は神國なり、朕の遙かに照臨するあり、憂ふ勿れ、萬民枕を高くして安眠すべきなり』と毎朝日輪を拜すれば眩かるべき光輝も自己の眼には判然之れを拜することを得、合掌、閉目畏みれば毎にかくなむ、託宣ありぬこれ全く自己が皇孫の位に在る故なり、と物語りしは之れ幻覺より誇大妄想を發成せしものなり、或る患者に在りては『汝死すべし食中毒あり』など幻聲を聽きこの幻覺の基礎上に於て實際其の食中毒ありとの妄想を形成するものあり、こゝにまゝよく注意しみれば屢、これと轉倒せる關係あるを認められゝなり、其は最初原發性被毒妄想あり、後に續發的に同一なる幻覺を來たすことあり、こはこれ妄想は進みて未だ潛在的なる幻覺の特

殊の像を誘動しこゝに幻覺を發するなり、錯判も亦最も屢〻之れを來たすなり、實際感覺の幻覺性錯誤(錯覺)と妄想とは屢〻同時に來たることあり、不明なる低き私語も意味明瞭なる罵詈嘲弄の言に變形さるゝことあり之れ同時に起るか或は直接に先きに起りし妄想其は私語する人は自己を罵詈嘲弄するなりとする妄想の影響を受けかゝる錯誤を來たすなり、則ちこの序列の結果は――尋常感覺‖(私語)―原發性妄想‖(自己は罵詈さる)‖而て終に同時に錯覺‖換言すれば私語を罵詈の言と變形す)――とやうに排列するなり。

(四)　夢も亦妄想の基礎となる者なり、精神病者は夢と醒覺時の實際との識別なきこと往々なり、夢中の事歴、或は醒覺後より直接に引續き妄想を起すことあり、或は醒覺後、數時乃至數日或は週日の後に至り夢の追想を醒覺的生活の事實として顚倒し前の幻覺に於けると同樣なる方法にて妄想を生ずるなり、例之患者は一夜、同室なる患者と決鬪したりと夢見て以來其を恰も實際其の患者と鬪ひしと信じ終に其の患者を仇敵なりと妄想するが如し。

(五)　妄想は或る感動障礙の續發證候として發生するものにして卽ち感動障礙の說明企圖として現はるゝものなり、誇大妄想の發揚性感應の續發證候として來たる事あるは此の例にして多くの場合に患者は其の意識的斷定により、吾はかく愉快なりかく幸福なり吾は多少他人に優逸せるが故(貴顯)ならざるべからずと考へ妄想を起すが如く多くは感應の聯想列に一致するものなり、總ての觀念及び感覺に於けるが如く殊に疾病性方法にて其の固有の『我』と亢進せる愉快なる感情とを結合し且つ其に相當せる觀念をも固有の『我』と結合するなり、之れと反し鬱憂症の地盤に於て罪業貧困身體上疾病及び屢〻又追跡等の諸妄想を發生するなり、殊に苦悶はかゝる續發性妄想を發するものなり、これ等の妄想を發する精神病理的經過は全く論理的なり『吾はかく胸內苦悶に惱みいかにしても癒へざるは何かの原因なかるべからず。吾は良からぬ心をもてり。われは罪を犯せるにやあらむ』とこれより自己の過

去現在の事歴を追懐し極めて無耶氣なる行ひ或は些細なる過ちを考へ自ら責め自らいたみ、其を重罪にても犯したらむが如く考へ全く罪業妄想を發生するなり、他の場合に於ては、われかく悲しくかく悔やしきは身體のそこなひたる爲めにして心臓か頭かに重患ある爲めなりと斷定をなしこゝに實際身體上の疾病としては認め難きものを疾病なりとし疾病妄想を發するなり偖ては僅かなる舌苔を見ては舌癌にも罹りたらむが如く何も異常なき痰唾を見ては肺結核の爲めに咯出せしものならむとし、少しく便通緩めば其を腦の解けて下痢するものなりとするに至る、これ等は多くは醫家或は多少醫學の素養あるものに見る處なり他患者に在りては患者自らはかゝる論理的關係を認むることなけれど屢〻醫家に便通は如何咯痰はいかゞ、頭痛はいかゞ、など問はるゝをさも意味深かさうに考へ醫家の診察の一擧一動にも注意し終にかゝる妄想を來たらすものなり、こは實地臨床上注意すべきことなり、醫家はかゝる患者に接したらむには、虚心に、診察をなし深かく推究する樣のことあるべからず、若し又かゝる場合に遭遇せむには之れを利用し精神誘導を試み其の治癒を謀るも可ならむ、これにつき思ひ出でしことあり、往時某處に鼻の病に罹れる病者ありき其は鼻、日毎に肥え伸びて終に五六尺にもなりぬと痛たく心痛し、動作進退不自由なりとて常に傍なる介抱人をして其の假想的に長き鼻を支へしめ、之が爲め諸有名僧名醫の祈灸鍼藥百方施さゞるなかりしも毫も其の甲斐なく、其の親族知友も共に心を痛めしが一日一旅人あり其の患者の居處に過り、其の事情をきゝ、われ試みに治療せむ、といひしかば家族の者之れを聘しぬ、旅人患者の居室に到り襖を開くや否や、仰天驚愕し曰くわれ諸國を巡ること久し、未だ曾てかゝる奇異を見しことなし、君の鼻の太さよ、こは幾尺あらむ、など、、室外に座し其の假想的鼻尖を撫しぬ、患者喜ぶこと限りなし、家族鄕人皆われを以て狂とし、わが鼻を異常なし、とてわが苦痛をも察せずしてわれを笑ふ、今われ君の言によりわが言の虚ならざることを認め聊か安堵せり、君は余が百年の友なり、いかに

余が爲めこの鼻の治癒を謀り給へといふ、旅人其はいとやすきことなり、われ傳來の名藥を有せり其を塗らむには鼻の痩せて本復せむこと疑ひなし、とこれより帶尺を以て其の一端を患者の鼻梁に固定し更に引き延ばし靜に立ちて室外に出で曰く鼻の長きこと六尺なりと手帖に記し患者に渡し、持藥を假想的鼻全體に塗り曰くこれにて鼻の長さ一寸を減ずるならむと辭して歸りぬ次日に至り初めに鼻の長さを計り曰く果然長さを減じぬけふは五尺八分餘となりぬと、彼の手帖に記し患者に渡し再び藥を塗り、長さの減ずべきことを確證し、去る、かゝること數週にして患者は其の鼻の全く原形の如く痩せ復りたりとて喜びはじめて平常に復したり、旅人は心學に長じたる人なりきといふ、この逸話亦わが實地治療上に注意すべきことならずや、こはとまれ、總て上に述べしが如く感動に一致し呈はるゝ妄想を總括して感動性妄想(Affective Wahnvorstellungen)といふなり。

偖てこゝに述べし五つの各妄想成立の鑑別は診斷上にも豫後上にも頗る重要なることなり、これ等の條件によれば妄想の內容は續發的の意義を有せること知らるべくまた總妄想の內容は殆ど固有の我に關係するものなること知るべし、患者に何の關係もなき客觀的妄想は鮮し、患者周圍の山川草木は其の快感の基礎となり同室患者の誇大妄想中に含むに至る、たとひ外觀上何の關係もなきが如く見ゆる客觀的妄想もよく細かく觀察すれば其は患者の自我と一定の關係に變形せるものなる事知らるべし又屢、直接に妄想の主觀なることあり。

妄想の方向は自我の關係の他亦情調に關係するものなり、故に自我的妄想の各內容を、われ〳〵感動生活の二つの主方向に從ひて陰陽に分ち或は大、小に分つ即ち陰性妄想陽性妄想(Negative Wahnvorstellung und Positive Wahnvorstellung)誇大妄想及び微小妄想(Megalomanische und Mikromanische Wahnvorstellung od. Grössenidee)又陽性

誇大妄想

其の一　誇大妄想(Megalomanische Wahnvorstellung od. Grössenidee)

妄想は或は一般に高慢自負となり或は一定の形容をなせる個々の觀

念により現はるゝ者にして其の最も單純なるものは自己の身體の健全、容貌秀麗、成業力、精神健全及び天才、等の誇大となりて現はるゝもの なり、患者は未來永劫不老不死なりと信じ、或は力は山を拔き氣は世を蓋ふの權威ありとし或はよく十里の外を達觀するの明ありよく數里に達する音聲ありと誇り、其の天才は神秘を發き、其の工夫は鬼神を驚すの意想ありとし、曰く預言者なり曰く一大發明家なり曰く改革家なり、と揚々自得す、或は既往の事歴、社會上の事業を誇り曰く桓武天皇五世の孫なり、曰く余が父は王政復古の大功あり、日清戰爭は余が謀計によりわが帝國の勝利となりぬ、曰く月界に旅行し月神と對話せり、曰く龍宮界に詣り美姫と婚せり、など語る者あり、或は周圍に對する誇大妄想あり、其は、其の妻を絶世の美人なりとし、或は同室患者を伯爵にして自己は其を統御するものとし、自ら稱するに將軍を以てし帝を以てし神を以てし、いぶせき病室を以て華麗なる宮殿なりとし、小暗き隔離室に閉居しながらなほ金銀珠玉を以て造りたるが如く考ふるなり、是等の有樣につき診斷上最も肝要なるは妄想內容の固有の色容なり卽ち誇大妄想には同時に叡智虧缺の存ずるか存せざるかを識別することなり、等しく之れ誇大妄想なりされど妄想狂に於けるものと麻痺狂に於けるものとは色容異れり、更にいはむには叡智虧缺なきもの、妄想こゝには誇大妄想は系統たち論理も外觀上たち居れど之に反し叡智虧缺ある者の妄想は支離滅裂なり系統なく論理なく非常の不可有的域に達するなり卽ち月神と夜毎會話すといひ龍神を妾とすといふ、昨日の帝は今や華族となり豪商となるなど皆これ癡狂に見る處なり故にかゝる妄想を單に癡狂性誇大妄想 (Schwachsinnige Grössenwahn) といふ、殊に麻痺狂の發揚期には之を見るなり之に反し、例之幻聽あり幻視あり、而て誇大の妄想あり之れが說明も多少論理的にして卽ち動因あり關聯あるものは癡狂性に非らず、加之癡狂性のものにありては其の妄想は醫家の問により種々變動を生じ易きものにして其の所謂膂力百人力ありと稱するものも千人力かと問へば千人力となり萬人力かと

問へば萬人力となり或は財産に於ける關係も亦然り、かく限りなく誇大することを得るなり。

陰性妄想小妄想

其の二　陰性妄想又小妄想(Negative Wahnvorstellungod. Mikromanische Wahnvorstellungen Klein heitswahn) は不快なる情調を有せる各種の觀念を固有の我に結合するものなり、其の主要なる觀念左の如し。

(一) 罪業妄想　Der Versundigungswahn.
(二) 疾病妄想　Der Krankheitswahn. (hypochondrischer Wahn)
(三) 貧困妄想　Der Verarmungswahn.
(四) 追跡妄想　Der Verfolgungswahn.
(五) 憑依妄想　Der Besessenheitswahn.

罪業妄想
疾病妄想
貧困妄想
追跡妄想
憑依妄想

其の他の陰性妄想の種類は稀なり、化身妄想(Wahn der Metamorphose)など自已の身體の醜くなり變り或は他の動物の體軀に變化したるが如く妄想するものあり此の際之を化獸妄想(Zooanthropie)といふ或は男は女に女は男に其の性の變化せしが如く妄想するものあれど之等は心氣妄想及び罪業妄想と共に機會的に來るものにして、亦追跡妄想と結會することあり罪業妄想は多くは感動に因るものあり換言すれば原發性鬱憂及び苦悶の説明企圖として來るも其が原發性或は幻覺性なるは甚だ稀有なり。

補佐妄想

罪業妄想に時として補佐妄想の固有なる者の現はるゝことあり、患者は其の妄想せる現在の憐れはかなき暗黑なる境遇と下り果てたる奈落の淵をなほ光明世界に浮み出でんが如く或は過去の無辜と幸福につきて誇りがに恰も誇大妄想と同樣に物語る者あり、或る鬱憂患者の如きは殆ど型ての如く語り曰く『予が精神は清淨神聖なりき予は人間の本分を盡し、なり、予は萬事幸福なりしなり、さるが故に予は呪詛されぬ予が神聖なる精神は逝きぬ、全世界は予が爲めには不幸なり、惡變せり』など語る者ありこれ等罪業妄想に補佐的妄想として現はるゝ妄想を對照妄想(Contrastirende Grössonwahn)といふ

對照妄想

心氣妄想又疾病妄想、は屢患者の精神の健康上に現はるゝことあり、

患者は實際の辨別上にも患者自身の感覺にも毫もさる理由なきかさのみ、理由の認むべきものなくして曰く予が腦髓は壞頽せりこれが爲め予が考慮機能もいたく侵されたり、など語るものあり、又屢々一定の不治の業病に罹りしが如く妄想するものあり、梅毒、腦軟化、脊髓癆、肺結核、癌腫などはよく患者の妄想するところなり、これ等心氣妄想の特殊の內容は種々なり、患者は不治の梅毒に罹り命短しと愁歎いかにとも去り難きものあり之れを畏梅毒妄想(Syphilidophobie)といふ、或は何の憂ふるに足らざる輕度の氣管枝炎を以て結核の妄想を發するものなり、又疾病妄想は一定の疾病ならずして一定機能の減弱となりて現はるゝことあり、例之手淫などに因する陰痿妄想の如き或はわれは歩行すること能はず、或は語ること能はずとの妄想を來たすが如きこれなり、これ等の機能上に於ける各種の妄想の反動は殊に重要なり、なほ心氣妄想には特殊の症あり其は微小妄想(Mikromanische Wahn)にして自己の體軀の小さくなりしが如く感じ之を妄想するなり或患者は、自己の彼

微小妄想

此の身體機管の失せたるが如く予は肺臟なし、予は胃を有せず、曰く予が脈管には穢水流通せり血液は全く失せ果てゝ、予が肛門は鎖せり、予が咽喉は癒着せり、予が身體は寸分となりぬ、など語るものあり、これ等固有なる心氣妄想は麻痺狂の鬱憂期に最屢見る處なり心氣妄想に近き姙娠妄想(Schwangerschaftswahn)といふものあり、こは或は既婚婦に來り或は單に女性の人に來る、或はたゞ戯謔をなして衆人を驚さんとの意にいづる者あり疾病性の爲め來ることあり、或は自訴の意にいづるものあり、交接されたり、との幻覺妄想の患者にある時は之れが爲め想像を廻らし姙娠妄想を生ずるなり、故に腸管の蠕動感覺を錯覺的に變形し之れを來たすものあり、これが爲め極めて稀なれど男子にも之れを來だすことあり心氣妄想の成立は多くは罪業妄想に類似せり卽ち鬱憂症及び苦悶の說明企圖に出づるものなり故に其の成立甚だ多種なり、又多の場合には心氣妄想は幻覺などによらざる實際の感覺より直に原發することあり、例之患者は鎖骨上に輕き刺痛を感せむにこれが

姙娠妄想

爲め彼の鬱憂症若しくは苦悶の介在或は共働をまたず直ちに妄想卽ち肺病に侵されたりとの心氣妄想を發することあり、前に述べし論法によればこゝには初め續發的にこの妄想を發し之が爲め生理的鬱憂症或は苦悶を來たし、なり、殊に彼の內臟神經に因り起る臟器感覺はよく心氣性說明を來たすものなり、疾病性感覺は尋常感覺よりも一層心氣妄想と結合するものにして卽ち神經症或は神經衰弱症に見るが如し、例之頭重の感覺は無數の神經衰弱家の訴ふる處なり凡ての感覺は原發妄想を發し或は頭蓋骨腫に罹れりとし、或は腦髓腫瘍に罹れりとするが如し、總て心氣妄想に結合する身體證候、例之龜頭に於ける匐行性水泡疹、神經衰弱證候を、心氣性聯結證候といふ卽ち包皮匐行疹は畏微毒性心氣妄想の聯結證候にして、頭重は腦膿瘍に罹りたりとの心氣妄想の聯結證候なり。

心氣妄想は感動性及び原發性成立よりも稀有なれども亦幻覺性の成立をなすものなり、卽ち只だ觸感及び殊に臟器感覺域に於ける幻覺は屢々心氣妄想の原因をなすものなり、例之患者は頭蓋腔後部に於て固有の運動を感ぜむには此の機管幻覺を心氣妄想に結合しわが小腦は破壞せりとの妄想を生ず、臨床上かゝる幻覺性疾病妄想は、疾病性現實性機官感覺より發せし原發性疾病妄想と區別すること困難にして出來難ぎこと多し、いかにといふに患者が頭蓋內に於ける固有なる感覺は單に幻覺なりや、或は神經衰弱症なるか卽ち腦皮質よりいでたるものならずして末梢性に實際に發せし感覺なるか、或はこの中間物卽ち錯覺性に變形せられたる神經衰弱性感覺、更にいはむには或は錯覺なるか、此の狀態を知ること出來ざればなり。

心氣妄想は夢或は他の妄想より論理的斷定により發すること極めて稀有なり。

貧困妄想

(三)貧困妄想は罪業妄想の如く多くは感動性發生をなすものなり、こは屢々罪業妄想と同時に現はるゝことあり、曰く『われ入院料をいかにすべき』『わが財貨は悉く失ひ父母寒に泣き妻子飢に叫べり』其の苦悶の甚

だしきに至りては曰く「われ床上に死するは勿體なし、野邊に死し屍を露さむ」曰く「牢獄の囚徒となりて死せむ」之れが爲め裸體となり蒲團を除き疊を去り汚穢なる床上に座するものあり。

追跡妄想

(四)陰性妄想の第四類は追跡妄想なり、こは上の三類とは異り、我の實際上及び假想的の患難の原因を仇敵なる他人に歸する者にして患者は他人には何の關係もなきが如く罪業、貧困及び心氣等の妄想を以て其の妄想を發するもあり、されど追跡妄想は常に患者の關係を其の周圍の人に及ぼす者なり、該妄想の成立の方法は多種多樣にして、甚だ屢原發性なることあり即ち實際の感覺より之れを發するなり、例之患者は他人の好意もて贈りし菓子折なども其の追跡妄想の發生の因となるのにしてこの菓子には毒の巧みあり、われにこの毒菓を食はしめ、われ者魔醉せる間に罪を犯さむとするなり或はわれを毒殺せむとの陰謀なりとし、一杯の水も狐疑して飲まず一箸の飯も容易く口にせざるものあり或は敵あり遠方より電氣を通ずるが如く或は催眠術を施すが

追跡妄想の成立方法
(一)原發性成立

如く妄想するものあり、殊に屢之れあるは幻覺又は錯覺より發生する事之れなり、幻覺性の罵詈誹謗の聲音は殊に追跡妄想の起因をなす者なり、夢も亦該妄想の原因となること稀ならず、甚だ稀有なるは感動性起因より、追跡妄想を來たすことなり該說明企圖は患者に鬱憂症或は苦悶ある時其の原因を種々に追究し其を周圍の人に歸するなり、追跡妄想の補佐妄想は甚だ多し、追跡妄想の誇大妄想に結合する事は既に述べたり、補佐的追跡妄想は殊に屢心氣妄想、殊に原發性心氣妄想の上に現はるゝものにして患者は初め各種の心氣妄想を形我し誰しもあるが如く其の原因を探索し自己の假想的疾病はいかなる由緒ありて來たりし者ならむと種々に思を廻らし終に其の影響、例之毒害などを其の假想せる仇敵性周圍に歸しこゝに追跡妄想を發するなり、亦罪業妄想も追跡妄想の補佐的の性質を有するものにして患者は容易ならざる大罪を犯しぬと妄想し、かるが故に周圍の人は患者の一擧一動に注目し且つ患者と伍するを恥辱とし忌避するが如く信ずるものあり

被害妄想
注察妄想

これ等の續發性追跡妄想の考慮經過は、かるが故に原發性追跡妄想とは全然異なれりこれ患者は原發性のものに在りては『予は罪を犯し、ことなし全く寃罪なり然るに周圍の人は仇敵なるが故に予を追跡するなり』と語るが常なれども續發性のものに在りては『予はいかにも惡ろし、予は天地も容れざる大罪を犯したればなり、故に周圍の人は予を追跡するなり、予はこの追跡を受く、其の威迫さるゝ罰の如きは當に應ずべきなり』と語るを例とす、いかに兩者の間に差別あるかは知られなむ則ち一は惡を他に歸し一は惡を我に歸すればなり。

追跡妄想の內容は個々の症にありては非常の變化あり、其は全く不定の感情例之何となく薄氣味わるく不安心なる感情或は他より干涉を受け恒に考慮の儘ならぬが如き感情或は每に他より侵害せらるゝが如き感情或は他より觀察さるゝが如き感情などに限れることあり多くの場合には一定の形型を有せり、之れにより又被害妄想(Beeinträchtigungs Wahn)注察妄想(Beachtungs Wahn)などの名あり、これ等は或は患者の

被毒妄想

社會上の位置と所有物との上に關係する事あり、患者は其の妻の實際篤實にして貞操を缺きし事なきになほ之れを姦夫あり密に盜をなし自己の衣服を他人に貢ぎ家產の破滅を來たす者なりとし之れを物語るものあり、又或は自己の身體上に關係する事あり、患者は他人の毒蒸氣又は飲食物の混せ物により患者の健康を侵害するが如く妄想するものあり之れを被毒妄想(Vergiftungswahn)といふ或は身體の神經性不安ある時は其を定かならぬ電氣機械にて電氣を通せらゝが如く或は磁石力に感するが如く妄想するものありかゝる他より不思議なる手段にて禍害を加へらるゝが如く妄想するものを被幻妄想(Beeinflussungs-Wahn)といふ、或は遺精を以て不明なる仇敵の陰謀に因るものとし妖術を以て精液を搾り出だし陰萎とならしむるか或は主に其の身體を衰弱せしむるが如く妄想するものあり、遺精の長く打續く時は庸醫の爲めに人工的の陰萎症に陷らしめたりとの妄想を來たすことあり、又追跡妄想は暴力的强迫により生命を侵害さるゝか或は色事的名譽

卽ち貞操を侵害され强淫たりと妄想するものあり、上に述べし被淫妄想之れなり、又患者は實際に病理的考慮制止或は他の病理的考慮及び感情現在せるを患者自らも其の異常を感じ仇敵の所爲なりと妄想せるものありかゝる患者は仇敵の爲めに自己の考慮を奪はれ且つ錯雜せる考慮を取換へらるゝが如く妄想するなりこもまた追跡妄想の一種なり。

追跡妄想の首謀者としては患者は或は周圍の一定の人を示し或は不確不定なる對手を指すものなり、殊に後者に在りては患者の所謂、魔物、雲氣違、社の仲間、耶蘇教徒、無政府黨などを示指するものなり、通例患者の周圍には大いなる徒黨あり其が陰謀を以て穽に陷れむとするが如く其の追跡妄想は纒の廻りて果てしなきが如く循環し患者は終に恰も廣く分たれたる齒輪の中心に在るが如き狀態を呈するものなり、患者の日每々々の事變は一に其の對手の人に關聯するものなり、追跡妄想の自我的構造は多くは鋭く進み慢性になればなる程徐々になれば

なる程其の發達成熟するものなり。

上に誇大妄想の條に於て該妄想は間々周圍にも移ることを述べき、今こゝに陰性或は小妄想につきてはかゝること極めて稀有なり、唯だ罪業妄想患者に在りては間々同時に之れを訴ふることあり曰く『予が爲め神は世界を去り座しぬ、予が爲めに總ての人は惡し樣になりぬ、予が爲め百事荒敗し萬事逝く矣』これ屢〻聽く處なり、他人殊に親族が不幸、貧困、疾病となりぬ、或は追跡され或は强迫さるといふなる妄想はなほ多し、こは幻覺に直接相應したる內容を有するものなり。

陰性妄想の一種固有なるものは虛無妄想(Nihilistischer Wahn od Verneinungs-Wahn)佛國學者之を(Délire de négation généralisée)といへりといふものあり、こは罪業妄想を結びて現はるゝこと多し、患者は自己の罪を重大にして寧ろ惡魔を以て理想し、其の罪の深き事窮り無きが故に永劫之れを贖はざるべからず卽ち罪業の消滅することなしと妄想し、これより更に他の考慮を聯絡結合し罪業の消滅せざること均しく其の場處に於

ける患者の身體も無限時存在するものとし(佛人のDélire d'énormité)患者の妄想一層歩を進むる時は曰く、殘りの世界は滅盡し最早存在せず、總て他の人類は只だ影のみにして神も座さず、と語るものあり或は『總ての人間は飢餓に迫れり、世界死して日輪は彼方に去りぬ』など語る患者あり、多くの場合に殊に老耄性癡狂に在りては虚無妄想は心氣妄想より來る事あり、患者は初め、われに心臓なし、肺臓なし臓肝なし、といひ終には一方には不老不死なりとの妄想あるに拘らず一方には同時に自己の心身も存在せずと、語るに至る、患者は、われの身體はなしわれの食するといふはわれの食ふにあらずして惡魔之を食ふなりといひ或は障壁之れを食ふなりと語るものあり、終には人類なく、世界なく、我もなく、神もなく、虚なり、無なり、と妄想するに至るこれ虚無妄想の名ある所以なり。

憑依妄想

憑依妄想は他物のわが體に憑附くとする妄想にして、我邦に古くよりこれあり之れを物の怪、また物つきといふ、支那にては之を邪祟といり、憑依の字は、左傳に出づ、こは或は罪業妄想よりし、或は追跡妄想よりし、或は心氣妄想よりす、殊に心氣追跡二妄想よりするを多しとす、稀に誇大妄想よりすることあり、内容は狐、狸、犬、蛇、生靈、死靈、狼、魔鬼等にして殊に我邦には狐憑證を多しとす、憑依妄想の發生方法は追跡及び心氣妄想と畧ぼ同じ。

我邦に於ける狐憑病につきては、予別に取調べしものあり、狐憑のことは東洋に限れる事にて西洋にはなきことなり、支那にも我邦にも之れが記載鮮からず其のはじめて記録に載りしは今昔物語に『……物氣ものにつきていふやう、おのれは祟りの物氣にも侍らずうかれまかりとほりつる狐なり云々』とあるこれ其のはじめなり、今昔物語は宇治大納言隆國卿の著はし、者なるが故に之れにより推究すれば同卿は大日本史に據るに後一條天皇の長元年中官參議を勤め白河天皇の承暦元年に至りて薨せし人なる事明なり、偖ては今を去る事九百年頃には既に狐憑病盛に行はれし者なり、爾後各種の記載多し、其醫籍に記され

しは、京都の醫家香川脩德の行餘醫言卷五、癇症の條下に癇之一症にして眞の狐憑或は有るならむ云々と記せるが始めなり、其の之れを精神病なりと斷定せしは今を去る事百二十餘年前、文化年間、伯耆國日野醫家陶山大祿にして其の著人狐辨惑說に縱横說去り說來りて議論頗る痛快なり、當時曚昧なりし時代に於て夙に衆醫に先んじて之れが斷定を下だし、大祿の見識懷ふべし、後元治年間水戸の本間救其內科秘錄卷五四邪祟の條下に細述し、畢竟これ精神錯亂の致す所なり」と結論せり、其の精神病學成書に上りしは吳博士の精神病學集要妄想條下に摘記されしを以てはじめとすこれより先き恩師故榊博士は(Alopecanthropie)といふ學名を命せられき、

其の後予の實驗によれば妄想より來るもの最も多く妄覺之れにつぎ情調殊に發揚性情調之れにつぎ極めて稀に精神感染症に因するものを認めき、病證との關係は急性慢性妄想狂殊に慢性のものに最も多く(島村俊一氏は嘗て島根縣下にて三十四人中臓躁狂に最も多かりきと報告せりき)躁狂及び臓躁性精神病之に次ぎ中酒性精神病其の次に位し、麻痺狂老耄狂之れに次ぎ鬱狂、腦梅毒最も少かりき、(狐憑病新論參照すべし)之れを要するに憑依は蟄時の遺風なり文明の光の隈なく到らむには全滅に歸せむこと疑ひなからむ、

妄想の發起及び運命

妄想の發起と其の運命と——

妄想は多くは或は幻覺に接續し或は尋常感覺に結合し突然として發生する事あり之れを俄然の妄想(Einfall)といふ、他の發生は最も不定なる忖度により漸々進むものなり其の他の因業は成立方法に隨ひて種々の差異あり感動性妄想の發揚性にして更にいはむには或る原發性發揚性感情に一致せる者は揮發性にして急に變換するものなり、幻覺性妄想の持續は全く殆ど其の基礎なる幻覺の持續に關するものなり妄想の迅速に變換するものは多くは因業短く幻覺性妄想の或る固定をなすことなし、原發性妄想は多く進行性の發生をなし固定する傾性を有するものなり、唯だ或る一二の頗る稀なる精神病、急性單純妄想狂

妄想の固定

系統すること

反省的解釋

に在りては多種多變にして一部齟齬せる揮發性なる原發性妄想を發するものなり、されど總て他の場合に於ては原發性妄想は強き固定性を呈しこれが爲め豫後の不良を表はすものなり、

妄想の固定するには屢〻二個の機轉の結合するものなり一は妄想の系統にして一は反省的解釋これなり。

(一)妄想を系統たつること(Systematisirung der Wahnidee)こは個々の妄想に補佐的妄想を引き論理的の關係を統一することにして、就中この系統の仕方は原基たる妄想に想像的構造裝飾により生ずるものにして、例之最初原發性妄想『われはかどわかされし小兒なりき』との妄想ありかくて進み行く時屢〻年餘にも經過せむには、他の或る場所にて生れたれども其處より盗まれ患者の所謂現在の兩親に持來たりとの想像により之れを裝飾するなり、或はこれ等の裝飾は發病時の初め以前の事歴は今の妄想の意味に表はすことあり。

二反省的解釋(Retrospective Auslegung)非常に長き疾病經過を恰も實際に

固着妄想
妄想城郭

一致せるが如く轉倒し想像、教育、論理的才能及び社會上の位置に隨ひて其の妄想の構造を愈々自然的に甚だ隔異ならしむ者なり、補佐的妄想の系統的發生は既に述べしが如し、最も屢〻之れを見るは續發性誇大妄想によりて追跡妄想の補充さるゝことなり、稀には初め誇大妄想を發し後補佐的追跡妄想を誘發することあり罪業妄想は多くの場合に隔離性にこれのみ存するものなれば問々追跡妄想或は對照的誇大妄想、或は一般虚無妄想に進み行くものなること上に述べしが如し、豫後的に甚だ肝要なるは心氣妄想はともすれば補佐的追跡妄想に發達し易き傾性を有することこれなり。

此の系統性妄想或は妄想系統は患者の生涯の如く長く持續する者にして之れを固着妄想(Fixe Idee(καταβολή))或は妄想城郭(Wahngebäude)といふ該妄想系統を年餘も經過を細かに觀察すれば多少輕度の消長變化を來たす事認めらるゝものなり、其の妄想の各系統には各人精神發育の一定度大に關係あるものなり癡狂者も亦其の妄想を色飾すれど其の

叡智虧缺は各系統の上に呈はるゝ者なり之れに反し叡智虧缺なき患者に在りては外觀上論理の矛盾せる如もよく其の鋭敏なる假說を以て之れが辨明をなし均一ならしめ其の矛盾を排除する者なり癡狂に在りてはかゝる齟齬あるも毫も意とせずまた之れを排除する事能ざるものなり、系統性妄想と反對に無規律、突飛なる離妄想の症あり、例之複雜性妄想狂者の如きは間に、天地は固きものなり、黑は白なり、予は日本なるコンスタンチノーペルにて九戸の家を有せり、曰く予は九百萬年前この世界を創造せり、など語るものありこの妄想の離想は癡狂に特に見るものなれども却て非癡狂患者にも亦重症遺傳素因あり且つ輕度の觀念離想あるものに合併し現はるゝものなり。

妄想と時との關係

妄想と時との關係(Zeitliche Beziehungen der Wahnvorstellungen)妄想は其の內容的にも直接現在に關すること勿論なれども亦其を過去、未來に關係せる者稀ならず、未來に關係せる妄想は今更いふまでもなからむ、彼の誇大妄想に罹かれる患者は唯だ現時の我のみならず亦未來の成業、運命の上にも之れを及ぼして一大計畫をなし其の技量をふるひ其の社會上の位置を進めむとつとむる者にして、事業擴張の計畫をなし屢〻旅行を企し或は多額の資を投して工事をなさむとし或は多婚を企つるなど之れみな現世のみならず、未來にも益誇大ならむとの意よりいでたるものなり、陰性妄想なる疾病妄想に罹れるものは其の妄想的の死を懼るゝの念より其の關係を未來に及ぼし、家族を集めて讀經をなさしめ其の罪業消滅を希望するものあり、心氣妄想に罹れるものにして屢〻自己の身體を屍體の如く棺に入れしめしものあり、又わが親族等が未來永く不幸に打勝たなむとの妄想も之れに屬するものなり。

畸想

實際上肝要にして且つ上述の妄想より異れるは過去に關係せる妄想なり、こは左の二要素によるものなり。

(一)畸想(Erinnerungsentstellung)これにより過去の實際の事歷の妄想性暗形を來たすなり、こは最もよく臟躁家及び癡狂の輕度の者に見る處なり臟躁家は或は機轉、例之醫家の診察を受けし事歷あらむに之れを稍〻意

識的方法に近き想像を以て之れを彩り次ぎに或は機轉卽ち醫家はわれに强淫を試みたり、との畸想を抱き之れを妄想するなり更にいはむには患者は一は實際と想像との區別最早判斷出來ず其か爲め終には其の機轉反覆され全く畸形的方法に再生せらるゝによるものにして患者は其の畸形的なる事態を事實として訴ふるなり、多くの癡狂者の虛誕も亦かゝる無意識なる或は患者には忘れたる追想像の畸想を想像により來たすなり癡狂には亦著しき記憶障礙あり且つ過半再生の眞實の缺けたるにもよるものなり。

錯想

(二)錯想 (Erinnerungstäuschung) は畸想にて恰かも幻覺の錯覺に於けるが如き類似の方法にて區別さるゝものにして畸形は實際上の事歷之れが基礎となり只だ其の再生の上に變化を來たせるものなれど錯想に在りては毫も基礎となるべき事歷なくしてたとへば夢もなく幻覺もなくして而も之れを來たすものなり、こは感覺とは全然緣なき疾病性に起りし想像にして患者には實際の事歷として認められしものなり、こは妄想に於に於て區別せしが如くこゝにも主證を分つこと左の如し。

(い)感動障礙より來る錯想――躁狂者は其發揚性感情により百般の事物を仰々しく吹聽し其の事歷をもいかにも偉大なるが如く語り鬱憂狂者は苦悶あるが爲め屢犯罪をなしゝが如く考へ總ての事態を以て其の罪業を彩るものあること上に述べたり、この二者の他稀に固有の錯想の來たる事あり、躁狂者は多くは彼の仰々しき事歷の實在せざることを意識するものにして鬱憂狂者は實際事歷の解釋畸想をなすものなり、錯想は麻痺狂の發揚期にも之れを見るものなり。

(ろ)錯想と現在に關係ある他種の妄想との關係――或は妄想は過去の事歷の之れが動因となり且つ其の色彩を添る者あり、この錯想の證形は麻痺狂に見る處なり又慢性妄想狂にも見る處なり殊に生來妄想狂には特に之れを呈するものなり、妄想狂者は或る他の境界に生れしが如く考へ諸有事態を以て其の固有の追想より其の境界の小兒とし

て侵せられむが如く記述をなすものあり、其は數多の大學に學び過去の世紀に生活せしが、嘗て謀殺企圖に遭遇せし爲め夙に小兒時より民間に在るが如く妄想するものあり、これ等の錯想はなほ一定の妄想系統立てること認めらるれど麻痹狂の錯想は多くは關聯なきものなり、曰く余は社會大臣なり、幾多と大戰爭をなし、尿を以て世界を溺らしめたり、などの如し、老人癡狂にも之れと類似せる聯絡缺けたる非常の不可測なる誇大妄想を抱くことあり、試みに之れに尋問をなし種々に誘導せむには妄想狂者は其の錯想を飾脩し新なる錯想を發するものなれども麻痹狂者は任意に新なる錯想なすものなり且つ麻痹狂の妄想は非常に變化するものなれども妄想狂者のものは固定不變なり、加之妄想狂者は感動障礙の之れに關與すること鮮けれど麻痹狂者は之れに反し多くば感動障礙の之れに作用するものなり。

竟も他の妄想或は感動と關聯なき錯想

（は）他の妄想或は感動とは認むべき關係なき錯想――こは多くは全く直發的に起るものにして患者は或る數時前或は數日或は數週前

或る事實を經歷せしが如く確信を懷く者なり、こは他の患者が幻覺の實在を信じ、健人が或る實際の事歷の實在を信するが如く其の假想的の事歷の實在を確信する者なり、こは其の患者には之れを起すべき幻覺もなし又其の相應せる事歷なくしてかゝる意想を起すにより之れを證明する事を得るなり、加之この錯想は一定の覺性的强度を結合する幻覺を來たす者なり、故にこもまた追想的幻覺(Erinnerungshalluzination)といふなり、追想幻覺は精神誘導によりて之れを變形せしめむ事到底能ふ可からざることなり該錯覺の內容はことに不關性なり、該症ある患者は數日前或は數時前に醫家を訪ひ、かゝる談話をなしきなど確信するものあり、他のものにありては錯想の內容は同時に存在する妄想により色容を彩す或は之れを同化する者あり患者は昨日大將となり附近の山脈に於て戰爭をなしき、など物語るものあり、これ全然明白に知れ渡りたる出來得べからざる事に注意をなし、或る一瞬間之れを保持し次の瞬時には既に之れを反復し之れを確信するなり、稀には他人

より毒せられたりとの想定するものあり、こは麻痺狂の錯想及び急性妄想狂の錯想には最も屢〻之れを見るなり、急性妄想には奔想症と同じく現はるゝものにして屢〻恢復期に於てもなほ長く打續き患者をして奇異の思をなさしむることあり。

感覺に及ぼす影響

患者の妄想の其の感覺に及ぼす影響(Einfluss der Wahnvorstellungen der Krankenauf ihre Empfindungen)――妄想ある者は其の感覺に關係を及ぼすこと少くよく日常生活となすものなれども之れあるものは其の感覺を妄想的に變形するものにしてこゝに變形したるものは上に述べし錯覺性妄判なり、患者は實際に聞ゆる隣家の喧躁しき談話を、徒黨の密議を凝らすものと聽くのみならず其を罵嘲の聲として聽くものなり、又直發錯覺は全く患者の其の瞬時の現在せる觀念列には一致せずして他の其の關係あるは補充的妄想の爲め起る事あり、又多の場合には本來の幻覺を來たすものにして其の疾患性觀念生活の影響は感覺細胞に及び之れが爲め外來刺戟なくして疾病性感覺を起し之れが爲め一

心痙證

運動及行爲に及ぼす影響

病識

方には其の妄想の固着形成を助くる者なり、殊にこの妄想の感覺上に及ぼす反動は心氣性疾病妄想に於て之れを見るなり、則ち患者は初め聯絡症候として神經衰弱性異覺證あり、この聯結を其の心氣妄想に及ぼし、該妄想の意義にてこの異覺證を變形亢進し之れが爲め益〻其の妄想の固定構成を助くるなり、殊に肝要なるはこの反動を運動機に及ぼすことにして例之運動麻痺せりとの妄想はこゝに或る運動麻痺を來たすなり心氣症に於ける該精神的運動麻痺即ち心痙證(Psychische Lehmung)に就きては更に述ぶべし。

妄想の運動及び行爲に及ぼす影響――(Einfluss der Wahnvorstellungen)

妄想と迫想と異る要點は既に述べたり則ち妄想ある患者は其の妄想の疾病なりとの認識即ち病識(Krankheitsbewusstsein)缺くるか或は之れあるか更にいはむには病なりとの批判的辨別聯合全然缺くるか或は約と全く缺ぐるに在りさはいへまた患者は折節不定なる疑ひを起すことあり、殊に幻覺或は夢より妄想を起し、者にありては之れを認めら

る、なり、患者は時に幻覺にはあらぬか實際なるにやあらむ、將た妄想にやあらむなどの疑ひを起す事あり、なほ甚しきは發揚症卽ち病理的發揚感情より來たりし妄想に在りても之れを認めらる、なり、該症に於ては若しも毫も叡智虧缺のなからむには通例醫家の其の妄想の妄なる事を本末を明にして懇切に說得し妄想を打破し患者の克己の念を喚起せむには其の妄想の暫時排絕され批判的辨別聯合をして打ち勝たしめらる、事屢見る處なり、鬱憂性妄想に於てはこは甚だ稀有なり、原發性及び補佐的妄想あるものには殆ど破格なく完全なる批判缺亡を呈するものなりたとひ之れあるとも疑ひの時期は每に甚だ短し、其の本人は全然原發性の妄想の爲め變形せられたればなり批判病識は殆ど完全に失せたればなり、かるが故に該妄想は通例不治にして該妄想ある精神病者の豫後は不良なりと診斷さる、なり、更にいはむには病識の有無、現否は其の治癒豫後上に關係ある事重大にして實に實地治療家この病識を朦烟霧裡より喚起恢復せむことを目的とすべければ、なり、屢、又該病識に對しこれ等の患者に在りて固有なる排除をなすものありこれ等の患者に於ては明白なる實際事實及び論理を說けど却て不正なりしし却て反抗の念を加へなほ他の妄想を結撰することあり其は追跡妄想家は毒液を秘密かに注射せるが如く或は催眠術により或は對話により自己を害するものなりとするなり、大多數の場合に於て患者はこれ等の妄想に對して全く之れを諾容せり。

偖て妄想の行爲に及ぼす影響は第一に上に說きし病識の度に關し第二には妄想に伴ふ感動。如何に關するものなり、感動强ければつよき程其妄想を行爲に移すことも速かなり、第三には其の妄想は急性にして夥多現れしか、或は徐々に患者の考慮を侵し、ものなるか、これによりても其の行爲上の影響に關係あり、この次第に妄想を形成するものは彼の原發性妄想あるものには間々制止觀念の優勢を占むる時期に於ては妄想は行爲に及ぼす影響を制止するものなり、か、る患者はよく自ら之れを抑制することを知り或はよく其の妄想を隱匿する者あり

衝動性行爲

妄想の診斷

故にかゝる患者は長く健人と看做され社交も普通に行ふものなれども一朝或は特殊の觀念維列をなし、制止觀念排除さるゝや忽然激發興奮し鋭き言語文詞に或は行爲上に其の妄を暴露想するものなり、こはよく法醫學上鑑定上に見る處にして注意すべきことなりとす、殊に肝要なるはかゝる行爲は突然起りし妄想の影響なるが、但しは俄然的妄想(アインフォル)により現はしゝ者なるか、こを鑑別することこれなり、この俄然的妄想によりて突然殺伐なる運動をなし、兵士あり其は、コーヒーに毒ありとし其を持ち來りし對手に對し突然暴力を加へ重傷を負はしゝなり、かく突然暴露せし妄想により現はるゝ行爲を衝動性行爲(インプルシーヴェ Impulsive Handlung)といふ、之れある患者は數時間或は終日かゝる離想樣なる行爲を混合するものなり。

妄想の診斷(Diagnose der Wahnidee)

妄想は必ずしも總ての精神病に現はるゝものに非らず、されどこれあるものは既にこれのみにても精神障礙在ること斷定さるゝなり、更に

確信

誤信

いはむには精神病者の陳述を以て一に妄想なりとおもふは甚だ非なり、精神障礙の疑ひある人の實際の確信を以て妄想と誤らざらむこと、これ診斷上鑑定上最も肝要なり例により左に其の注意すべき點を示さむ、其の一確信もまた妄想樣に現はるゝ事ありされば實際事實の現在する上は之れを妄想なりと直に斷定するは非なり、之れ寧ろ心理的なればなり、若し夫れ個々の場合に於て其の確信の餘りに露骨的ならむには其は果して實際に基礎となるべき事實の現在せりや否やを、細緻に檢索すべきことこれ醫家のつとめなり、況してかゝる場合に於てはわれわれは、患者自家に就き直接に詢問すべき機會なく却て公平を缺けるにやあらむとおぼしき他人の陳述をきゝて之れが證明をなさむこと殊に愼むべく心すべきことなり。

其の二確信は誤りなりとするもなほ之れを妄想なりと斷定することを能はず、更にいはむには、たとひ吾々の見識を以ては其のさるいかゞはしき確信を證明するには足らずとも實際事實は現在せり卽ち其の

人が之れに應じてさる確信を抱く見解はつくものなり、況して健人にても誤解に陷り易きこと多きに於てをや卽ち一方には事實自家を誤り一方には輕卒疎漏なる聯想あり感動亢進あり而て一定の性質ある時は間々誤信を來たし易ければなり、殊に其の性格の疑念深き人なるか或は剛愎なる人ならむには折節の觀念及び辨別は殆ど全く追跡妄想或は誇大妄想の如き觀を呈するものなり偖てはかゝる場合に當り其の疑はしとおもはるゝ妄想の內容に就き細かに診査をなし其の人の根據とせる外界事實の如何なるものなるか、將た其の心理的成立は確乎たりや否やを精しく檢索すべきことこれ醫家のつとめならずや。なほ顧慮せで叶はぬことは元來、誤信と妄想との境界線は恰も、精神の健全といふことゝ、精神の病的といふことゝの判然たる境界線を引くこと能はざる如き關係あることこれなり、然らば醫家たるものいかにしてかゝる一定の妄想性辨別なるか、但しは否らぬか、將た誤信と妄想との境界を定むること能はざるかの重要なる疑問をいかにして氷釋

すべき判明なる境界線を引くべき規則もなきをいかにして之れをなすべきか、夫吳去越來的の診察ならむにはともあれ苟も民事上刑事上之れが鑑定をなさゞるべからざる場合に際してはわれ〳〵醫家の責大に任重し、われ〳〵醫家のつとめは神聖なり、露、曲學阿世の念あるべからず、これかゝる際に當りては其の一定の斷定は一にわれ〳〵醫家の主觀的推定に任せざるべからざればなり。

更に危險なるは妄想あるも其を看破するの明なく其を看過するにあり、こは殊に次ぎの場合に細心注意すべし。

其の一匿狂――患者は其の妄想を巧みに隱匿することあり、殊に慢性妄想狂の原發性妄想或は補佐妄想あるものは其を隱匿すること屢なり、さはいへ其はよく注意すれば其の擧動の尋常ならざる者多きにより之れを推定する事を得るなり、權威張りたる顏貌高く支へたる頭首、剛慢にして威嚴ある步調、一般庶民とは隔絕せる容姿、優遇の請求、偖ては嚴格なる文詞、普通の文にもなほ莊重なる語句文格を用るなどこ

はこれ誇大妄想として考へらるゝなり殊に屢感動に乘じては自己の姓名の頭或は下に爵位例之何爵某某何爵或は將軍大臣などを附記することあるは長く其の人を觀察する人の知るところなり之に反し追跡妄想ある者に在りては其の人の周圍に對する狀態を觀ればほゞ之れを斷定する事を得るなり患者は斷えず住所を變じ住家を轉じつゝ其の假想的の追跡を避けむとし或は他の者にありては日毎に異れる割烹店にて飲食し仇敵の侵入し毒殺せむことを防ぎ或は其の窓戸に奇異なる封閉鎮封紙をなし敵の侵入を防ぐ等の舉動あり多くの患者は長らく詢問を試み倦まざらむにはよく其の妄想を自白するものなり。

其の二患者はたとひ一定の客觀的根據あり之れにより確信を有するとも其の確信はなほ妄想として示さるゝ場合あり患者は其の單純の咽喉加多兒を以て梅毒なりとの確信を有し既往證にも亦實際既往に梅毒に感染せし事確められむにかゝる場合には全くこれ患者が其

身體の健康に顧慮する意よりいでしものにして卽ち誤想なり更にいはむには患者が事々しく解釋せる誤りにして未だ妄想と稱すべからず通常かゝる確信を其儘の直ちに妄想を以て呼ぶは非なり若し患者にして多數の醫家を訪ひ總ての醫家が異口同音に其の梅毒ならざる反證を說諭するをも頑として肯せず自ら認めて梅毒の證候なりとし之れを確信し其の誤れる觀念の意義によりなほ多くの不調なる證候を其の身體に呈せむには醫家は之れを妄想なりと斷定するの權利あり如何にといふにこは內容には非らずして其の根據なる事實の認識の誤れるこれのみにても妄想なりとの診斷は下さるゝを況して一方には殊に新感覺新觀念は疑問なる妄想の爲め制止障礙されたればなり、かくて梅毒家は全く妄想性畏梅毒症を呈せしなり之れを要するに妄想は每に各事實的根據の全く缺けずとも卽ち事實と結合して起るものなるが故になほ病理的には妄想の完全なる診斷下さるゝなり。

其の二追想 (Zwangsvorstellungen)又强迫觀念

追想

迫想の定義

諸君、迫想は或る不正なる觀念結合なり正しき辨別的聯合はありながらなほ患者には去らむとして去ること能はず忘れむとして忘るゝこと能はず折節觀念の間に迫り入り患者をいたましむる觀念なり、患者は自ら其の不正なることを知れり患者はよく其を穢汚なり忌まゝしとおもへり、よく其の不正にしてよしなき觀念なりとの辨別觀念は優れながらなほ其の不正なる觀念の失せざる者なり、之れ迫想といふ名のなづけられたる所以なり、偖てはいかにしてかゝる觀念の起るかといふに、こは迫想の內容を形成する觀念結合が異常の羅列に異常の勢ひなどの如き病理的事態により反復出現するものに他ならず、總ての迫想は殆ど強き陰性情調を伴ふものなるが故に患者は強ひらるゝが如く迫らるゝが如く一種の苦痛を感ずるなり、多數の患者はこは健全なる觀念に外觀的直發的に侵入する障碍なりと語るものあり。迫想は單に辨別狀をなして現るゝのみならずまた個々の觀念の像にて現はるゝ者なり、健人にも間々これあり其は或る恐ろしき出來事の

迫慮

視覺的迫想像或はおのれの好める佳曲の聽覺的觀念は數時乃至終日強迫的に起る者なり、これ等のなほ一層高度なる者は一定の精神病者に見る者なり、健人に在りてはかゝる迫想は甚だ強き情調を伴へる觀念に限局り現はるゝものなれど病者に在りては無差別不關性なる觀念により其の迫想の內容をなす一種の性質を呈はすものなり、殊に神經衰弱家などには屢、或る苦痛證候として來たるものなり、該類別の聽覺的迫想は屢、無意味、無聯絡なる詞列又は文辭なることあり、かく毫も事實の據るべきものなくして無意義なる觀念のをりふし強ひらるゝが如く現るゝものを特に又強迫性考慮單に迫想(Zwangsdenken)といふ。既に妄想の章下に於て俄然的妄想(アインファール)とこの滅裂せる迫想との區別につき患者はかゝる觀念を起すも其の當時其の觀念の統轄の意識にとむるものなく患者準りに之れを信せず之れに重きを措かずと述べきされどこの無意味なる強迫考慮の呈はる時は多くば患者を不快ならしめ各、疑思關聯などの精神機能を營むこと能はざらしむるものなり、殊

語憑證

迫想の成立

に數列及び人名地名などの固有名詞の詞書寫的に迫想として不斷反復呈はるゝものなり、佛國の精神病學者は之れを語憑證（Obsession par un mot Worthessesenheit）といへり、こはこれ個々の迫想像の呈はるる場合なりるは、

これよりなほ要めなるは妄想と並存する處の迫想なり、狹義に於彼の辨別の形容を以て呈はれ妄想と並存する處の迫想なり、狹義に於ける迫想は其の發生殆ど慢性にして多くは先天性或は後天性の神經及び精神病發性體質の上に發するものなり、かく慢性なる發達をなせるは卽がて其をして執拗頑固ならしむる所以にしてかゝる迫想の全治するもの甚だ稀有なり。

迫想の成立――は種々なり、多くは覺性觀念と一致するものにして、例之患者は燼燒たる寸燐或は途上に遺棄てられたる寸燐を見る時は直ち『この寸燐は未だ全く消えたるには非らずこれが爲め火災の原因となりもやせむ』との考慮の亢進するものあり、この考へは初めなほ生理的なりいかにといふに彼は其の感覺により一の完全なる聯想を以て之れが斷定を下したればなり、然るに患者に在ては寸燐は實際全く消え果て全く危險なきに拘らずなほかゝる懸念を生ずるものなり健人にはかゝる懸念は一度にして二度目は全く安心し更に歩を進むるものなれど患者にありては亦健かなる批評的辨別聯合の打勝つ時は『寸燐はされどなほ燃えて火災の憂あり』との考は不正なり、無根のことなりとし安堵し靜かに行過ぎむとはするなり、されどかゝる辨別あるにも拘らず迫想は再び迫まり『寸燐はされどなほ燃えて火災を起す憂ひあり』との考へを起し更に之れを注視し再び其の實際よく燃え盡たりさる懸念はあらじと其の考への不正なることを認むれど、亦甚しく不正なる杞憂の爲め之れを支障され其の杞憂去ること能はず、善良なる鑑識のあるに拘らず毎に其の實際感覺を疑ふこと深く反復かゝる杞憂をいだくものなり、かくなり行けば之れに更に新しき要素加はるなり、要素とはいかにこれ感動なり、則ち今迄はかゝる觀念競爭は殆ど感動なくに營みしもの、今は之れに苦悶の加はる樣なりしなり其は

『若しよく寸燐の消えたりや否やを見屆けざらむには火災起るべし』との苦悶迫り來るなり、この苦悶は恒忡の定型性のものを現はすなり、他の場合に於ては唯單純に精神的に經過し毫も全身の併發證候をかねざるものあり、この迫想に發する苦悶の情調は重要にしてこは今患者に苦痛に多き苦悶及び迫想を去らしめむとする媒助をなすものにして則ち患者は斷えず其の寸燐の實際に消えたりや否やを認めざるべからざるやうなし、これが爲め患者は夜もすがら、其の身體の疲かれ果つる迄、還りては注視し、往きては疑ひ、往きつ、戻りつ、其の寸燐の邊りを去ること能はず、終に徒ら夜を明かすものあり、笑ふ可きに似たれど病證なれば詮方なきことなりかし。

迫行

迫想迫行(Zwangshandlung)を起すものなり、上に述べしが如く迫想は批判的辨別聯合の優れるにも拘らず患者の行爲に檀まなる偏頗なる影響をなすものなり之れ卽がて迫行なり、迫想は次第に發達する時は初め其を起し、時結合せし各覺官感覺の方向には關係なくして起るやうなる者なり則ち終には最早寸燐を見ずして之れを來たすやうなり卽ち寸燐は既に迫想の內容となり、如何なる處にても『寸燐はなほ煌めけり火災は起りやせむ』との考へ迫るやうなる者なり、患者は到る處に何處かに寸燐の棄てありはせぬかと探索するやうなり稀有なれどもこの迫想一歩進めば患者は迫想により幻覺を來たすに至る、或る患者の如きは之れが爲め或る街衢に處々に火焰を見たりと信じ噴きし者あり、これ火災の迫想は今や感覺細胞に其の影響を及ぼし、なり患者は其の迫想の不正なるを知ると均しく其の影響は一致し起れる幻覺の實在卽ち錯覺なる事も全く認識せれどなほかつ其の『火災』の影響により恰も火災の實際に在るが如く周章狼狽し一定の行爲をなすに至るなり。上に述べし迫想の成立は實際感覺に聯絡する事最多し、この感覺に聯絡せる迫想內容は其の個々のものにありては甚だ多樣なり、こはなほ各論に於て詳述すべし、迫想の成立方法は到る處に之れが因あり。多くの迫想は或る物體感覺により來たる者にして患者は高處に上り

瞰下すこと能はず、かくすればこの視覺は直に强迫的に迫想を來たし、若しや墜落をやせむとの懸念勃起し、他の場合に在りては眩暈を來たし殆ど墜落せむ計りに欄干に倚り掛るものあり、こはあるものはよし其の家族などの高處に上らざらむやう其を誡め自己に迫想あることを自白し墜落せむとの注意を與ふることあり。

他の場合に在りては迫想の成立には初めより苦悶感動の作用することあり、迫想と同時に劇しき苦悶感情を發し腸或は心部に始り頭部に上る、壓重、溫感等を感ずるものにして屢、全身顫振を發することあり、この經過をいかにといふに患者は或る廣き場所を通過せむとするに其の場所の視覺の起るや否や直に場所の巨大にして通過すること能はずとの觀念を生じ、同時に怔忡を結合する恐懼的苦悶感覺を來たすなり、この迫想の成立は初め迫想あり續發的に苦悶を來たし苦悶感動は迫想に調節的に來たり一定度に情調を來たし、なり。

なほ他の場合に於ては苦悶感動は迫想に先ち來たり卽ち迫想は苦悶の地上に來たるなり、屢、迫想はなほ迫想の一定族につき述べしが如く苦悶の附加的說明企圖となり現はるゝものにして患者は苦悶の發作時のみ迫想を來たすことありこの成立は全く稀有なり。

他の場合に於ては覺性感覺の助けを俟たずして迫想を來たすことあり、或る少年患者の如きは斷えず姪行的觀念の觀念に迫り之れに惱みし者あり、患者はこの觀念の無意義にしてやうなきこととは知れどいかにしても其を去ること能はざりき、この覺官感覺には全く關係なくして起る迫想も時として苦悶感動を來たし、時として之れを缺くものなり、上の例には全く之れを缺けども亦之れあるものあり、或る患者は、耶蘇基督と色事の關係ある觀念を抱き之れが爲め苦悶を來たし、ものあり、患者は其の觀念の實際不合理不正なることを知りしなり而もなほ基督と色事的交際を結びしとの念は去らず之れが爲め大に苦悶を來たし、なり、一般にかゝる感覺の助を俟たずして來たり又毫も苦悶をかねざる成立方法は非常に稀なり。

迫想の內容

迫想の內容――は妄想の如く亦多樣なり、我との關係の缺くること極めて稀有なり、殆ど總て其の內容苦痛性不快性なり、愉快なる迫想も誇大妄想と同じ意味にてなきには非らざれども非常に稀有なり、殊に一定の感覺の助けにより起る迫想は其の各種の關係により頗る夥多なり、今左に主もなるものを擧げむに。

狹處を畏る迫想

(一)畏狹處性迫想(Claustrophobie)こは苦悶をかぬる迫想にして狹隘なる場所、例之瀘車、劇場などの視官的感覺により發するものをいふ、この種の內容は類似性のもの多し(一)火災の爲め街道の狹隘となり或は塞りて通行すること能はず、とするもの、(二)狹き處より外にいづること能はざるもの、等の如し。

尖圭物を畏る迫想

(二)畏尖圭物性迫想(Aichmophobie)こは尖圭なる物體の視覺により發する迫想にして患者自身にも周圍にも害を及ぼさずや、との迫想なり針(釘、火箸などを、其が食事中嚥下せずやと懸念するなり、余の患者は針を見れば其が指尖或は足趾より潛入せずや、との杞憂を懷き裁縫をなすこと能はず、患婦自身にも其の愚なる考なることを語りしものあり精神誘導法を試み大に佳良となりしが其の後の經過を詳かにせず。

水淫性迫想

(三)水淫性迫想(Mysophobie)こは患者の身體及び其の周圍の物體の不潔を忌む迫想にして終日反復洗濯洒掃をなし、周圍の人の觸れて汚さむを恐るものなり佛國學者之れを(Délire du toucher 畏觸狂)といへり所謂水淫、潔疾などいへるも之れに屬するなり。

臨場苦悶

(四)臨場苦悶(Agoraphobie)こは既に述べたりなほ他の症は各論に述ぶべし。

疑問症

(五)疑問症(Folie de doute=Grubelsucht)迫想はまた疑問の形容にて來たること稀ならずこは多くは患者は不圖目に觸れし物體につき突然種々の疑ひを起す者にして、例之單簡なる物體に對し、「いかなればこの物はかく造られしならむ」「いかなれば他の如くあらぬか」「いかなればこをかく呼ぶならむ」「こを他の如く呼びなさざるはいかに」などと益もなき穿鑿に時を費やすものなり、卵の楕圓なるはいかに机卓の四隅あるは

いかに、木の葉の絲なるはいかに、と之れを考へ之をれ考へいづる爲め苦悶を感ずるなり、こは誤想とは異れり之れかゝる無益のことにつき苦痛さへに感じて考ふること誤想にはなき事なればなり、これ等の迫想の一般批判は殊に疑問の形容を有し、且つ感覺との聯絡は缺けたり。迫想は、模型的に反復する傾性を有し、苦痛性を帶び同一なる迫想にて長く患者をいたましむるは特徴なり。

迫想の運動及び行爲に及ぼす影響

迫想の運動及び行爲に及ぼす影響(Einfluss der Zwangsvorstellungen auf die Bewegungen bezw Handlungen)迫想は病識あるに拘らずなほ患者の行爲上に影響を及ぼし迫行を現はすこと既に述べき、こは一は異常なる強勢により一は確乎不斷の反復により一は殊に其に伴ふ情調によるにまた述べたり實に迫想其の物は患者に不快苦痛なり而もなほ苦悶の強ゆる處となり本意ならずも迫想の意に出でたる行爲を現はすなり苦悶は患者の迫想を遂行せざれば止まず、かくて迫想は迫行を呈するものなり迫想はなほ多くの場合にはなほ他の運動的要素を有するものにして則ち異常に強き觀念の反復現るゝが故に一定の運動或は行爲をなさで叶はぬやうなるなり、例之患者は或る一定の物體に觸れで叶はず、然らざれば或る不幸に遭遇すべしとの苦るしき觀念を有し、患者は其の觀念は本意ならず疾病性の觀念なることは充分承知したとひ物體を觸れずともさる不幸の出來ることなく、物體は觸てはならぬとは萬々認識しながらもなほ迫想の爲めに驅られ常に反復物體に觸れで叶はぬなり、これ等の場合及び他の多くの類似せる場合にも迫想の運動的傾性を有するものなること知らるゝなり、さはいへ時によりてはたとひ運動することを止むるとも不幸に遭遇することのなしとの觀念なきに非らず、こは迫想は不動因的觀念か又は假動因的卽ち一定の運動又は行爲を起さで叶はぬといふこも起さずして忍ばるゝ觀念の上に限れる時に然り、又多くの患者に在りては迫想は今自己のなさむとおもふ志望に反對にして自己のかくせではならぬと試みる運動も迫想の爲め終に反對なる運動をなさではならぬやうなるものあり。

迫動及迫行の內容

迫動及び迫行の內容――迫想の內容の種類の多きに隨ひて其の結果として生ずる迫行の種類も夥多なり、最も輕易なるは辨別狀態ならずして單に個々の迫想像に止るものにして、若患者か或る音曲の語聲像或は迫想像に迫られむには之れに應じて其の語を强迫的に發するか或は其の曲をうたひいづるものなり强迫考慮も亦迫話となり現はるるものなり、又强迫考慮は迫話の上に充分完全に現はるゝことも稀ならずかゝる患者はよく「不隨意的に言語の舌に達し口を滑」ることを告ぐるものあり、之れ迫想は全く言語の運動域に限局せればなり、蓋し此等の場合には聽覺的語像も共に興奮するものならむ、迫話の固有なる連續を爲すことあり殊に猥褻なる言語不潔なる語を迫話するものあり、同時に擬語症(Echolalie)卽ち人の言語を不隨意的に繰返す眞似又顏面筋の不隨意性調節運動の眞似卽ち、擬顰(Grimasse)をなすことあり、迫想の極めて複雜なる運動狀態を來たすは其が辨別狀態をなせる時にあり、これ等の迫想の生理的機制及び其の行爲の影響は既に述べた

擬語症
擬顰

り、多くの迫想は、實驗的、命令的、及び禁制的の內容を有する者にして他の場合に於ては主として或る制止的影響を有する者あり、臨場苦悶になやめる患者は總て他の場所を避け臨場苦悶起らむかとの苦悶により終には一歩も其の住居を出でざる者あり、他の患者に在りては迫想の爲め總ての人名を見聞注意せでは叶はぬ觀念を抱き終日之れが爲め時間を費やす者あり卽ち自己の邂逅せる人或は以前に邂逅せし人名を一々手記し之をれ暗誦する者あり或る人は通行する街道筋なる戸々の名札を一々手記し點檢せざれば叶はぬ觀念を抱きし人あり、最初の例は禁制的にして後の例は命令的なり。

患者が迫想の運動的實驗を試むるや否や其の瞬間に其の迫想及び其に附帶せる苦悶去り、其が他の機能に變ずるや否や卽時に迫想及び其に附帶せる苦悶は再來するなり、患者は屢、固有の行爲及び感覺を疑ふものにして、例之患者は固く戸を締めながら直ちに、われは實際戸を閉ぢしにやとの苦しき觀念起り、實際火止めをよくなしたる火鉢も、未だ

其の儘に放置せしにやあらむと疑ひ、實際堅くねぢしめたる瓦斯の栓も、なほ自ら自身を疑ふやうなるなり。

稀有なりとは既に上に述べたれど、迫想はまた幻覺及び錯覺を惹き起すものなり多くの迫想の實際上他作用は或る運動麻痺を來たすことにしてこは心氣妄想によりて起る麻痺に相當せり、彼の臨場苦悶ある患者は他の場所を歩くも迫想忽起り忽眩暈を來たし脚の痿弱を來たし立つことも歩むことも出來ざるやうなりこゝに精神的に起因せる運動失調或は似非痿弱を來たすものにして換言すればわれは最早一歩も歩むこと叶はずその觀念は他の觀念を制しなほ其の運動機上に影響せしによるものなり。

又迫想は身體平滑筋に影響を及ぼすことあり、例之衆人群居の席に出れば強迫的に便意を催すものあり、或は實際劇しき下痢を來たすことあり。

迫想の出現及び診斷

迫想の出現及び診斷(Vorkommen und Diagnose der Zwangsvorstellungen)迫想の

單一なるものは健人にも亦見ることあり、例之自己の嗜好せる音曲或は恐しき像を見るときなどには屢、強迫的にこれ等の物像の觀念むら〳〵浮むことあることは既に述べき、全く健康なる人に在りても折々或る考の去らざることあり、例之夜間寢床に就く時殊に旅宿等の他人の宅に在りては其の居室なる押入の中か或は隣の空室か、若しくは寢臺の下に、誰か潛伏せるには非らずや、との念起り、其處等を見廻はし何も認むべき物なく、安堵し寢に就かるべきに却て其をまた疑ひ、されど若しや、と其の認定を一度ならず二度ならず三度四度反復するものあり、かゝるが故に病的を健全との境界も判然定むること困難なり、迫想は殊に左の精神病に來たる。

(一) 神經衰弱症
(二) 鬱憂狂
(三) 殊に迫想狂に多し

迫想は迫想狂に於ける唯一主要なる證候にして鬱憂狂には定型性鬱

憂性妄想の自訴により之れを知る事を得べく神經衰弱症にも亦迫想狂に見るが如きものを見る事を得べし、殊に注意すべきは遺傳素因ある人は迫想の爲め間に突然長時の行爲の反抗性影響として衝動性迫行をなすことこれなり、稀には重症機質的腦髓病の前驅證候として來たることあり殊に痲痹狂に見るが如し。

甚だ稀には迫想は實際の妄想に進むことあり、則ち迫想にかゝれる多くの患者は其が精神病なるべきことを恐れ痛むの餘りこの恐懼は進みて稀には實際となることあるなり、迫想は恆に重き一般考慮障礙より起り迫想は通例只だ或る部分的障礙より起るものなり、且つ妄想、迫想の同一の人に同時に來ること甚だ稀なり。

迫想の鑑識

迫想の鑑識――一見手易きやうなれども細かに之れを觀れば困難なり。

迫想は屢〻看過さるゝことあり之れ患者は迫想ありと告げむには精神病と看做されやせむとの疑懼を抱き之れを隱匿すればなり殊に醫家に對して然り、加之屢〻かゝる患者には現在他人の面前にては其の迫想の行爲に於ける影響を暫時避け忍ばるゝものなればなり、醫家のかゝる時に遭遇せむには家族及び周圍の人に詢問すべし。

妄想と誤り易き事も患者に病識の有無確不確をたしかむれば手易き辨別つくべきなり、さはいへこも亦時に矛盾する場合なきに非らず、妄想ある患者にも時として一定の病識を有することあればなり、尤もこは原發性に起りしものなるか將た幻覺より來たり、其の妄想を受領せるものなるかにより診別に難易あるものなり。

かく妄想に對する競爭はよく認むる處なり患者の疑ひは成立せる實在性の妄想に於てせず、其の不正なる辨別聯合に對し之れを疑はむにはは其は妄想に非らず、かるが故に患者は毫も現在其の考慮を疑はずして却て直に其の觀念の全く不正考慮なる事を現すを以て特徴とす、かゝる其の迫想は異隔せる病素として其の考慮中に侵入する事明かに知らるゝなり、病未だ固定せざる患者に於てはよく其の病識を確かに

心氣妄想との區別

有し其の迫想の行爲に及ぼす影響を抑制する者にしてよく醫家の言を諾する者なり、妄想を有する患者にも時々人のわれに彼此の奇異なる考慮を與ふるが如く或は人の爲め彼此の考慮を强ゐらるゝ如く語る者あり、さはいへかるゝ考慮をしたゝむる患者は多くは其の疑ひも長き競爭の後終に敗北に歸し卽ち妄想性考慮を認識するやうなるものなり、この疑ひはかゝる場合に於ては少しも妄想と認むべきものなく却て發萠せる妄想を現はすこと知らるゝなり、なほ注意すべきはかゝる場合卽ち其の妄想を初めなほ其の考慮に於て異隔なる强迫性に要素として認むる患者は多くは之れより再び他の新妄想を結合し、加之周圍の人は何か毒物が何かにて其の秘密なる考慮を發せしめ且つ不正なる或は異隔せる觀念を興奮せしむるが如く信ずるものあり卽ち妄想は一部は矯正され新妄想(强迫觀念の妄想)之れに加はるなり、迫想に於ては決してかゝることなし、

殊に間々迫想と心氣性妄想との區別困難なることあり、いかにといふにこの二者は全く類似せる事態の下に發起し全く類似せる運動性續發證候を呈するものなればなり、例之上に述べし臨場苦悶の全證候集合は心氣妄想ある人にも呈するなり患者は其の通過せざるべからざる廣き場所の目に觸るゝや否や突然或は毫も苦悶なく或は苦悶をかねて汝該所を通られず汝が脚は其處を步むこと能はず若し强ひて通らむには不幸を來たすべしとの妄想の爲めに驅られ、患者はされどなほ直に此の心氣妄想の正しきかを疑ふことなほ迫想ある患者が臨場苦悶に就き其の絕對に不正なること根據なきことを疑ふと同樣なり、加之心氣妄想ある患者は通過されぬといふ場所の益なき詮索をなし他の道を迂曲しつとめて其の場所を避くるものなり況んや其の不正なる觀念は間々精神的運動麻痺を發し其の場所に來たるや足なへ身搖めき脚立する事能はざるか或は前へは一歩も進むこと能はず、恰も縛制したらむが如く仁王立ちに衝立つべくなるに於てをや實にこの二者の運動性結果は同一なり、これ其の兩者の鑑別困難なる所以なり。

離想との區別

多くの迫想は間々稀に其の內容變換し且つ屢、毫も辨別結合に於てせず個々の迫想像に限局せることありかゝる時は既に述べし離想の性の俄然(アインファール)の妄想卽ち妄想性に全く無意味なる內容上に於て其の區別困難なることあり、さはいへども亦其の患者が强ゐらるゝ考慮を打ち消し個々の觀念は健全なる考慮に反對に强迫的なることを認知するか或はこの俄然(アインファール)の妄想に於て彼の考慮は障礙され其の考慮は正しきと認るらるゝかにより區別つくなり則ち前者は迫想にして後者は妄想性俄然の起想隨て妄想なればなり、其の他複雜なる卽ち辨別狀態をなせる迫想を複雜なる妄想とすれば間の區別も亦之に準すべし。

辨別聯合虧缺

辨別聯合の虧缺(辨別衰弱) Defecte der Urtheilsassociationen. (Urtheilsschwäche)

辨別は或る夥多の各聯想の總て作用する結果にして既にまへに述べし『梅が香はゆかし』といふ辨別に就きてすら夥多の聯絡結合をなせる夥多の觀念によるものなり、辨別の內容は總てこれ等の觀念と其の聯絡結合との羅列の如何に關係するものにして、辨別の正確を失はむには卽時其の觀念及び其か聯絡結合に或る非常なる變化を來たすものなり、則ち妄想に於けるも將た迫想に於けるもこれ辨別の不正なるに因るものにして個々の聯絡結合及び觀念は聯想上に於て異常の影響を生じ終に感覺の監査疎くなり行くに因るなり、不正なる辨別はまたなほ個々の觀念及び個々の聯絡結合の虧缺ある時にも來たるものなりこは決て辨別構成出來ざるに因るか或は或る精神病の經過中障礙を受くるに因るものなり、こは前に述べし先天的或は後天的に來たる觀念及び聯絡結合の缺乏に因るものにして卽ち叡智虧缺或は癡狂と稱するなり、之れにより又先天的或は後天的叡智虧缺若くは癡狂の別あり、これ等の叡智虧缺は唯に個々の觀念及び聯絡結合の缺乏を呈するのみならずまた其の觀念及び聯絡結合の乏しきによる不正辨別をも呈するものなり、此の觀念及び其の聯絡結合の缺乏と不正辨別との二證候を約して亦辨別衰弱といふなり、實に觀念及び聯絡結合の乏し

きことゝ其によれる辨別衰弱とは先天性癡狂と同じく後天性叡智虧缺本症の態をなすものなり辨別衰弱は妄想の客觀的に辨別不正なるよく似たれど兩者の別は明なり則ち辨別衰弱にありては觀念及び其の聯絡結合の缺乏により妄想は個々の觀念及び聯絡結合の偏頗に一方に優勢を占むるによればなり。

先天性の辨別衰弱も亦後天性のものと同じく種々の程度あり最も輕度なる批判缺亡症より重きは辨別缺亡症を呈するに至る前者は一二微少なる複雜觀念及び其の聯絡結合の缺けたるに因り後者は極めて單純なる卑近の觀念及び其の聯合すら缺けたるに因るものなり殊に最も著しく目立つは後天性癡狂に於ける辨別衰弱症なりこれ其の人の尋常なりし辨別機能と比較對照さるればなり、されば文學家などのこれに侵されむか其の文詞の理想の著しくあはれに主要なる論據を落し着易き誤謬もこれに心づかず科學的研究は更なり卑近なる文事も出來ざるやうなる、これ一定の觀念及び其の聯合は失せ行きたれば

なり、商人の之れに罹らむか其の商機を誤り賣る可からざるに賣り買ふ可からざるに買入れ出納の關係に違算を生じ失敗を來たし易し通常家人は之れを其の原因なるが如く醫家に告るものなれども其の實病は既に徐程進行したりしなり、職工などの之れを惱まむか、例之指物師などは其の細工の意向ふつゝかにして棚箱などの修復すらはじめ種々に準備し寸法とりたる木片も其を組み立る時に至れば寸法とり〳〵にしていづれを先きにしいづれを後に組むべきか更に辨別なし、かく職業上に於けるが如く辨別衰弱は日常交際の上にも現はるゝなり、患者は極めて單純なる事態すら今は自己の省慮により指圖すること能はず、何につけ角につけ其の要點と關係とを看過するやうなるなり、最も重き癡狂にありては最も單一なる辨別聯合も失せ果て、『梅の實は酸し』といふが如き單問なる唯だ二つの觀念及び其の聯合よりれなる辨別すら最早正しくなすこと能はず、概念或は屢、其の聯絡結合は失を果し行き、複雜なる辨別は甚だ混亂し卽ち精神域に於て起る處の

無數の潜在觀念の競爭は打絶えたればなり且つ論理上の錯誤甚しく終には潜在觀念の聯絡結合も亦辨別聯合も失せ果て患者は最早辨別を營むこと能はずこに、至りて一の文詞も記すること能ざること知らるゝなり、なほ僅少なる觀念は保存さるゝも其はたゞ無關係なる排列をなすに止るかるが故に辨別衰弱の最も重症なるものは恰も彼の前に述べし重症なる奔想症或は夥多なる幻覺などの續發證候及び原發性聯想障礙との識別の條下に述べし離想を來たす者なり、之れによりて癡狂換言すれば辨別衰弱に因る離想と奔想症に因る離想と幻覺性離想と原發性離想或は不聯想との區別はつくなり、則ち辨別衰弱症即ち癡狂の離想は個々の觀念及び聯絡結合の耗失せるにより觀念の現存せざる(Nichtvorhandensein)により奔想による離想は聯想の異常に疾速なるが故に關聯せる間に在る觀念の跳逸するにより、幻覺性離想は夥多支離流轉する覺性觀念の爲めに來たり、原發性離想或は不聯想は聯想經過の一般外形障礙即ち毫も內容的虧缺なくして來たる者なり。

病理的解剖的基礎

辨別衰弱の經過

病理的解剖的基礎 Pathologisch—anatomische Grundlage—妄想及び迫想は全然腦皮質及び聯合經路の機能障礙なれども辨別衰弱は多くば機質的の障礙に因るものなり、先天性癡狂にありては其の腦皮質の聯想纖維及び神經節細胞は尋常の數に發育せざるが其の生後直に發したる病的機轉、例之初生兒腦溢血或は腦栓塞後の汎延性續發硬化の爲め侵されたるなど、夙に其の素地を有するにより、後天性癡狂にありては之れが顯微鏡的檢査を遂ぐれば其の皮質の神經節細胞及び殊に其は一部は腦皮質の內部にあり、一部は皮質(Markfaser)との境界に來たれる聯合纖維も共に重き變化あること認めらる。

辨別衰弱の經過——妄想、迫想は多くの場合に治癒性なり、更にいはむには一定の各觀念及び聯絡結合の偏頗なる不平衡も次第に平衡をうるやうなるべければなり、なほ著しきは既に述べし奔想症、考慮制止、離想の如き聯想の外形或は一般障礙も亦治癒性を有せり、獨り辨別衰弱症に至りては殆ど總て不治性なり、加之之に罹る者は全然觀念及び聯

合の虧缺の如き不吉なる前徴證候として認めらるゝなり、先天性癡狂に在りてはたとひ醫療的敎育を施すも苦心慘憺たる耐忍と時日とを費やすも漸くにして僅かに其の觀念及び聯合の數を殖やすと出來また辨別も稍〻佳良とならざるに非らざれども其の結果無益に歸する者なり之れこれ等の人の腦髓發育は、さる複雜なる觀念聯合を構成するに堪へざればなり、かるが故に先天性癡狂をこれ等の關係より區別さるゝなり則ち一は諸有敎育を施すも效なくして概念及び聯合の乏しく隨ひて辨別衰弱を呈するも、第二は敎育の缺乏せるより其の概念及び聯合の乏しく、辨別衰弱を呈する者換言すれば敎育を加ふれば多少の效果ある者とこれなり、若し夫れ後天性癡狂の豫後に至りては一層不良なり、之れ其の病的機轉は進行性にして既に述べし觀念列の進行的原則により觀念は觀念聯絡結合は聯絡結合、と次第に障礙壞敗し終には全く辨別聯合缺亡症を來たす者なればなり、諸有醫療も諸有醫藥も病機の進行を止むるによしなく、失せたる觀念及び聯合も拾集する

辨別衰弱の鑑識

に詮なし、況んや其を訓導敎授し之れが恢復を謀らむとするに於てをや患者は著明なる事態も最早新觀念及び其の聯合を生ぜざるやうなり且つ辨別も復た明瞭には生ぜず、たとひこれあるとするも其は單に個々の聯合及び觀念を新に生ずるのみ、この新生せる觀念及び聯合は既に述べしリボーの原則の如く其の最も短期間に始まり再び壞頽に歸するなり、かく叡智の素地の保持再生の出來ざるはこれやがて機質的基礎に於ける病的機轉の神經細胞及び聯合纖維の壞頽を來たすことを證するものに非らずや。

辨別衰弱の鑑識――こは屢〻困難なる事ありいでつぎ〴〵に述べむ

一、疾病性先天性の辨別衰弱症と、生理的尋常なる辨別機能の狹隘なることの境界は屢〻困難なることありこの二者の判然たる境界を分ち難し則ちまへに概念構成の疾病性虧缺症と、概念構成の尋常狀態なる狹隘なるものとの區別は次第に移行し判然せざるものなりと述べしは之れが爲めなり、こは先天性辨別衰弱の病理的性質を確むれば可なり其

は適當なる教育を試むるもなほ其の效少く其の概念及び聯合其の辨別機能はなほ周圍の衆人の如き尋常の高さに達せざるか否かを確むれば會得さるべし、教育を加へて尋常人と一樣か其に優れる域に達するものは之れ生理的辨別の狹隘なりしに因るものにして否らざるものは先天性のものなりと知るべし。

二、後天性辨別衰弱は多くの場合に、考慮制止或は離想と誤り易し、この類症鑑別は既に述べし、考慮制止及び離想の條下を參照すべしなほ辨別聯合に對し注意すべき要點は左の如し。

一、考慮制止ある患者の辨別は遲徐なるか全く不能なることあり、原發性離想ある患者は其の辨別上に全く關係なき觀念を集合することあり、癡狂にありては誤なき辨別をなす其は辨別に關聯せる觀念は或る一定の意義に結合し且つ明に他に見易き適當なる觀念看過するによる、唯重症なる後天癡狂は上に述べし如く辨別聯合の關係缺亡を來たし全く原發性離想の觀を呈する事あり、なほ注意すべきは考慮制止の患者は甚だ徐々にて多くば一定の時間ををきて之れが辨別をなし離想ある患者は斷へず其の辨別の準繩を失ひ、辨別衰弱ある患者は誤りたる準繩をなすことこれ等を察すべし。

二、考慮制止ある患者も離想ある患者も一樣に單純なる問にも遲徐に答へ或は不關係なる辨別をなし一方には偶然其の制止及び離想の去らむには頗る複雜にして困難なる問に對しても之れが答辯をなすものなれど辨別衰弱に罹れる患者は之れに反し其の答辯の仕方は同樣にして或は遲徐或は速かにといふが如きことなく、加之其の問の複雜なるに隨ひ其の答辯困難に且つ不正なり。

三、感動狀態――考慮制止に伴ふ感動は鬱憂性にして他の場合には制止は癡呆症をかね離想にありては感動無規律なり、辨別衰弱に在りては不充分なる動因によりて沈鬱悲泣症蠢愚なる發揚症の無批判性移行をなして互に變換するものなり。

四、行爲――考慮制止あるものは總ての運動制止され遲徐停止され、

離想ある人の運動は全く無規律無關聯なり、辨別衰弱あるものは個々の運動も大抵動因を結合し其の動因は不完全にして且つ不充分なり、之れ其の叙智虧缺あるに因る爲めなり、なほ考慮制止、離想及び辨別衰弱の重要なる類症鑑別診斷法に就きては各論を參照すべし。

行爲の障礙

第五章　行爲の障礙 Störungen des Handels.

諸君、今や吾々は行爲の障礙につき述ぶべくなりぬ、既に述べし如く行爲は聯想必然の結果なり、則ち聯想は感覺及び追想像(或は觀念)の一定數發現し其の共働はこいに毫も其の間に新なる精神機能の介助を要せずして直ちに行爲を生ずる者にして特殊の意志機能の存在するには非らず、故に精神病理學上一の意志障礙なるものなし精神病者に於ける行爲は只だ其の行爲に前驅する聯想上に病理的要素の存在するに隨ひて其だけ障礙さるゝのみ偖ては精神病者の行爲の障礙の單一ならず各精神機能に隨ひて複雜なる現象を呈することも知らるべし

また感覺或は觀念或は情調偖ては觀念或は前驅する聯想機能等各精神機能障礙により一々之れが分解診査をなさゞる可からざること勿論ならむ。かるが故に疾病性行爲を各種成立方法の基礎に據り分つ事左の如し

其の一　感覺障礙に基ける行爲 Handlungen bedingt durch Empfindungsstörungen.

其の二　觀念の構成或は保存の障礙に基ける行爲 Handlungen bedingt durch Störungen in der Bildung oder Erhaltung der Erinnerungsbilder.

感覺障礙に基ける行爲

其の三　感動障礙に基ける行爲 Handlungen bedingt durch Affect-störungen.

其の四　聯想障礙に基ける行爲 Handlungen dedingt durch Störungen der Ideenassociation.

右樣の順序によりつぎ〳〵に述べむ又行爲の尋常より多く且つ亢進せる狀態を總べて運動性激越症といひ尋常より減退せる運動性動作の狀態を總べて運動性制止症(Motorischen Stupor)と稱す。

其の一　感覺障礙に基ける行爲

感覺障礙中主要なるは殊に幻覺及び錯覺なり、この妄覺の行爲に及ぼす影響は既に述べたり、多くの場合に於て患者の幻覺或は錯覺ある時は其の尋常感覺との權衡上妄覺の方優勢を占むるが故に隨ひて行爲の上に影響を及ぼす者なり、之れと一樣に通常彼の聯想經過上に發る制止的觀念と幻覺とあらむには其の行爲に於ける幻覺の影響は無力なり、總て幻覺は行爲を示定する者にして、該影響は幻覺の夥多にして且つ殊に迅速に累出すればする程著明に現はるゝ者なり、之れにより其の行爲の如何を觀て幻覺の如何を推知さるゝなり、又幻覺の週餘或は月餘に渉り次第に經過し一の之れを矯正する者なくなは亦尋常制止觀念の一定の制止をなさむには患者は幻覺の實在を疑はずなり行き其の行爲に於ける影響は少くも限制さるゝ者なり、之と反對に妄覺の迅疾に亢進累出し患者を侵さむには自制も亦甚だ速に起る者なり、妄覺の年餘にも渉り成立する時は次第に其の幻覺に於ける影響の減ずると稀ならず、慢性幻覺家は殊に其の幻覺のはけしく出現するに拘らず其を看過し注意せざるやうなる者なり、幻覺の實在を信ずるに隨て其の運動或は行爲に於ける影響を抑壓するに至る、殊に長く院內居住をなすものに在りては院內規律の下に幻覺に對し其の運動を抑壓するやうなるものなり、終には其の幻覺も意に介せず、高々其の罵嘲的幻聲に反應するも一樣に內外の働作を營むものあり。

幻覺性詳にいはむには幻覺に基ける行爲の一般證候を記述せむこと悉く能ふ可からざることなり、こは幻覺の內容の如く變換し且つ多樣なればなり、臨床重要なるは殊に幻覺性行爲の性質計り知る可からざることなり、則ち突然なる直發性幻覺は患者自他に對し或る不慮の禍害を及ぼすものなればなり、されば幻覺あるものは一般に周到なる看視を要するなり、彼の法醫上の關係も間々該幻覺性行爲より生ずることあり。

幻覺より行爲上に制止、疾速、錯亂性等の影響を及ぼすことはなほ下條に述ぶべし。

虧缺性行爲

其の二　觀念の虧缺に基ける行爲

健全なる人に恒に現存し且つ行爲に影響を及ぼすが如き觀念の缺存せる行爲は疾病性の者なり其は一は觀念は決て構成すること能はざるものにして一は或る精神病の經過中之れを失ふによる前者は先天癡狂にして後者は後天癡狂なりこの二者の行爲を稱して虧缺性行爲(Defektlandlungs)といふ該行爲は病理的に單一なるものなり健人は感覺により複雜なる方法に於て抽象概念を生じ動因競爭等をなすものなれども癡狂に在りては或る現實感覺により僅一この現實概念を生じ直に行爲に移るが故に其の行爲はなほ著く狡猾にして奸智あるもの、如く見ゆ彼の犯罪行爲の如きは外界の事態を優逸して適合せるが如く見ゆれどもなほ癡狂の虧缺性行爲たるを免れず卽ち抽象概念の現出の缺けたればなり。

動物の運動行爲も亦癡狂の狡猾なる如く其の餌物に對し或は獵人に對する敏捷なる總て現實感覺より運動に影響すること驚く可きものあり、癡狂の行爲も動物のこれ等の行爲もよく類似せり卽ち複雜なる抽象的概念の動因競爭中に呈はるゝことなく卽ち該概念現存せざればなり、癡狂者例之一の時計の其處に置かれたるを見直ちに其を執るこれ等癡狂の竊盜は多くの場合によく認めらるゝものなれども癡狂者は所有物といふ複雜なる概念を形成せるにも起しにも非らず、彼は只だ斯る單簡なる現實概念として保持構成されたる時計を知るのみ其が己の、汝の、などいへる區別も所有物なる抽象概念も缺けたりいかにといふにこの複雜なる觀念は聯想競爭に起らざればなり而て其の疾病性行爲はこゝに竊盜を呈はしゝなり。

感動障礙に基ける行爲

其の三　感動障礙に基ける行爲

感動の行爲に及ぼす作用は重要なり、陽性情調は行爲を活潑疾速ならしめ陰性情調は行爲を制止遲徐ならしむこは最も單純なる鬱憂症或は悲哀性感情と最も單純なる發揚症或は快樂性感情の在る時に現はるゝものなり、鬱憂症は運動制止を來たし、發揚症は運動興奮を來たす、

鬱憂症の運動制止は皮質聯合の一般遲惰症の部分證候にして既に昏迷として述べたり、運動性興奮症は之れと一樣に皮質興奮の一般疾患症の部分證候にして既に激越證として前に說きぬ、この病理的に因る行爲の外形的障礙に就きては以下詳細なる說明をなさむ、一般聯想障礙より來たれる行爲障礙には二樣の區別ある者にして感動(卽ち鬱憂症發揚症)の運動制止又は運動興奮を發せる者なりや或は運動制止又は興奮の感動障礙を誘起調節するものなりや、之れなり、單に單純なる鬱憂症及び單純なる發揚症は單純なる方法に於て行爲に影響するものなり、卽ち前者は苦悶感動結合し後者には憤怒感動聯合し其の影響多くは複雜なり、苦悶は初め皮質の聯合に制止的に作用し行爲に於ても亦然りされど其の苦悶の次第に加るや屢、逃走の觀念を出現する者にして患者は其の苦悶を遣らむとし不安不靜なり日ねもす夜もすがら四邊を馳せ廻り一日一週も悲傷して止まず之れを、苦、悶、の、運、動、性、激、越、症、といふ屢、無意義なる逃走企圖をなすものあり或は其の苦痛を去

らむが爲め自殺企圖をなし或は自殺を遂ぐるものあり、或は苦悶ある患者は打ち見たる處全く運動制止を呈せるが如く靜かにして而も突然迅風疾雷の到るが如く自殺企圖をなすことあり、他の場合に於ては苦悶は周圍に禍害を及ぼし突然家を燒き子を殺ろし自己も相果つるものあり、他の患者に在りては其の苦悶を昏迷せしめむが爲め酒荒をなすものあり、又劇しき苦悶の狀態に於て劇しき手淫に荒むものあり殊に女癡の患者に於て然り。

癡呆症の行爲に及ぼす關係

癡、呆、症、の、行、爲、に、及、ぼ、す、作、用――は情調の一般に失せたると局部失せたるとに隨ひて種々の差異あり總ての情調の平等に缺乏し或は失せ行く時は其の行爲に及ぼす結果最も僅微なり、心理學上行爲は運動觀念の陽性情調を伴ひて現在せる時に現はるゝ者にして鬱憂症に在りては行爲は半は缺乏せりいかにといふに陰性情調の一般分散傳達の結果として總て或は殆ど總ての運動觀念は陰性情調を伴へばなり一般癡呆症にありては影響缺乏せり之れ總てか或は殆ど總ての運動觀

念は主もに各情調缺くればなり、癡呆症の運動遲惰は殆ど每に又一般聯想遲惰を結合するものなるが故に之れを亦癡呆性運動遲鈍症(Apathischenmotorischen Stupor)と稱す。

情調の部分的缺亡すのもの、行爲に及ぼす影響は彼の先天及び後天癡狂の定型性のものに見るが如く甚だ種々なり、之れ複雜なる卽ち抽象概念の情調は構成されざるか或は失せ行けばなり前者は先天癡狂にして後者は後天癡狂なり、患者の行爲としては最も多くば道德上概念の情調の缺亡せる事認めらるゝなり、此の道德情調の缺亡せるにより其の行爲は自儘の興味の上に限れり而て犯罪的行爲としよく竊盜などをなし人の門戸を窺ふなり、上に述べし例により患者はよく他人の時計を盜むこれ彼には所有物といふ概念主に缺けたればなり且つ彼には其は他人の所有物なりとの意識全くなし他の患者に在りては『われの』『汝の』といふ概念は甚だよく存在せれどこの所有物の概念に毫も尋常なる情調の伴はざるものありこも亦癡狂なり、患者は他人

憤怒症の行爲に及ぼす影響

感情變換症の行爲に及ぼす影響

の所有物に對する注意謹愼といふ感情全く缺亡せりこれが爲め複雜なる道德上情調或は所謂社會上情調も缺け關係概念の虧缺は終に竊盜をなすに至るなりかゝる人はよく他人の所有物を偸むことを知れど其が不正なる事などの感じなく又感ずること能はず之れ健人の犯罪行爲と區別すべき點なり、健人に在りては假令其は他人の所有物を偸むなりといふことは知れど又他人の物を偸むは不正なることなりとは知れどもよく他人の所有物を竊盜するなり。

病理的憤怒の行爲に及ぼす影響――憤怒は初め制止の狀態にて無言、不動周圍を凝視し體勢强直しこの初期制止に引續きて激烈なる運動を發し突然周圍に對し暴力を加ふるなり、該憤怒の運動性激越症は終に有情物より無情物に及び無闇に破壞するに至る。

病理的感情變換症は行爲の變換症を呈するなり、患者は極めて僅微些細の事にて醫家の冗談にて發揚擧動をなし直ちに悲痛性に變ずるなり、感情定らざるが故に行爲も浮動揚蕩定らざるものなり。

外貌運動
身風
面相
話風

外貌運動(Ausdrucksbewegung)——殊に固有なるは總ての感動殊に身風(みぶり)、面相、話風(はなしぶり)(Gestieulation, Mienenspiel und die Sprachweise)に於ける一言にて蓋へば外貌運動に於ける病理的感動の影響なり、殊に精神病者の身振り、面相等は診斷上重要なり、患者は殆ど全く言語を發せざる場合に於ては殊に之れを察すると肝要なり、則ち各感動及び各感動障礙には每に一定の身振り、一定の面相及び一定の話法の來るものなるが故にかゝる外貌運動を究むれは患者の精神機轉を確かに推知ることを得べく且つ患者に對し問ふべき方向の指導をなすものなり、左に重要なる感動の外貌運動を摘述せむ。

鬱憂症の外貌運動

(一)鬱憂症の外貌運動——單純鬱憂症の身風をいかにといふに、軀幹筋及び四肢は多くば全く弛緩し、腕は弛く側に垂れ、手は緩く膝に在り、頭首は其の重さにより垂れ胸部に接し頤にて支へらる、總ての面相亦奏解し、眼は沈み、視軸は多くは強く集り、下顎は弛く垂下し、口角は頤三角筋により下方に引かれ、眼瞼裂は眼輪匝筋の收縮により少しく狹まり

眼眉は下方に押され只だ其の眉頭のみは強く高く牽引せらる、其は眼輪匝筋の總ての收縮せると其の纖維の一部は輪匝筋の聯合をなせる眉間の方向に於て前頭筋の纖維と綜合せるが故に同時に前頭筋の中部の強く收縮するによるものなり、故にこの眼輪匝筋の纖維を稱して皺眉筋といふ皺眉の作用は鼻根の皮膚に縱の皺を生ぜしめ眉頭をして鼻根の方に近かしむ、同時に前頭筋は收縮して縱の皺を額に生ず、かくて眼眉は全く上方には牽かれずこれ眼輪匝筋は上に述べし如く反對に收縮するが故に只だ輕く上方にひかるゝなり、只だ眉頭は輪匝筋の皺眉纖維の斜めに經過せる爲め前頭筋の上方牽引するに引かるゝなりかくして鬱憂症の顏貌に固有なる眉の眉頭の上方に向ひ曲れる狀態の現はるゝなり、就中前頭筋の收縮は中央部に限れるが故に他の額面には皺よらずして只だ額の中央部に於て鼻根の縱の皺の上に四乃至五の横の皺を生ずるなり、他の場合に於て全額面に收縮を起し、全額面に輕き長くひきたる横皺を呈するものあり其の中央線は屢中絶

なり眉頭は通例少しく下方に曲るものあり。

眼は多くば涙液缺乏せり、多くのかゝる患者は、泣くこと能はざることを語るものなり、涙腺の分泌は影くは病理的に停止され眼は固有の光を失ふものなり、これ等分泌腺の障礙他の呼吸、血行などは更に解説すべし。

鬱憂症の話風は毎に固有の變化をなすものにして、患者は緘默せるか或は聽きとり難き低聲にて語る、發聲は甚だ弱く恰も喉頭病に侵されたらむかと誤らむばかりに弱くなり行くものなり、言葉と言葉との間、且つ屢〻緩りの間に長き間隙あり屢〻唇を動かすのみなることあり若し患者が悲傷の聲を發し自己の悲しさを物語らむには其は未だ單一なる鬱憂症に罹り居るものなること認知さるゝなり、之れを要するに單一鬱憂症の身風の影響は輕僅なり。

苦悶の外貌運動

(二)苦悶の外貌運動――苦悶に在りては全身諸筋は多少緊張せり、この緊張は全く一樣にして患者は數日或は數月間も全く不動の狀態にて坐臥佇立するものあり、屢〻かく緊張せるは身體諸筋の苦悶の身風を呈するものにして所謂苦悶運動を現はすものなり、脚は忽ち牽引し、忽ち伸展し、腹部は深く陷沒して緊張し、上體は或は前方に或は矢を射る如く彼此に向き變はり、腕は總て關節屈曲し、稀に手は硬く折り重ぬることあり、患者は手を拱き、或は指を握り、多くば其の苦悶の爲め指或は爪を嚙むものあり、他の者に在りては毫も感覺異常なきに全身を搔き破る者あり、其の他手の苦悶運動は非常に多種多樣なり、面相を見れば、眼眦開き、眼球突き出で、額には深き横皺を生じ、鼻根には縱皺を混へ眉線はなほ上方に在り、口角は下方にひかれ、頭首は輕く後方に曲り、鼻腔は多くは開き、鼻翼は扛擧せられ、呼吸は不規律にして淺く且つ呼吸靜止の狀態なるか或は深く長く引く呼吸をなすことあり、言語は遮られ殆ど澁滯して言葉と言葉との間隔り隔語を呈することあり、又其の他身體諸筋の苦悶の單純なる制止の影響を受くる時は毫も激越症なく單純なる身體諸筋の緊張を來たし言語は完く制止され、患者は全く應答

をなさゞるか或は只だ口唇を動かすのみなることあり、若しまた苦悶の激越性影響現はれむには患者は數時叫喚悲傷し、而も通例涙はいでず、其の苦悶の高度なるものに至りては其の制止の突然打ち破れ劇しき叫喚暴行をなし周圍に危險なることあり、かゝる苦悶狀態に在るものは少くとも座臥せしめ注意することを要す、激越性苦悶の劇しきものに在りては寸時も靜かなること能はず、周邊にさまよひ或は窓に走せ行き立ちて見つ居て見つ周章て騷ぎ或は戸障子を開け放ちてみ、また閉てみ、髮はおどろに振り亂だし、其を掴みむしり、寢褥を擾き廻はし家具を取り散らし、甚しきに至りては、該苦悶の複雜なる苦悶運動は上に述べし無慮の逃走、自殺、周圍に暴力を加ふ或は、放火などの如き苦悶行爲をなすことあり。

發揚症の外貌運動

(三)發揚症の外貌運動――運動は快活に、身風は活潑なり、額は滑かにして眼輪匝筋は殊に其の後部強く收縮するが故に顴顬部の皮膚は外眥より扇を擴げたらむが如く皺より、眉間は寧ろ下方に離れ、涙腺分泌夥

憤怒の外貌運動

多にして眼は光を添へ口角は後上方に牽引せられ鼻唇溝深かし、頰は強くたかまり、屢〻笑ふ則ち短き間代性横隔膜の收縮により呼氣をなし續くに深吸氣を以てす、話風も愉快に定型性なり、言語は流暢にして迅速に或は語漏症を呈し或は、跳飛し或は韻をふみ、いづこを句切りともわかち難き迄に至ることあり。

(四)憤怒の外貌運動――こは鬱憂症苦悶及び發揚症の如く打ち續くものに非らず、通例全身諸筋の緊張を來たし、齒は互に固く嚙ひ緊ばり、屢〻切齒をなし、上下口唇は手易く牽搖し齒列を露出し、額は鼻根部に縱皺を生じ、眼輪匝筋は殊に上部收縮し、頭首は或は搖り廻はし或は曲けられ、腕の諸關節は屈し、手は拳を握り、全身姿勢は今にも進擊せむと準備をなせる如く、憤怒の重きものは或は實際に掴み掛り或は憤怒行爲をなし、躁暴狀態として示さるゝが如き擧動をなす、憤怒の外貌運動の闘格性に亢進する時は患者は床を蹴跳し、毆打狂奔器物破毀叫喚笑聲を放つ、所謂憤怒促迫を呈す、かゝる促迫ある患者の追想は缺漏性なるか

或は又全く缺亡せることあり。

凝呆症の外貌運動

(五)凝呆症の外貌運動――凝呆に在りては全身諸筋全く弛緩し殊に顔面筋の弛緩せるは固有なり、頰部は弛く下方に垂れ、頭首四肢の姿勢はたゞ其の重力により支持され、軀幹また一般に沈抑せり、口は半開き下顎は弛く下り、上眼瞼は眼瞼下垂症とまがふが如く垂れ、患者の狀態いと可憐なり多くの場合に於て患者は眠れるか、醒めたるか、別ち難きことあり、斯る時は患者の上眼瞼を摑み擧げ其を注視し、眠れるか、凝呆症の睡眠姿勢なるかを區別すべし則ち眠れるものならむには其の瞳孔は強く收縮して狹小となり眼瞼を開くや廣くなり患者も目醒むべく、又之れと異り瞳孔は中等度に開き眼瞼を開き光を射入するや否や直に瞳孔縮小するものは凝呆症の睡眠樣姿勢なりと知るべし。

感動變換症

(六)感動變換症に於ける外貌運動――に在りては患者の顔貌は感動の變動により一樣なる速度にて變換せず寧ろ固有なる混合性顔貌をなし所謂笑ひ泣きの面相をなすこはまた屢、實際發揚及び悲哀の觀念の

同時に存在するに相當せり。

聯想障礙に基ける行爲

其四　聯想障礙に基ける行爲

最も主要なるは聯想の一般或は外形障礙に於ける行爲の影響なり則ち聯想の疾速、遲徐、不聯合、等は大に其の運動、行爲の上に影響を及ぼすなり夫の感覺及び觀念域なる皮質興奮を運動域に移轉することは之れ唯一證候のみ、唯全聯想機轉の終決のみ、偖てはこの障礙も亦爾他の聯想障礙と一樣に論述すべきことといふ迄もなきことどもなり。

運動機能疾速症

(一)運動機能疾速症(Beschleunigung der motorischen Actionen)

運動激越症

運動促迫症

速動症　運動機能疾速症は皮質聯合の一般疾速症の部分的證候にして即ち前に述べし奔想の調節的證候或は附隨證候なり、蓋しこは其の細胞の興奮機の亢進せると共に其の聯合徑路の傳導機能の亢進せるに因るものなり、運動性移轉の疾速なるものを約言して運動激越症といひ或は又運動促迫症(Kranklaffte Bewegungsdrang)といふ、輕きものは異常なる多辯症、面相變動亢進症を現はし、重きものは無制止となり異常に疾く語り語漏

證を現はし、音聲は屢調子高く呼ふが如くまく叫ふが如し、面相變換の單純なる亢進症に在りては屢、夥しく顔を歪がむるものにして殊に若年患者に然り、身風も一樣に亢進し患者は物語る間休みなく手を振り、手眞似をなす、なほ述ぶべきはかゝる外貌運動域に於けるが如く皮質聯合の一般疾速症の彼の隨意運動域に於ける影響なり、患者は靜かに居座すること能はず、斷へず飛び廻はり躍るが如く舞ふが如き歩行をなす殊に女性に然り、院外患者は終日其處此處と遊び歩きしばしも休むことなし、かくて諸所を徘徊し歸ることを忌れ漂泊の身となり途上發狂人として警羅の護送を受くるものあり、其の働作好きとなるや非常の熱心と疾病性の敏捷とを以て種々雜多の仕事に着手するも短時にして飽き一事を放棄して他事に移り其も暫時にして放置し平然たり、運動促迫あるや氣隨の場所に至り働き、依頼も受けざる他人の庭園の耕地に入り耘り、知人の宅に詣り洒掃をなすものあり殊に女性に在りては容貌を粧ひ服裝を飾り、白髮の老婆にてなほかつ紅粉を抹し

躁暴症

運動激越症の區別

原發性運動促迫症

華衣を着くるものあり、鬢枯れたる老翁なほ艶媚たる美服を纏ふものあり、髮を梳ること日に幾度、且つ結び且つ解き、轉々理髮師を換へ沐浴盥洒日もまた足らず、かくて、時日を經過するものあり。

運動激越症の高度に進むもの躁暴狂亂をなすに至り卽ち躁暴症となり其の高度なる時は奔想症と均しく終に前に述べし續發性離想に陷り患者の運動は其の關聯を失ひ、言語をなさゝる、叫び聲を發し、何の意ともわかず面相をなす目的なくして四邊を徘徊し、水車の廻るが如く身を飜へし、廻燈籠の如く身を輾轉し、忽ちにして跳ね上り忽ちにして大地に伏し、其の運動促迫症の堪へ難きに至るや、衣を脱きて引き裂き、寢具を排除し器具を毀ち、戸を叩き床を踏み鳴らし、ともすれば他人を毆打し易く總て襲擊性なり、僅微の刺戟も非常なる暴動をなすことありこれが爲め犯罪上行爲をなすもの多し。

聯想疾速の分類に隨ひ運動激越症を分つこと左の如し。

(一)原發性運動促迫症――こは原發性奔想症に一致し且つ殆ど毎に其

と共に現るゝものなり、唯り痲痹狂の如き機質的及び質病に於ては屢、毫も奔想に一致することなくして運動激越症を呈することありこは蓋し其の局處に於ける實際の病的機轉の運動域に刺戟となりて作用し一致するものなり、之れやがて該症は皮質聯合の一般疾速症の部分的證候にして他の精神病證候に歸すること能はざることを證するものならずや、原發性運動促迫症に亦發揚性感應を混し且つ一定の精神病の一定の關係に於て現はるゝ運動促迫症をも算入す、例之躁狂、妄想狂の奔想狀態、痲痹狂の發揚期に於ける之れなり。

續發性運動促迫症

(二)續發性運動促迫症――この方面に屬するものは。

(一)劇しき幻覺即ち幻覺性激越症、稀に劇しき妄想

(二)亢進せる感動即ち感動性激越症――發動の一般に皮質聯合の陽性前徴をなし且つ之れが爲め運動移轉の疾速となり夥多となり亢進し行くものなること既に述べたり、殊にこは單純發揚症に於て然り、運動激越症は屢、原發性發揚症と共に來たり多くの場合に於て全疾病經過の基礎上に單に續發證候ならずして却て發揚症は調節的に現はれ之れが爲め原發證候と認めざるべからざることあり、他の場合に於ては運動激越症は疑もなく發揚性感應の續發證候として呈はれ即ち發揚症の結果として現はるゝものにして之れと共に並行し經過し之と共に退消するものなり、亦憤怒及び苦悶も折節、運動激越症の原因をなすことありなほこれ等感動は運動移轉の一般疾速症にて作用するのみならず行爲の一種混合性影響をなすものなり、苦悶に於ても苦悶運動及び苦悶行爲を併發するが故に其の速度、其の劇度は屢、其の苦悶に必至の運動制止を除きては一般運動激越症と誤ることなきに非らず。憤怒に於ても亦其の最終運動移轉隨て其の速度と强度とは單純なる一般運動激越症の移轉と誤ることなしといふべからず、されど制止即ち憤怒の劇き運動移轉の前には制止あり其の移轉の終るや後發結果として弛緩あり、今こゝに述ぶる單純なる一般運動激越症には之れなし此の點に注意すれば鑑識さるゝものなり。

原發及び續發性運動激越症はいかにして鑑識すべきか、こは完全なる觀察をなさでは叶はぬなり、われ〳〵若し各運動興奮性の患者に接したらむには先づ左の問を解釋せむことをつとむべし。

(天)幻覺、又は妄想は成立せりや。

(地)感動障礙の成立せりや。

若し然りとせば。

(人)これ等幻覺、妄想及び感動障礙の成立せし時と運動激越症の成立せし時との關係はいかに？　いづれが先にしていづれが後なりや

これより殊に一方には激越症の强度に注意し他方に於ては妄想、幻覺、感動障礙等に省慮しなほ其の證候の序列を觀察注意すべし、於是幻覺、妄想感動障礙等は證明されだれども其の時に運動激越症の成立せしこと證明されざらむにはこの運動激越症は全く原發性證候なりと認めざるを得ず、こゝに心得べきことあり其は發揚症と激越症とは屢〻

原發、續運動激越症の區別

高度に於て並行し互に調節をなすことこれなり若し然らむにはたとひ感動障礙によく一致せる强さなりとも激越症は原發性と認めざるべからず、之れに反し幻覺、妄想、感動障礙あり而て激越症の之れにいでしものならむにはこの激越症成立は續發性にして患者は、幻覺性に興奮せしなり、感動性に興奮せしなり、されど原發性運動性に興奮せしには非らず、況や幻覺性、妄想性、感動性等の運動興奮の前に現はれし時に於てをやかゝれば更に新しき難問を設る迄もなし、況や續發性運動興は屢〻混雜せるに於てをや、幻覺は患者の行爲上に興奮性に作用し其の內容に隨て劇しき感動を伴ひ或は夥多の妄想を喚起するものなり、之れ等に注意し、原、續、を鑑識すべし。

運動遲徐症

二、運動遲徐症(Verlangsamung der motorischen Action)　運動遲徐症は皮質聯合の一般遲徐症の部分的證候にして彼の考慮制止の附髓的證候なり、曰く運動制止曰く考慮制止曰く記憶耗失これ等を現はす皮質制止の總狀態を稱して昏迷症(Stupor)又遲鈍症といふ、これ既に述

弛緩症
緊張症
強梗症

べし處なり、此の輕きものは單に一定の運動の澁滯症及び遲徐症を來たし、患者に言問ふも事を命ずるも正しく會得すれども其は長く持續せず、言語は且つ斷へ且つ續き、命令されたる運動は遲徐にして恰もためらひたるが如し之れ記憶減退と考慮制止との爲めなり、面相に變動なく身風もとだえたり、日常生活上の行ひも所謂優柔不斷にして計畫更になく喪心の狀態なり其の考慮制止あるにより決心の出現非常に難澁となり患者幸に之れに打克つとするもいかにせむ、運動制止の之を遮るあり其の決行難し。

重きものにありては運動性遲鈍は二樣の狀態にて呈はる其は一は運動制止は完全なる身體諸節の弛緩となり、或は一樣なる強梗性緊張即ち緊張症と稱する狀態を呈するなり、其の他運動制止の外貌は屢隨意運動に限局し數時數日數週硬固せる如く斷へずうち續く運動を呈することありかゝる運動を強梗症といふ、總てこの三樣の運動制止につきてはつぎ〳〵に分ち述べむ。

痿解症
強梗性緊張症

(一)痿解症(Resolution)患者の之れに罹る時は月餘も四肢を動すこと能はざるに至るものあり、下顎は弛く垂れ、四肢の他動的運動には更に抗抵なく、腕を執へて擧ぐれば抗抵なくして擧り、放てば死したるが如く重さにて下に落つ、眼は多くは閉ぢ上眼瞼をつまみ上ぐるも更に抗抵なしこれ眼瞼擧筋も亦一般痿解に侵さるゝなり、殊に膳部を供する時は暫時、痿解中絶し患者は突然、飲食するものあり、他の場合に於ては全く斷食の有樣を呈し、患者は正しく坐すること能はず傍人の之れを介抱し液汁を注入するも直ちに口角より流れ出づ、尿屎は漏泄し盥洒梳櫛も自らなすこと能はず又强き疼痛刺戟も辛く一瞥見を起すのみなり。

(二)單純なる強梗性緊張――は患者の軀幹四肢に現れ各筋簇は殊に强く收縮し種々の姿勢をなす、或は彎曲型に或は伸展型に或は彎曲伸展或は廻前、廻後、廻旋等種々の方法混合し固有なる奇異の姿勢を現はすものなり、眼は固く閉ぢ或は開き或は視軸を並行せしめ或は空所に注ぎ或は稀に實物を凝視することあり、頸は固く互にくひしばり、總ての

他動的運動は非常なる抗抵あり、傍より他動的に運動せしめむと試むれば抗抵なか〳〵に強く且つ其の筋の緊張せることを直接觸るゝことを得一層力を加ふれば只だ手足のみを壓して全身の位置其の儘に之れに隨て動くことあり殊に諸關節の位置、姿勢を變せしめむとする時に甚だしき暴力を加へて之れを變せしむれば直に或る間歇性に或は徐々に原の位置に復す、斷食も亦來る、遺尿便漏も亦然り、疼痛刺戟も、例之深き刺針も頗る高度に達するもたゞ瞬目するのみ、患者は自ら聲を發することなし、痙攣に於けるが如く亦瘖啞を呈するなり。

蠟屈症

(三)、蠟、屈、症(Flexibilitas cerea)又餳屈症――は單純强梗性緊張症に近き一症にして患者は一定の持續性姿勢となるも筋の緊張は甚だしくはなく他動的運動に對しては毫も大なる抗抵なし患者の手をとらへ任意の位置に持ち來せば其の儘に支持すること恰も粘土細工、蠟細工若くは錫細工をなすが如し、かく他人の爲めに其の關節を種々の新なる姿勢に置かるゝも、更に新しき姿勢に置かるゝか、或は疲れ果つる迄は長く同一の姿勢を保ち患者は隨意に自ら其の位置を變ずること能はず、この疲勞は凡そ其の位置をとらしめたる後三四時間にして起るものなり且つかゝる一定の位置に懸垂されたる腕につき筋學的彎線を檢すれば屢、震顫運動の缺存せることを認めらるこの事實は佯狂の鑑別上價値あり、又似非蠟屈症(Pseudoflexibilitas cerea)といふものあり、こは他動的運動に或る一定の觀念の關與し隨意的に之れが共働をなすものをいふ、患者は蠟屈狀態にあり而も之れに其を止むべく命ずれば本來の位置に復するなり。

似非蠟屈症

(四)、强、梗、運、動――は運動制止の反回するにより生ずるものにして或は軀幹の單純なる搖動卽ち前後に一樣に搖るか或は軀幹又は頭首を斷へず廻旋するか就中時餘も環狀旋轉をなし時餘も騎馬樣の運動をなすものあり、こは苦悶運動、迫動など、誤るべからずこの搖動旋轉運動は實際に制止の之れが基礎となり現はるゝものなるが故にたとひこの强梗運動去るとも他種の運動は全く表はすこと出來ざるか或は甚

强梗運動

運動制止の區別
原發性運動制止症

だ遲徐に之れを表はすものなり。

運動制止症の區別

(一)原發性運動制止症――こは原發性考慮制止に一致し且つ殆ど每に之れと共に現はるものにして他の精神病證候には歸せざる皮質興奮の一般遲徐症の部分證候なり、こは屢〻例之鬱憂狂、妄想狂の昏迷狀態及び麻痺狂の鬱憂期に於ける鬱憂症及び苦悶と共に混合し調節的に現はるゝものなり、此の際制止は鬱憂症及び苦悶の單純なる續發證候として現はるゝものに非らずして多くは兩者の間に固有なる交代的關係の成立するものなり、かくてこの原發性制止は多くば單純なる痙攣、或は甚だ單純なる强梗性緊張狀態屢〻蠟屈症を呈するものなり。

續發性運動制止症

(二)續發性運動制止症(非本源性制止、似非昏迷)こは左の場合の結果なり。

(い)一定の幻覺――命令的幻聽に多し曰汝動く事勿れ曰く汝の運動を禁ず、等の如し、其の他眩惑性幻覺即ち絶美なる神佛の幻視ある時、或は一定の恐懼性幻覺こは器械にて締めらるゝが如く幻覺するによる、

殊に一定の幻動ある爲め患者は其の幻覺的運動を除去せむが爲め一定の姿勢をとるによる。

(ろ)一定の妄想――例之われ動かむには死するならむ、われ動かどらむには、十萬億土の往生遂げがたし、或は坐禪をなし卽身成佛をとげむなどの妄想より之れを來たすなり。

(は)一定の感動――屢〻述べし如く陰性前徵を有する感動單純鬱憂症、苦悶は一般皮質聯合を遲徐減退せしむるものなり、又苦悶は多くの場合に於て運動制止の外屢〻亦運動激越症を惹起するものなり、隨て多くの場合に於て運動制止は單純に感動障礙に從屬するものに非らず却て其の感動障礙と或る一定度に於て調節的に呈はるゝものにして且つかゝる場合に於ける運動制止はなほ原發性に歸すべきこと知られなむ、又憤怒の劇しき運動移行の前に於ける運動制止のことは既に述べたり。

(に)生來及び生後の癡狂――癡狂に於ては觀念及び聯絡結合の虧缺

の爲め單に考慮の疾病性遲徐症を來たすのみならず、其の行爲の疾病性遲徐症を來たすものなり。

運動制止の原發性及び續發性の區別――は亦運動激越症の原續區別の原則によるものなり、特に注意すべきは痙攣症なりこは殆ど每に原發性に來たり或は感動性原因に基く運動なれど感動性原因にても多くは單純鬱憂症より來たる者にして苦悶より來たるものに非らず、苦悶の運動制止は多くば强梗性に呈はる者なり、幻覺性制止は屢單に强梗性緊張症として現はれなほ甚だ複雜なる强梗性體勢をなすことあり、殊に臨床上注意すべきは苦悶性制止は恰も續發性幻覺性制止の如く全く突然且つ時々三分時或は一二時間興奮發作を發することあることこれなり、殊に自殺企圖を突然行ひ或は突然暴行をなすことあり、該似非昏迷狀狀態に於ける突然なる激越狀態の生ずるは之れ卽ちこの續發制止は本來の原發性一般制止ならず却て偏頗に支配する一定の感動、感覺或は妄想の爲めにしてこれ等の原障礙の輕易なる移轉はこゝに運動制止を來たし又反對に激越症に變換するものなることを證するに足る。

似非蠟屈症は殆ど恆に妄想或は幻覺の爲めに起る續發制止なり、本來の蠟屈症は原發性制止により來たること多し。

鑑別診斷

(一)痙攣と眞の睡眠と精神病の嗜眠と臟躁及び癲癇の完全なる無意識狀態との區別眞の睡眠は瞳孔縮小の狀態にて區別さるべきこと既に述べたり。

嗜眠は多くば輕易の瞬目、呼吸の輕易不規則、他動運動に對する輕易の共働これ等に注意すべし。

臟躁性嗜眠に於てはよく注視すれば殆ど每に單一なる拘攣性收縮を認むべし殊に咀嚼筋は他の身體諸筋の全完に弛緩せる時もなほ强く收縮するものなり、臟躁性睡眠は稀に四十八時間に上ることあり、なほ注意すれば甚だ屢定型性臟躁痙攣發作或は單純なる搖搦性痙攣を來

たすことあり。かゝれば鑑別一層手易し、又臓躁性睡眠狀態にありては爾他の點に於ける疼痛性刺戟に對してほ反應缺亡し而も强き壓迫に對して過敏なり、例之脊椎、腸骨窩部を壓する時は所謂臓躁狂發作を發することあり(臓躁性帶といふものこれなり)單純痿解に於て一般反應缺亡に罹ることは殆ど例外なり。

本來の癲癇性睡眠は甚だ稀有なり、癲癇に於て屢〻呈はる睡眠狀態は通例實際の昏迷狀態をなすものなり卽ち上に述べしが如し。

其の他、例之機質的腦病及び腦膜炎に偶呈はるゝ意識缺亡狀態と痿解との誤診は充分身體上の診査を遂ぐれば之れを避くることを得べし。

(二)强梗性運動制止と其の他の一般に甚だしく蔓延せる筋の收縮狀態との區別は非常に困難なることあり、こゝにあぐべきは復た臓躁性睡眠狀態なり、臓躁は上に述べしが如き睡眠狀態に止まらず亦甚だ汎延せる緊張性痙攣狀態を來たすことあり、又臓躁性睡眠に於て偶蠟屈症(强梗症)を見ることあり、これ等の鑑別は既往證を充分に探り殊に臓躁帶を檢索すべし、なほ述ぶべきは臓躁には本來の睡眠狀態と共に强梗性緊張を有する定型性昏迷狀態を呈すること、之れなり、此の臓躁性昏迷狀態と臓躁性睡眠狀態との間には移動性轉歸の存するものなるが故に鑑別の要なきことあり。

强梗狀態と中樞神經系統の機質的疾患に偶發する一般拘攣との區別は左の點に注意すべし。

機質的に來たりし拘攣は睡眠中全く去らざるか或は少くとも睡眠中完全に去ることなし、然るに强梗性緊張は睡眠中完全に去る。

機質的に來たりし拘攣は每に甚だ單純なる定型、例之屈、伸、等の姿勢をなせども最も單純なる强梗性姿勢にても既に筋肉拘攣の複雜なる集合或は一二の集合をなすものなり。

なほ又身體證候を充分精査し機質的疾患のありや否やを確むるもよろし、さはいへ單に中樞神經系疾患の主要なる證候現在せれば迚こを以て直ちに其を緊張性筋肉收縮性拘攣などは斷定すべからず、いかに

運動機能の離背
亂心

といふに精神病にも亦中樞神經系の機質的疾患に因くものあればなり即ち麻痺狂の如き老耄狂の如きは或は强梗性狀態に於ける本來の昏迷を來たし或は拘攣を來たすことあればなり、されば其の筋收縮の性質と狀態及び結合とにより拘攣なるか將た强梗性緊張なるかの區別を推定すべきに過ぎず、

三　運動機能の離背(離動、離行) Incoläurenz der motorischen Actionen.

離動は一般離性即ち皮質聯合の一般不聯合の一部分證候にして前に述べし觀念經過の離性の附隨證候にしてこれより現はるゝ總狀態を約言して錯亂又亂心(Verwirrtheit)といふ健人の行爲は現在の感覺及び觀念は嚴正なる關聯の下に附隨し互に發起する各個行爲は一定の感覺及び觀念の支配の下に現はれ相互の關係のいかなるかを認めらるゝものにして即ち其の行爲は動因あり計畫あり目的あるものなれども精神病者に於てはかくの如き精神病に基く行爲の現はるゝ高等なる調節機障礙されこゝに上の離動を來たすものなり、離動の最も輕きも

錯行

のは患者の複雜なる行爲は固有なる計企缺亡を來たす者にして患者は散步をなすに當り、其の計畫と目的とを誤り他處に到に他の行爲をなす、其の逍遥するや最初心に浮かみし處の動因及び目的とは符合せず家庭に於ける作業も亦然り顏面は何の計畫もなささうなる面相をなす、高度の者に在りては各個の行爲は無意義に現はるゝのみならず感覺及び觀念生活との尋常なる關聯成立せず、患者の覺官感覺は全く誤りたる觀念と結合し、正しき觀念と結合すべき時にもなほ誤り即ち全く何の關係もなき觀念に對する運動をなすものなり、この狀態を錯行(Paraprexie)といふ、患者は最も單簡なる事物をへに誤り上草履に尿し、箸にて牛乳を食はむとし口液汁を咀嚼し掴み食ひをなして自己の指を咬むなどの行爲多し、又言語も其の目的を誤り即ち錯語錯詞(Paraphasie und paragraphie)を來たす、終には調節機即ち各個運動內部の聯合帶の障礙を來たし、步行蹌跟めき同一樣に線を步むこと能はず、手腕運動は屢誤りて物を掴む、要するに前に述べし運動失調(ロムベルヒの動搖)

面相倒錯

或は舞踏病と誤ることあり、綴りも最早正しく語をなさず語は句をなさず其の筆をとるや續け樣に記すなり、面相の外貌運動に於けるも亦然り面貌ははや感覺に一致せずして無意味の面相となる、泣くも笑ふも其の感覺觀念に一致せる情調の毫もなく、加之其の語る處の感覺及び觀念とは全く反對なることあり、この一般運動不聯合の部分證候を錯相又面相倒錯(Paraphimie)といふ。

離想は屢病的運動疾速症と共に來たるか或は交互に來たる事あり、この混合狀態を離想性運動激越症(Incohärente Agitation)といふ患者は無意味なる跳飛奔走輾轉し虛空を掴ふ或は打ち無闇に腕を交叉するなどか、る甚しき離想を舞踏運動(Jactation)といふ往時屢之れを大舞踏病と稱しき叫喚の聲と迅速なる勢節にて無關聯なる個々の語を恰も讀經の如く自ら無意味の綴合せ其を喧しく發聲す之れを音誦如話(Verligelation)といふ且つ面を歪めて齒噛をなす、かゝる場合に發熱を兼ぬることと稀ならず卽ち(離動+運動激越症+體溫昇騰=急性譫妄症)之れを

急性譫妄症

離動の區別

急性譫妄症といふ精神病學上に於ては譫妄症を種々の意義に論述適用されどもかくいへば意義明瞭煩累を避くるに足る又譫妄症を無差別症、離想及び健忘の一狀態として語る人あり。

離動の別

一、原發性運動不聯合症(離動)＝＝こは聯想の原發性離想が一の他の精神病證候にあらずして來たると同一の理により來たるものなり、こは屢妄想狂の離想狀態に來たり、癲癇性精神病にも來たり亦麻痺狂及び老耄狂にも偶然之れを發することあり。

二、續發性運動性不聯合症(離動)＝＝は左の場合に來たる。

い、幻覺又は妄想の急速に發し夥多なる時＝各幻覺及び各妄想は一定の行爲をなすものにして短期間に於ける分離性幻覺及び妄想の累出する時は運動性動作とは獨立に其の關聯を全く失ふものなり、運動性聯合はかゝるものにありては疾病性に變化せしに非らず、其の感覺材料と觀念材料と疾病性なるにより行爲も之れが爲め疾病的に陷

りしなり。

ろ、高度の皮質聯合疾速――こは奔想か觀念經過の續發性離想を發する如く高度なる運動激越症は續發性運動不聯合を來たるすによるこの續發性離動をかぬる運動激越症は最も屢、躁狂、麻痺狂の發揚期、妄想狂の奔想性狀態に見る處なり。

は、感動障礙――苦悶及び憤怒は屢、單に觀念經過のみならず却て運動域に於ける移行の關聯を障礙するなり

に、癡狂、生來及び生後の癡狂の行爲は動因なく目的なく計畫なし、こは觀念及び其の聯絡結合の先天性虧缺或は耗失によるこはなほ說くことあるべし。

右樣述べし區別につきてはなほ前に述べし、觀念經過の不聯合卽ち離想の診斷の條下を參照すべし。

上に述べしは聯想外形障礙に基ける行爲なりこゝに聯想の部分的卽ち內容障礙に基ける行爲を述ぶべくなりぬ、卽ち妄想、迫想、辨別衰弱

妄想性行爲

などに呈る、行爲なり。

其の一　妄行(Wahnhandlung)　妄想性行爲

其の二　迫行(Zwangshandlung)　迫想性行爲

其の三　弱行(Defecthandlung)　又虧行、虧缺性行爲

其の他種々各種異形なれどこゝには其の一般要點を述ぶべし。

其の一　妄想性行爲、又妄行

妄想の行爲に於ける影響は既にべたり、各妄想の內容に隨て妄行に種々の類別を呈すること勿論なり、誇大の妄想ある者に於ては其の顏貌に現はる口は堅く閉ぢて眼は高く他人の頭上を越えて銳く且つ頭は塡部にて支へて後に傾き時に高慢的時に侮慢的、秘密的の笑を口唇に表はし、背部の伸筋の收縮するにより體位を眞直に保ち、步調はしとやかにして寧ろ徐々なり、文詞を記するに文字は兎角に大字を用ゐ歐人などは頭字を用ゐると屢、なり且つ走り書きなるが多し、威儀を修飾せむが爲め以前より使ひ慣れたる方言を語る事を耻ぢ都風乃至外國語、

漢語、歐米語などをあやなし、或は日常外國語にて語る者あり或は、加之自家の創意になれる新作言語を以て語り固有の語風をなし、患者の容姿は一般に高まり衣を飾り容を粧ひ衆人とは隔異せる奇異なる擧動をなす、こは患者の叡智の狀態により其の意識の如何を表はすなり、周圍の人とは齒牙にかくるに足らずとなし獨り慢然たり、一層進めば其の誇大妄想の特種の內容に隨ひ特殊の方向により擧動をなす、何宮殿、曰巢鴨宮內省、曰耶蘇復活靈場、曰何天皇後胤行在所など障壁に貼表するに至る、他人と意の合はざるや屢衝突し、其の命令假想の法律に違ふ者あれば其を傷く曰く天誅を加ふるなりと、竊盜、不敬罪などは屢、此の輩の爲す處なり、暗殺などの重き暴行も亦此の輩に見ること稀ならず且つ自己を傷くること鮮し、好色性誇大妄想は屢、手淫を來たす事あり、塗尿、飲尿、食尿なども誇大妄想に見る處にして殊に癡狂者の誇大妄想に之れを見る、曰く、尿は療病の効あり百藥の長なり曰く尿は理想的營養品なり之れを食へば健康を增進すと稱へ自ら之れを飲食し他人にも勸むか、る症は妄想狂にも見るものにして余の見し患者の如きは黃金水と稱し自ら土瓶に貯ひ之れを飲む者ありき陰性妄想にありても種々の行爲をなすもの殊に臨床上必要あるは罪業妄想者の行爲なり、則ち、苦悶の爲め直ちに自殺を企つるものあり、妄想の爲め罪業消滅をはからむとて自殺を圖るものあり、或は自傷し滿足するものあり、色情性の妄想あるものは自己の陰部を傷くるものあり、或は罪業妄想の爲め食ふの資格なし食へば一層罪とならむとの意より拒食症を來たす者あり、貧困妄想に於ても亦食費を拂ふこと能はず高價なる飲食をなすもいかにかせむとの意より拒食症を來たすものあり、罪業妄想はまた周圍に對し暴行をなす事ありこは苦悶やらむ方なくて之れをなす者あり或は其の妄想の爲め自己が重罪を犯し重科に處せられむとの動因あり殺人放火をなす事あり、こは往々鑑定を要する事あり。心氣妄想又疾病妄想こそあはれに笑止なれ、自己の身體の興味せまくなり行きたゞ自己身體の疾病あらむとの觀察に全力を注ぎ日每其の

身體の現證をきはめ所謂身體髮膚之れを毀傷せざらむ事に戰々たり、其の異常の觀察亢進に達するや自己身體の異常に亢進せる保護をなし、轉々醫家を訪ひ歩きて其の意見を聽き諸種の醫書を購ひては之れを讀み自己の假想の疾病の說明を得んとし之を讀みては更に假想の疾患を加へ日常動作兢々として薄氷を履むが如く深淵に臨むが如し或は起立せむには心臟麻痺を來たすならむとて寢褥を離れざる者あり或は自己の身體は起立するの力なしとて臥する者あり之れ就褥症(Atremie oder Bettsucht)なり、或は數週、數月、數年、暗處に閑居する者あり之れ其の假想的の眼病は日光の射入せむには失明せむとするなり、或は肺病に罹れと妄想し感冒に罹らむには命なるらむと妄想し衣を重ね寢具を厚くし數月水にて洗ふことを忌み溫石を懷にする者あり、或は卒中想作の來たりせむやとの恐怖より街衢を歩むに杖を持つか或は壁墻を固持せされば歩むこと能はざるものあり、總ての行爲は自己に限れる利己的なり、實際上、心氣妄想の爲め運動機能の障礙さるゝ事あり、患

就褥症

者は以前に述べし如く心氣性動念は歩行を制し常に其の考慮に介し毫も進行すること能はずとてつとめて之れを避くるも漸次或は突然之れを試みしむれば卽ち患者は其の心氣妄想に打克つこと出來れば今迄一歩も歩むこと出來ざりしものも今は自由に歩むやふなるなり之れ則ち心氣性麻痺の心氣性麻痺たる所以なり、該麻痺は一定の肢體一定の筋簇に於てせず一定の複雜せる運動の上に表はるゝなり其の個々の肢體筋簇の運動は自在にして其の力亦尋常なり、則ち上にひきし例は之れ心氣性歩行麻痺症(Abasie)にして患者に坐臥位に於て其の脚の運動機能を檢すれば完全に保存され而も其をして歩行せしむれば其の複雜なる運動は心氣妄想の結果として障礙さるゝものなり、この關係はなほ其の他かゝの患者に在りてはよく走りよく飛びよく階段を昇降するに地上を行かしむれば一歩も前進すること叶はず地の一點に立ち腕にて無闇に漕く眞似し軀體を動搖し足は大磐石の如く地上に固着せるものあり、他の患者に在りては心氣性妄想は起すこと

不能歩行症

不能起立症

能はず、起立麻痹卽ち不能起立症(Astasie)を來たすことあり又心氣性言語麻痹を來たすことあり、こは屢〻行ヲ行音に來たることあり音を發すること能はず之れを缺きて語るものあり、例之利發、利口の力としたる人といふべきを―ハツ。―コウ。の―キ。とした人あり、又獨逸人などには(Zwei Zwitscherende Schwalben)といふべきを(Wei Witscherende Schwalben)といふが如し、かるが故に佯狂と疑はるゝ事あり、其の他また一定の場所を通過すること能はず或は他の場所も通過すること能はざる者あり卽ち臨場苦悶の心氣症、之れなり、心氣性運動麻痹と臟躁性運動麻痹とは判然たる區別あり、則ち臟躁性のものは意識性觀念の基礎に來たれども心氣性の者は之れに反せり、臟躁性麻痹は精神的機轉に與らざる突然起る精神病合併證なり、例之臟躁患者には其の手腕脚足の運動機能には毫も心氣性の疑ひなくとも而も臟躁性半身不隨症を來たすが如し、之れに反し心氣性麻痹は每に心氣性辨別聯合の致す所なり、心氣性麻痹の外また心氣性運動失調症殊に心氣性痙攣運動を來たすことあり

臟躁性麻痹との區別

こは心氣性精神病には殊に之れを表はし其の證候狀態多形性なり、屢〻手腕脚部の固有なる顫振運動を來たすことあり或は屢〻こは其の感覺異常症或は他の病的感覺によるものあり、この心理學的發生方法をいかにといふに病理的感覺は、われは痙攣に罹りぬといふ心氣妄想を發し而てこの妄想は今や痙攣を來たすやうなるものなり、況んや之れを誘掖するに感覺異常症あり其が爲め初め一定の防禦運動を誘起するをや卽ち患者は初め痙攣發作の初期證候として之れを來たし次ぎ彼の心氣妄想に適應せる實際の痙攣發作を來たすなり、されば心氣妄想はこゝにはいはゞ乘算の法乘數として働くものとやいふべからむ、臟躁性痙攣の定型經過殊に各個時期に於ける搖搦性痙攣、緊張性痙攣巨大運動とやうに定型性列序をとること心氣性痙攣にはなきことあり、甚だ屢〻苦悶運動は痙攣運動を誘發し或は反對に痙攣運動は苦悶運動を誘發することあり、故に前に述べし如く感動促迫を心氣性痙攣運動との間の狀態は注意すべき轉歸を表はすものなり。

なほ注意を要すべきものあり、其は心氣病者の行爲は屢、單に其の妄想の內容によりてのみならず又基礎なる妄想或は其に伴ふ鬱憂症及び苦悶により支配さるゝことある事これなり、患者は終日終夜悲傷し、患者はさばかり自己の身體に注意し之れが保護を計ることに汲々たるに拘らず其の苦悶の極自殺企圖をなすものあり而て其の理由を尋ぬれば自己の疾患は既に膏肓に入り業病いかにとも詮なしとの意にいづるが常なり、又間々、自傷をなすものあり殊に叡智虧缺あるものに之れを見る患者は長時の便泌あらむに其を肛門閉鎖せりと妄想し其を除かむが爲め直腸に杖を挿入し或は小刀を以て肛門を裂くものあり、或は食道閉塞せりとて絕食拒食をなすものあり。

追跡妄想の行爲は最初防禦的なり、患者は戸を網繆し墻柵を設け閉居して出でず社交を避け他人に接することを忌む、食事も自己自ら食品を精撰し自ら調理したるものに非らざれば毒害せられむことを恐れて食はず、加之頻々婢僕を變じ敵の間諜ならむことを疑ふ、偶然巡査の戸口調査の爲め來たるか或は辨護士などの尋ね來たるか或は官衙などの公文の配送せられむには一に追跡さるゝが如く假想し、或は轉々住居を變じ仇の來襲を避け、苦悶感動の劇烈となるや悲傷し叫哭することあり或は奇異なる避難逃亡企圖をなすものあり、其の苦悶堪へ難きに至れば其の追跡を避けむが爲め前後の考へなく二階より飛び下り玻璃の窓を突貫し重傷を負ひ或は死に陷るものあり之れ患者は追跡者或は刑官の手に捕はれむより寧ろ恨を呑みて死するに如かずとの意にいづるなり、患者はかくていつ迄もあるべきに非らず、今迄追跡されし者も一變して追跡者となり今迄防禦的なりしもの今は進擊的行爲となり、攻擊を以て追跡者を防禦せむとし既往不斷追跡されし復讐を遂げむとし攻擊を以て最上の防禦となす於是か患者は非常に危險となり、長く忍び〳〵し怨恨も其の事態と觀念との羅列の突然自制機能を排除するや追跡意想を實際に行動するやうなり、僅微の誘因にてなほ良好なる羅列をなすに至る、偖ては緣も因もなき衆人の一齊